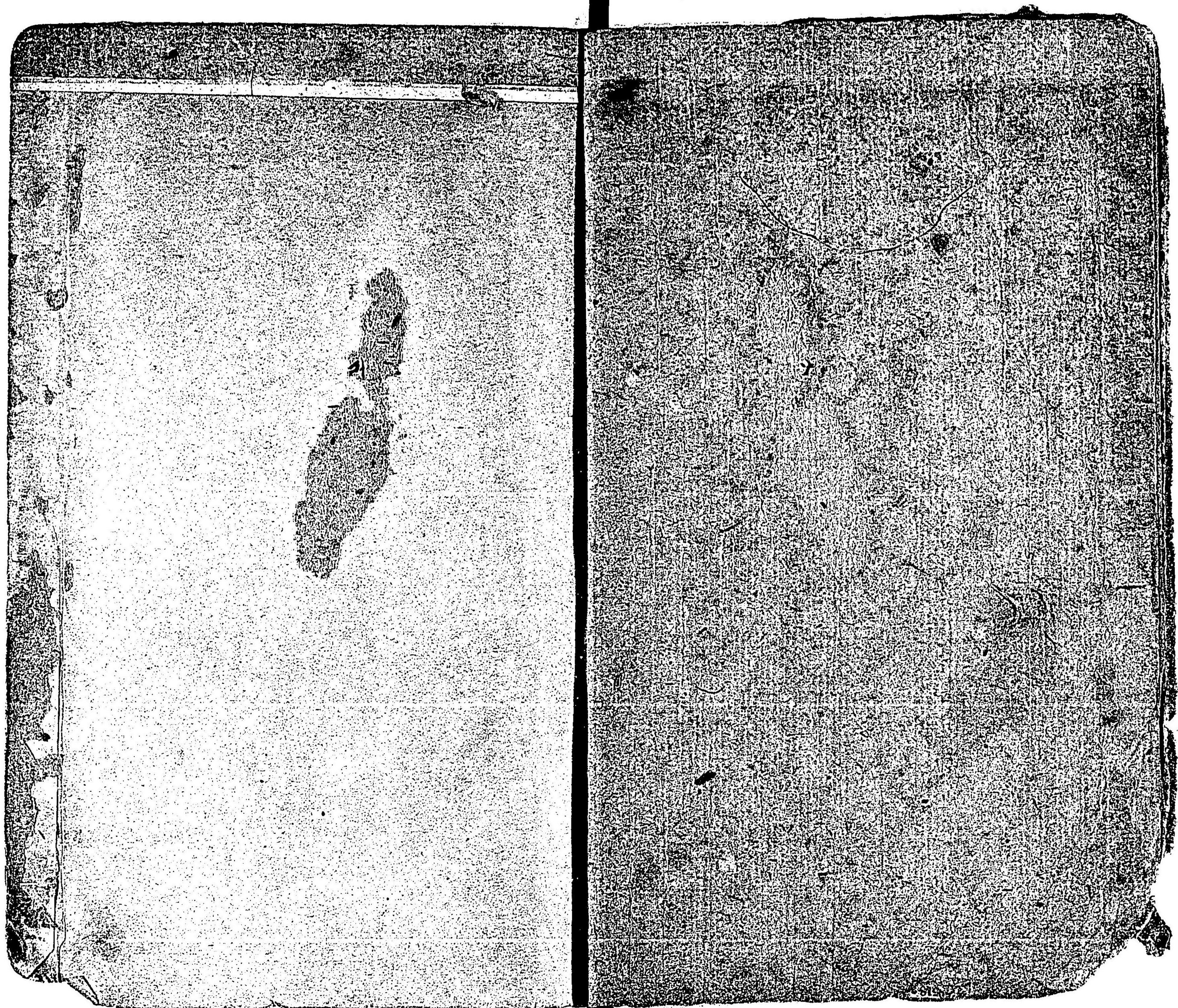


187  
159

古今和歌集詳釋

卷一



金子元臣著

古今和歌集評釋 第一

東京 明治書院

凡例

一、古今和歌集のおもなる註釋書のうち、契沖律師のは、万葉集の餘材にござまり、賀茂眞淵の、更に、それを紹述せし打聽に、す、本居宣長のは、其の語學の楮餘にうつし出でたる遠鏡のみ。香川景樹に至り、始めて、専門に攻究せしが如し。雖も、異見を樹つるに急にして、頗る、舛裁を備へず。爾來、數十年、また絶えて、其の遺響を繼ぐ者あるを見ず。是れ、おのれが淺學を以て、猶よく、この評釋を著はす所以なり。

一、語釋は簡約に従ひ、意釋は極めて嚴正に、一字も改竄すべからざらむ事を期せり。

一、評は、この集の特色を發揮せむと勗めたる結果、おのづから、形式に亘る事多かれど、敢へて又、内容を遺さず、只、歌數の千餘首にも及べるに、紙冊に若干の制限あれば、あながちに、文を舞はし、辭

金子元臣著

古今和歌集評釋 第一

東京

明治書院

凡例

古今和歌集のおもなる註釋書のうち、契沖律師のは、万葉の餘材にこままり、賀茂眞淵のり、更に、それを紹述せし打聽に、す本居宣長のは、其の語學の楮餘にうつと出でたる遠鏡のみ、香川景樹に至り、始めて、専門に攻究せしが如し、こ雖も、異見を樹つるに急にして、頗る、軀裁を備へず、爾來、數十年、また絶えて、其の遺響を繼ぐ者あるを見ず、是れ、おのれが淺學を以て、猶よく、この評釋を著はす所以なり。

一、語釋は簡約に従ひ、意釋は極めて嚴正に、一字も改竄すべからざらむ事を期せり。

一、評は、この集の特色を發揮せむと勗めたる結果、おのづから、形式に亘る事多かれど、敢へて又、内容を遺さず、只、歌數の千餘首にも及べるに、紙冊に若干の制限あれば、あながちに、文を舞はし、辭

を弄びて演繹するを、猛き事とせざるのみ。

一、準據の考索、類歌の旁引等、少なきに失せざる程とし、前人の異説も、必要ある限は引用せり。

一、集序は、一わたりの解釋にこゞめつさるは、この書の本旨とする所にあらねばなり。

一、歌人の傳記は、別に一括して、卷尾に附せむとす。

一、これ、この集を攻むる事、よに年あり。この点に於ては、竊に他に一日の長ある事を信ず。但し、一人の精力おのづから局る所あり。誤謬の見定めて多かるべし。伏して、大方の示教を仰ぐ。

明治三十三年十二月 眞木のもこに於て

著者 眞木もこ

# 古今和歌集評釋

金子元臣 著

延喜以前の歌學界

論

奈良朝のはじめに人麻呂赤人逝きてより、紀記の歌の餘響を鼓吹するもの絶え、平安朝のはじめに大伴家持死にてより、萬葉集の福音を傳道するものあらずなりにき。桓武天皇、専ら、漢土の文明を欽羨し景仰する餘り、青丹吉奈良の都を規模猶小なりと打捨て、四神相應の福地を山背の愛宕に相し、皇居の壯を見ずば、安んぞ天子の尊を知らむと讃嘆せむばかり、大宮柱太しき立て給ひしより、ますます、天下の風尚は唐めきてのみありき。御子嵯峨天皇、殊に、彼の土の文學を嗜好せられて、父帝と同一の新主義にておはしましたければ、鐘愛また、他の兄弟に超え給ひぬ。然るに、御兄平城上皇は、獨、國粹保存の復舊主義にてやおはしましたけむ、人心浮華に流れて、骨なき海月の波に漂ぶが如く、巧に、其の世の風潮を迎へ、流行を追ひて、狂奔せるを憐み、内外尊卑の別を失ひ、國粹を滅絶して、殆ど、漢土化せむとするを慨み給ひ、従ひて、平安の新京を嫌ひて、奈良の舊都を慕はせられて、歌はせ給

187-159

へる御歌、

古里となりにし奈良の宮古にもいろはかはらず花は咲きけり

天下の人は知らず、花のみは昔思はず、奈良の故京に咲けりと、暗に、當世を諷刺して警世の晨鐘となし給ひしかど、朝野上下長夜の眠なは酣なりしかば、慷慨の御心、遂に抑制し給ひあへずやありけむ、其の所信の爲めには、再び、奈良に遷都して、復位を圖らむと思召し立たれしが、彼の弘仁の亂の基とはなりけらし。故に、藤原仲成、同樂子の奸の如きは、只、其の機會を早めたるには過ぎじ。かくて上皇の舊主義、當帝の新主義、方鑿圓柄相容れずして、茲に、一大衝突を來たして、一時擾亂を惹起せし結果は、遂に、上皇の薙髮、仲成等の伏誅に事了りて、全く、舊主義の敗北に歸し、國粹は廢滅せられ、國文學は地に墮ちぬ。これに反して、新主義は戰勝の餘威に乗じ、餘力を振ひて、いよく膨脹し、ますます盛大となれり。況や、前朝より既に遣唐使を派し、留學生をおくり、名僧智識は春燕秋鴻年々に去來せしを、殊に、この時代には最澄、空海の徒、佛法欣求の序に、彼の土の文學を將來せしかば、漢文學の隆盛は其の極點に達し、月卿雲客は、日夜應制の詩賦に忙殺せられ、佳人才媛は、香奩に韻府を藏め、嬌舌に平仄を云爲するに至りぬ。さればこの時代に於ける國歌は、衰微といはむよりは、寧ろ、社會に忘却せられたるなりき。國史に「季世陵遲、斯道已墜」と見わたるは、即ちこれを指せるなり。然るを幸にして、風流宰相小野篁あり。重代の詩人を以て、猶よく斯道を熱心し、左遷流謫の道す

から、謫行吟の五古に氣餒を吐きつゝも、一方には、はのつと明石の浦の朝霧に、烏隠れゆく舟を思ひ、八十島かけて漕出でては、人には告げよと海人の子に誂へなとして、爲めに漸く、殘喘を一隅に保ち得たりき。次ぎて、仁明天皇の四十賀行はせられし時、興福寺の僧徒、五七調の長歌を作りて言はぎ奉りき。其の制作こそ、極めて幼稚拙劣なれ、此の一大祝典に當りて、彼等が最も關係深き、玄かも舉世狂するが如く熱中せる。漢文漢詩をさしあきて、國歌を撰びし其の志の、多とすべきものなくばあらず。國史のこれを稱揚せしもうべなりけり。なほ緇衣界には、僧正遍昭の出現あり。少女の姿まばしどいめむと詠みたる、遊蕩子良岑宗貞の昔より、仁和の朝廷に八十の賀を賜はりし顔老に及ぶまで、吟詠口を絶たず、咳唾玉を轉ばし、此の健忘なる國民の頭腦を刺衝して、これが記憶を回復せしめ、これが原性を復顯せしめ、むと励め、これと同時に、在原業平出でて、非凡の才を振ひ、非常の熱情を馳せ、天を仰ぎ、地に俯して、聲のかぎりを絶叫せしより、げに山彦のこたへぬ山はあらざりけりな。甲應じ、乙和して、天下またわが歌といふもの、ある事を知り、復興の機運やうやくに熱しぬ。是れ家持歿後殆ど一百年許りなり。さて、此の反響、この反動、この反映は、前に、行平、小町、敏行、黒主、康秀、喜撰、等、後に深養父、興風、貫之、躬恒、友則、是則、元方、兼輔、忠岑、伊勢、千里、素性、定文等の歌仙達を輩出せしめ、又、この外の人々、其の名聞ゆる野邊に生ふる蔓の這ひひろがり、林に茂き木の葉の如くに多かりき。公私の歌合は頻々として催され、屏風の料の歌は各人の家集中に見ざる

事なく、献詠の命屢々下され、歌學の研究もやう／＼に興りぬ。これを寛平延喜の國歌中興の時代とすなり。

(四)

### 勅選の壯舉

既に、これらの鉅匠大家を有せる、中興時代の産物として、紀念として、豈に、一事の後世まで貽るものなからざらむや、果然、破天荒なる國歌撰集の勅命は、彼等の頭上に下りぬ。

延喜五年四月十八日は如何なる日ぞや、願れば、國歌の上にとりて、最も忘るべからざる、まかも慶賀すべき嘉例を期められし日ならずや。後撰集以後の二十代集の、胚胎せし日ならずや。即ち此の日を以て、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑に勅して、萬葉集に洩れたる古歌及び以後の歌、撰者達のに至るまでの秀逸、一千百首を撰集して上らしめし。初め續萬葉集といひしを、更に勅によりて、部類を分ち、勅して二十巻と爲し、名づけて古今和歌集といへり。

そも／＼、歌集勅撰の擧たるや、實は、漢詩の擧に倣へるものなりき。漢詩の盛時を羨みて、そが二の舞を試みたるものなりき。さるは、嵯峨天皇の御代には勅を奉じて、小野岑守、菅原清公等、凌雲新集を撰み、再び、仲雄王、菅原清公、勇山文繼等、文華秀麗集を撰み、又、經國集は滋野貞主等數人、淳和天皇の勅を受けて撰み奉りき。かく漢詩の奉勅撰集は、殆ど、其の恒例ともいふべかりしを、

延喜の代に至り、はじめて國歌を以て、これにさし易へられしなり。古人既に、貫之が古今集の序の劈頭第一に、やまと歌はと書けるを、國歌の衰微を憤慨して、漢詩に對せる激語なりと評し、又、歌のさまむつあり唐の歌にもかくぞあるべきとあるを、正しく當時もてはやせる漢詩の六義を掠め取りながら、却りて知らず顔に凌ぎたる文にて、下には嘲り笑ひたる戲業なりと論へるは、誠にさる事ながら、おのれは今一步進みて、こたびの撰集を以て、漢詩に對する復讐的の擧なりと斷言するを憚らざらむとす。さるは、詩家が以て無上の光榮を誇り、無二の寵遇と矜れる撰集事業を恣ひて、直に、わが國歌界の物となし、かれが例を追ひ、かれが式を繹ね、かれが躰裁をうつし、かれが短處弊處に鑑みて、遂に、一部の勅撰集を完成せしは、即ち、百餘年の屈辱を一時に伸べ、鬱懷を端的に開けるものにして、これを復讐的の擧と言はずして何と云はむ。又、この集に、漢文と國文との兩序あり。古來、この先後に就きて大に議論あり。思ふに當時は、詩集はいふも更なり、歌集あるは遊宴行幸の折などの序を、皆、漢文にもせし事は、本朝文粹に見えたる和歌の序、又は、紀氏が新撰和歌の序などを見て知られぬべし。されば、初めは紀淑望が漢文の序のみなりけむを、貫之假名文を以て是れを模し出でて、漢序を排して、歌集にはじめて國文の序を冠せしめ、首尾よく復讐の功を遂げにしならむ。歌人達が得意思ひやるべし。かくて、滔天の勢を以て、一時國歌を閉息せしめし、漢詩は反對に勢力を失ひて、文章博士一味の徒輩の手中に、委任せられはりぬ。

(五)

嗚呼、彼等は成功せり。漢詩に對せる復讐は、殆ど、根を斷ち、葉を枯すまでに成功せり。然して、この成功は、全然、彼等の力のみには非るなり。試に思へ、萬一、この勅撰の下命なからしめむには、果して、いかに。歌人達が、折角の擬勢も、手腕も、遂に施すべき場合、振ふべき折なくして止みなむをや。さては、この空前の壯舉を催され給ひし、醍醐天皇に對ひ奉りて、大に、感謝の意を表し、十分、謳歌讃嘆せざるべからず。然れども、當時、聖算僅に、二十一、二、いかに、明君とは申せ、何ばかりの御思慮もあらせ給はむ。まかも、斯道には、あまり、熱心におはしましける事實を見出し、能はざるを以て思へば、あながちに、宸襟に出でたりとせむも、大早計なるに似たり。さては、輔弼の臣僚に、果してその人ありしか。左大臣藤時平、右大臣源光、既にこれ、凡庸の鼠輩なり。納言參議豈に達識の才俊あらむや。見よく、更に、眼を轉じて、天皇の御背後を見奉れ。その黒幕の内にとこ、この天皇をして稀代の聖帝たらしめし、傀儡師の潜めるを見む。其の傀儡師とは誰ぞ、即ち天皇の御父、寛平法皇宇多にわはします。この法皇、御在位の間より、いたく、斯道に好き給ひて、始めて、宮中に歌合を行はせ給ひ、あるは、屏風の歌や、當座やの献詠を仰せ給ひ、あるは、伊勢の御を更衣として寵せさせ給ひ、素性法師を良因朝臣と召されて、遊幸の供奉をせしめらるゝなど、勵めて、歌人に接近せむとなし給ひし形迹の見ゆるに、上の好む所下これに倣ふは、自然の勢にて、當時の歌學界は形之如く、空前絶後の盛況を呈せしならむ。されば、撰集の勅命の、法皇の大御心に出でたるは、蓋し、

些の疑だもなき事實ならむ。前に、漢詩に於ける嵯峨天皇おはしき。今又、國歌に於けるこの法皇あり。殆ど、同一の位置に、立たせ給ひしものといふべくや。然りと雖も、漢詩の盛衰は、何の痛痒をか感ずるに足らむ。只これ、國歌の榮枯は、實に國文學の運命に關し、國粹の存廢、國威の消長に影響す。かるが故に、寛平法皇の有難き思召は、この快絶なる壯舉を窺めて、首尾よく、歌人達をして、漢詩への復讐を成功せしめ給ひしならむ。

今、この集の撰者達が官途に於ける閱歷を考ふるに、當時、友則は大内記、貫之は御書所の預、躬恒は前甲斐目、忠岑は近衛の府生たりき。皆是れ、微官薄祿の士たれども、斯道堪能なる故を以て、大和歌知れるかどを以て、歌界の司命と召され、活殺自在の特權を附與せられぬるは、こよなき光榮ならずや。承香殿の東の間、垂簾なかば捲き上げ、燈火あかく掲げたる處、四脚の几案に、四人の歌仙相對し、あるは鉛槧を執り、あるは家々の打聽を翻譯し、あるは高やかに歌ひ上げ、あるは密やかに打案じなどして、仁壽殿のものどの櫻の木に時鳥聞くまで、小夜更けぬるをも知らで、とかく定めあへりしは、必ず空前絶後の金玉を撰び出でむの結構なりしならむ。まかも、前代の詩集を凌駕せずばかかじの決心なりしならむ。不幸にして友則は撰集中に歿しければ、躬恒を莫逆の朋友とし、忠岑を門下生とせる貫之、代りて棟梁たりき。元來、友則とは從兄弟の關係あり。歌名また、等儔を壓せし貫之なれば、はじめより、内々には、大方其の沙汰する處なりしならむ。集歌の十分の一は、皆わがのを



擧げたるは、いかに、みづから抱負する事の大なりしかを知るに足らむ。既に、この抱負、この手腕、この勢力あり。漢詩に對する復讐的連動の成功せしも、興りて力なきを得むや。否寧ろ、其主動者の位置に立てりし事は、大方疑ひなきもの、如し。蓋し、貫之は、世舉りて漢土の文化に心酔せる時代に生れて、慷慨の氣みづから禁ずるに堪へず、いかで國粹を保存して、對抗連動を試み、彼が跋扈を制せむと思ひならむ。即ち、専ら國文を筆し、國歌をうたひ、國字を書して、かのく其の奧妙を極めき。かばかりの貫之を主任とし、躬恒友則忠岑等を助手として選ばれたる、古今和歌集の價值、果していかに。

## 古今和歌集

天地割判以來、敬神を以て唯一の理想とし、滿身に磅礴せる、熱血と熱涙とによりて形作られたる、大和民族が特殊の性格は、前には儒教、後には佛教の渡來によりて、異常の變化を來さしもの、如し。奈良朝時代は、猶、敬神の古風を存しき。聖武帝、いたく、佛陀に淫せしめ給ひしかども、其の勢力は、只、宮廷の内に蟠屈し、上流社會を横行するに止まりて、汎く、一般の社會に波及するに至らざりき。されば、其の時代の歌謠や、眞摯の情に富みて、雄渾に、豪放に、勁健に、精神魄力の、遙に、後世に超越したるを見る。たまく、悲觀的思想を歌へるがあるも、そは、十の一にだも足らず。平安朝

となりて、最澄空海が徒、巧に、人情の弱點に投じて、本地垂迹説を提唱し、宗教上の成功を収めしより、敬神の徒は忽ち崇佛の輩と變じ、この世を夢幻と悟り、悲哀に觀じて、其の熱誠は消磨し、その氣力は衰颯して、また、往時の快活なる氣象、豪放なる態度を認むる能はざるに至り、八束鬚胸、前に垂る大丈夫も、今は、風の音、木の葉の落つる響にも、はるくど泣かる、手弱女とはなり果てにき。さらぬだに、長年月を打續きたる太平は、社會の潮流を腐敗せしめて、人心を柔弱浮靡に流れしめしをや。これに加ふるに、漢魏六朝の四六駢麗の、妖冶纖巧、絢爛眼を眩ますの文辭を以てせしをや。宜なる哉、この人情は、よく、かの文辭に調和し、融合溶化して、日に月に、優美に走り、纖弱に陥りて、其の情力の、停止する處を知らざらむとす。是に於て乎、火の如き熱誠を歌へる眞摯の佳作は、其の跡を絶ちぬ。氣魄の充溢したる雄渾の名吟は、又、何處にか覓めむ。況や、弘仁天長の、國歌の暗黒時代を経たるをや。寛平延喜は、中興の時代と稱すと雖も、これらの欠點は、歴々として蔽ふに由なし。これ實に、平安朝時代の歌謠、即ち、この集に於ける歌の短處なり。

賀茂真淵は、嘗て、奈良時代の歌詠を集めたる萬葉集と、この集とを比較して、論じて曰く、  
今、その調のさまを見るに、大和國は丈夫國にして、古は女もますらをに倣へり。かれ、萬葉の振は、すべて、まらすをの手振なり。山背の國ハ、たをやめ國にして、丈夫もたをやめを習ひぬ。かれ古今歌集の歌は手弱女の姿なり。

只、それ丈夫振なり。氣魄充實して餘あるが故に、其の發音も、おのづから、明晰にして、言語の終結に近づく程、ますます確乎として力あるは、堅忍不拔の氣質を現はすもの、これ、少數音を先に、多數音を次にするを憚らざる理由にして、其の五七調なる所以ならずや。只それ、手弱女振なり。忸怩として、引入聲に物言ふが故に、其の發語こそ、や、明瞭なれ、結尾に至りては、全く口籠りて、息の下なるは、優柔不斷の氣質を現はすもの、これ、多數音を先に、少數音を後にせざるべからざる自然の勢にして、七五調の成れる所以ならずや。往古の歌謠は、短歌にもあれ、長歌にもあれ、其の五七調の末尾の七音を折返して歌ひ終るを、普通の形式とせり。然るを、奈良朝の頃ほひ、既に、七五の調胚胎して、萬葉集中の短歌のみを検するにも、三句にていひ切りたる歌、三十有餘首も見ゆるは、夙く、後世風に轉じゆく動機を示せるものなり。平安朝になりては、其の一般の語調は、全然、七五調なるにも關らず、従前の詩形を借るが故に、猶、古調を模擬して、五七に歌へるもあり、七五に歌ひて三句にて切れるも、又、三句まで一旦に、調べあるものありて、古調の、二句四句及び、結句を段節とまたる以外に、初句にても、三句にてもいひ切る事となりぬ。されば、五七七五の兩調を通ずれば、即ち、句毎に獨立して、段節を成し得るが故に、語法句法に、非常の發達を來し、その變化は、著しく複雑に、且、巧緻に赴きぬ。恰も好し、これと相俟ちて、奈良朝時代の歌謠の、幼稚に、單純に、古拙なるに飽きたる結果として、更に、一生面を開き、新機軸を出さむと勵めたるから、其

の構想や、長足の進歩を成し、細の細に入り、微の微を穿ちて、巧緻に、斬新に、紆餘曲折して、よく、人願を解くの語言を弄するに至りぬ。加之ならず、相互の贈答といふこと、盛に行はれ、寛平の頃よりは、題詠殊に流行し、歌合の擧、また打頻りしより、互に、着想の新奇を競ひ、時に、尖巧浮靡に傷くも、一旦の優勝を制せむとする傾向を有し、やうく、自然に遠りて、真情眞詩に乏しくなりぬれども、猶、後世の甚しきが如くなるに至らず。況や、其の用語は、清新を主として卑俗を避け、洗練を経て粗笨を離れ、又、譬喩に、擬人に、諷託寄興に、各種の轉義を應用して、露骨を壓ひて婉曲に就き、あらゆる辞様の變化を盡して、餘韻餘情あらしめ、又、助辞を巧に使用して、一字不言の妙味を生せしむるなど、前古に絶えて見ざる、技術の發達と稱すべし。殊に、其の聲調の圓滑流麗なるや、盤上に珠玉を轉ずる如く、更に、齒牙に障礙し、唇舌に澁滞せず、一唱三嘆、味ひの遠長きを覺ゆるは、蓋し、聲音の開合上下、律呂に協ひて、調和其の宜しきを得たればならむ。思ふに、君之等、萬葉集の屈信盤牙なるに慊らず、意調双絶の選を成さむと欲して、今日、樂家に傳來せる謠物中、神樂歌の譜などの如き、ある一定の調子におしはめて、金石絲竹に謠ひ合せて、一々、撰歌を試みしならむか。あながち、樂器を借らざるまでも、扇拍子あるは、手拍子して謠ひ上げて、さて、採舌を決せしならむか。集中千餘首の歌、盡く、ある一定の調子を以て切揃へたるが如く見ゆるも、恐らくは、これが爲なるべし。かゝれば、この集の歌が、萬葉以外、こゝに、一步を進めて、著想に、歌体に、

修辭に、聲調に、大なる成效を成せるは、古來の歌學者の、齊しく認め來し處にして、これ、この集の長處なり。

(一一)

要するに、この集の長處は、思想を發展する技術の上において、専ら、外面の形式に亘り、短處は、おもに内容の實質に屬し、眞摯の情に乏しくして、腦裏に與ふる印象の、深刻ならざるにあり。この長處短處、果して能く、相償ふに足るか、はた足らざるか。是れ、一大問題なり。元來、詩歌の眞價は、其の内容の如何にある事なれば、打任せては、長短相蔽はざる難もありぬべけれども、よく思へば、其の短處たるや、概して、連城の玉夜光の珠ならずといふに、あるのみ。これを後世の幾多の歌集に比較すれば、盡くこれ、紫々たる白璧の光を放つを見る、さては、大醇にして小疵なるものか。況や、萬葉集の後に於て、敷島の歌のあらず田鋤き返さむとせば、勢ひ、かくならざる事能はず。人の足跡を歩襲せず。様によりて胡蓋を畫かざる點に於ても、亦大に、多とすべきものなくはあらず。猶又、仔細に、この集を點檢せよ。其の理想の多くは、佛教より感染せし悲觀的なる、其の著想の、大旨、主觀的にして、客觀的の文字に乏しき、又、比較的、体言止めの歌の少なき、其のたま、これあるも、寛平以往の前期の作者に屬するが、多き、其の用語に、体言少なくして、活用言と助辭との多分を占めたる事等を發見するならむ。これらの多くは、風調體格に伴へる自然の結果にして、萬葉集の質實雄大なる風格に、一步を遜れる所以。即ち巧緻を以てこの集の一頭地を抽づる所以なり。

又、こゝに、注意すべきは、この集に於ける長歌の、見るに足るものなき事これなり。古今の歌が、其の巧緻の點に於て、万葉の質實雄大なる風格と相對して下らざるは、一に、その短歌の上にとゞまるのみ。其の長歌に至りては、獨、數に於て少きのみならず、調に於ても、想に於ても、到底万葉の長歌と争ひ得べき、資格あるものに非ず。單に冠辭縁語の類を列ねて、纔に、連絡を作して、叨に、長々と鎖り續けたる外、更に篇章段落の格法を備へず。又、語調の變化も、詩形の龐大なるが爲、短歌に於けるが如く便利ならず。五七、若しくは、七五の亂調子は、句句の衝突を來たして、猥雜を極めたり。遺憾ながら、平凡拙劣の一語を以て、これを評し去らむ哉。

この篇、紙數の都合によりて、強ひて、首尾本末を節約して、おしこめて論じれば、雜駁にして、主意の明晰を欠く處ありぬべし。讀者希くは恕せよ。

### 証本及び註釋書

三條天皇の皇女祐子内親王御裳着の折、上東門院よりの御贈物に奉らせける、貫之自筆の古今集は、延喜の御本を相傳せしもの、由なれば、眞に、この集の證本となしつべかりしを、惜い哉、後年焼け失せにけり。貫之が妹の書きしといふ花園左府本も、いかになりにけむ、知らず。今は、京極黃門藤原定家卿の、諸本を取捨して定められたる本を以て、善本とする事とはなれり。これに兩種あり。後

(一一)

嵯峨天皇の嘉祿二年四月に書かれたるを嘉祿本といひ、同じく貞應二年七月に書かれたるを貞應本といへり。又、今世に、貫之自筆本とて、秋の下の巻をのみ傳へたるを古今集打聽に参照せるを、上田秋成の考に、源俊賴朝臣などの筆にやといへり。猶、これらに参考すべきは、この集の歌をも選入せる古今六帖、及び、新撰和歌等の諸書なり。又、楊嶋曉筆に、この集廿卷の異名を、隨分の秘事として挙げたり。参考の爲に、これを示さむ。

- 第一 ふる年の巻
- 第二 はつ花の巻
- 第三 藤なみの巻
- 第四 はつ秋風の巻
- 第五 山かせの巻
- 第六 初時雨の巻
- 第七 さざれ石の巻
- 第八 うき雲の巻
- 第九 もろこしの巻
- 第十 うくひすの巻
- 第十一 あやめの巻
- 第十二 あた夢の巻
- 第十三 おもひ寐の巻
- 第十四 花かつみの巻
- 第十五 朧月夜の巻
- 第十六 わたり川の巻
- 第十七 うき舟の巻
- 第十八 あすか川の巻
- 第十九 ゆふかはの巻
- 第二十 はつ春の巻

又、古來行はれし註釋書は、實に汗牛充棟なり。今、其の一斑を左に示さむ。

- 奥儀抄 古今の部 藤原清輔 顯註 密勘 藤原法橋註 藤原定家勘 北島親房
- 僻案抄 古今の部 藤原定家 註

- 童蒙抄 一條兼夏
- 深秘抄 飯尾宗祇
- 古今抄延五記 淺惠法師
- 異名字解 菊地春林
- 八代集抄 古今の部 北村季吟
- 餘材抄 契沖律師
- 打聽 賀茂真淵
- 遠鏡 本居宣長
- 正義 香川景樹
- 鄙言 尾崎雅嘉
- 座拂 富樫廣隆
- 姿鏡 長野義言
- 評 野々口隆正
- 新注 間宮永好

○印を附けたる外は、皆頭に、古今和歌集の五字を冠すべし。

等、猶、いと多かり。就中、餘材抄、打聽、正義を勝れたりとす。座右に置かば、益を得る事必せり。遠鏡、鄙言、座拂等は、俗語を以て直譯したるもの、亦良好の書なり。奥儀抄以下、八代集抄までの諸書は、歌學の混沌時代になれる舊説にして、顯註密勘と八代集抄とを除きては、殆ど觀るに足るものなし。又殊に、集序をのみ講説せしものあり。

古今集序註 法橋顯昭

古今序註 了譽上人

古今序古註考 荷田東瀛

古今集序考 岸本由豆流

古今集兩序部言 尾崎雅嘉

同 井上文雄

この他、一部分に局れる考證解釋の類を擧げむには、餘に煩しかるべければ、悉く省きつ。

# 古今和歌集序

この集普通の定本は、國文の序を發端に冠し、漢文の序を末尾に附し來れり。國文の序即ち假名序は、紀貫之の筆するところなるが、漢文の序即ち眞名序は、紀淑望の選なりとせり。淑望は貫之の一族なる、當代の老儒、中納言長谷雄卿の子にして、文章生より大學頭東宮學士を経たる漢學家なりけり。さて、この兩體の序、その結構布置よりはじめて、措辞造句に至るまで、殆ど同一なれば、其のいづれか一方は、翻譯の作なる事は疑なし。或は、假名序を感歎して淑望竊にこれを模すといひ、或は、假名序を書かむが爲に、まづ、淑望を去て土代の草を書かしむともいひて、先後更に、一定せず。但、後説は極めて妄ならむ。さるは、貫之は新撰和歌の序を、自ら、漢文に書けりしほどなれば、何を苦みてか、他人の手に、模範の文を借るべき。さりとして、序の文體と事實との二つより推す時は、前説も從ひ難く、殊に、當時の習慣としても、序の漢文ならむぞ、普通と見ゆれば、かたゝ、自序もをかまからずとして、淑望をして書かしめしにや。されど、既に、總論中にも論せる如く、漢文學を排して、國文學を復興せむとするが、貫之の素志なれば、即ち、國文を以て、更に、模し換へられしものならむ。又、この兩體の序ども、正確なる古本にはなかりし由なれば、必ずしも、進奏のものにはあらじ。唯、後日に、私に書加へしものならむか。

やまこらうたは、ひこの心をたねこして、よろづの言の葉こそなれりける。

「やまこらうた」は倭歌にて、わが國の歌をいふ。詩をから歌といふに對へたる名なり。されば、打任せては、歌とのみいふべきを、かくしも書けるは、當時、漢詩の流行盛なりしより、世人、或は、やまと歌、或は、和歌なをいひつらねたりし、語弊を承けて知らざるものなりとて、古來難じ來れり。眞名序に、夫和歌者とあるより、ふと謬れるかとの疑もあれど、猶思ふに、あらざりけり。さるは、これはもとより、詩に對へたる語にて、後の文に、わが歌體を論せむとては、からの歌にもかくぞあるべきといへるに、對照呼應せるにて、更に、不用意の誤にはわらず。「ひとの」は、顯昭の古今鈔に、貫之集に、ひとつとありといひて、其の方宜しきやうにいへるに、左祖する人多し。次の、よろづの言の葉と適對なれば、一わたりは、さもと諾はるれど、わざと、詞を參差せしめて、偏對を作すは、平板の意趣を避くる修辭の法なれば、却りて、本文の方味ひあるにや。「言の葉」は詞なり。草木の葉によせて、心を種といへるに對せしめたり。○この節。この序の全篇に亘りての冒頭なり。譬喩を以て文を成す。婉にして巧。眞名序には「夫倭歌者、託其根於心地發其花於詞林也」とあり。

世の中にある人、こころをさなけきものなれば、心に思ふ事を見る物聞く物につけて、いひ出せせるなり。

「こころをさ」は事と業となり。「つけて」は託してなり。事業繁ければ、心に思ひなき能はず。さて、その喜怒哀樂の情を、花鳥風月などの、見聞く物のうへにつけて、歌ひ出づるが歌なりとなり。○この節は前節の細目にして、前節はこの段の大綱なり。眞名序に「人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言」とあり。

花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、いさこしけるもの、いづれか歌を詠まざりける。

「かはづ」は、今は田中に鳴くかへるをいへど、古くは、山川などに住みて清亮の聲を發する、かじかを云へり。萬葉集などに見ゆるは、皆是なり。夏の末より秋の比鳴けば、水に住むかはづといひて、花に鳴く鶯の、春の物なるに對せり。○この節、前段の餘波なり。生ある者は感あり、感あるものは情あり、情ある者は聲は即ち歌なり。されば、いづれか歌を詠まざる物ある、況や、人としては默止難ければ、歌詠むが當然なりと、勵ませるなり。眞名序に「若夫鶯之嘯花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌詠、物皆有之、自然之理也」とあり。秋蟬を本文は、水に住む蛙といひ換へたる、愈妙なり。

力をも入れずして天地を動かさ、目に見えぬおに神をもあはれこそ思はせ、をここの女の中をもやはらげ、たまけものよみの心をも慰むるは歌なり。

(四)

○この節は、歌の徳を讃嘆せり。力をも入れずしてといへるに、天地を動かす事の容易きやうに聞え、目に見ぬぬと添へたるに、さる幽冥の物深き、鬼や神やをも感せしむる歌の、微妙なる由を思はせたり。真名序に「動天地感鬼神莫近於詩」とあるによりて書けるならむ。毛詩の序に「動天地感鬼神莫近於詩」とあるによりて書けるならむ。

この歌、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり。  
(あまの浮橋の下にて、女神をがみとなり給へる事をいへる歌なり。)

○天地初發の時より出来たりといへるは、即ち、その時、神人化生し、化生しては、おのづから、性情あるべく、されば、歌も必ず出来べき道理なれば、大凡に推究めて、斷言せるなり。さて、この節、前を決し後を起す過渡の句なり。真名序に「然而神世七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、とあるを、貫之自己の見識を以て、引たがへて書けり。

左註に、あまの浮橋云々とあるは、文更に理を成さず。この序註を、藤原公任卿の所爲なりといへる説あり。いかにも、其の頃の人の書加へしものと覺ゆ。甚だ、誤謬多くして、殆ど采るべからず。故に、つきくのも、解釋を省く。

あかあれとも、世に傳はる事は、久方のあめにしては、下照姫にはじまり。  
(下照姫は天稚彦のめなり。せうどの神のかたち、岡谷にうつりて赫くを詠める、えびす歌なるべし、)

それらは、文字の數も定まらず、歌のやうにもあらぬ事どもなり。

あらがねの土にしては、素盞鳴尊よりぞおこりける。

「久方の」は天、「あらがねの」は土の枕詞なり。下照姫は大國主神の女、夫天稚彦の死にたる時、兄味耜高彥根命吊ひに來たるを、居合せたる諸神、容貌の似たるによりて、天稚彦と思ひ違へて取籠れるを怒りて、飛去り給ひし時、其の光儀、二丘二谷の間に照渡りたるを、下照姫の、あめなるや。おどたな機の。うながせる。玉のみすまる。みすまるの。あな玉はや。み谷ふたわたらす。あぢすき高彥根の神ぞや。

と詠めり。素盞鳴尊の、出雲の國にて、「八雲たつ云々の歌を詠まれたるは、下照姫より時代古けれど、天と地との順序に従ひて、前後せしめて書けり。

ちはやぶる神代には、歌のもじも定まらず、すなほにして、ここの心わき難かりけらむ。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、みそもじ餘り一文字はよみける。

(すさのをの命は、天てるおほん神のこのかみなり。女と住み給はむとて、出雲の國に宮造りし給ふ時に、其の所に、八色の雲のたつを見てよみ給へるなり。「八雲たついづも八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を、)

「ちはやぶる」は神の枕詞なり。神代の歌のを、文字五七の定數に詠まざりしは、前の「あめ

(五)

なるやの歌を見ても知るべし。○さて、其の體の素直にしてこの心の分かり難しとは、聞えぬ文なり。けらしも調はず。素盞鳴命よりの句も、前段と重複せり。香川景樹は、これを削りて、人の世となりてぞみそ文字餘り一文字はと續けて、神武帝以後の人間世界となりて、専ら三十一字歌を詠めるの意に解きたり。又、富樫廣蔭の、この一節を全く削去るべしと云へり。眞名序には「逮于素盞鳴尊到出雲始有三十一字之詠、今反歌之作也、其後雖天神之孫海童之女、莫不以和歌通情者也、爰及人代此風大起、とあり。

かくてぞ、花をめで、鳥を羨み、霞を憐び、露を悲ぶ心こそば、多くさまぐになりける。

○上文には歌の始をいひ、是れよりは、歌のさまざまに推移りて、盛になれる状をいへり。花鳥霞露の四物を取立てて、春夏秋冬の時々に見聞物につけて、感情の發する由を述べたり。めでといひ、羨みといひ、憐び、悲ぶといへるは、只、語を變へたるのみにて、皆感ずる意なり。心詞多く云々は、心多く、詞さまざまになるの意を、參差せしめたるなり。

遠き處も、出立つ足もこよりはじまりて、年月をわたり、高き山も麓の塵ひちよりなりて、天雲たなびくまで生ひのほれるが如くに、この歌も、かくの如くなるべし。

「年月をわたり」は時日を経過せしむる意、「塵ひち」のひちは土なり。「生ひのほれる」は生ひ騰れ

るにて、生長するをいふ。○何事も未廣く成行く前節の意を、譬喩を以て再演せるなり。白樂天が座右銘に「千里始足下、高山起微塵、吾道亦如此、行之貴日新」とあるを本文にして、千里云々の句には、年月をわたりと添へ、高山云々の句には、天雲棚引くまでと添へて、一層、誇張したるが、わが物となれるなり。この歌もかくの如くなるべしは、吾道云々の句を其の儘うつせり。如くといふ語を再び云へるは、古文の体にて、わざとおぼめかして、既往のみならず、將來をもかけて云へり。眞名序に「長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜躰非一、源流漸滋、譬猶拂雲之樹、生自寸苗之烟、浮天之波、起於一滴之露」とあるを、詞を換へて書けり。

難波津の歌は、みかどのおはんはじめなり。

(おはさゝきの帝の、難波津にて、みこと聞えける時、東宮を互に譲りて、位に即き給はで、三年になりければ、王仁といふ人の、いふかり思ひてよみて奉りける歌なり。この歌は、梅の花をいふなるべし。)

あさか山の言の葉は、采女の戯れより詠みて、

(葛城のおは君を、みちのくへ遣はしたりける時に、國の司ことおろそかなりとて、設なぞえたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりてよめるなり。これに、其のおは君の心とけにける。)

このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもあけ



る。

(八)

「難波津」の歌は、王仁の、仁徳帝の即位し給へるを祝ひて、

○難波津にさくやこの花冬こもり今を春へとさくやこの花

と詠みて奉れるをいふ。されば「みかどのおほんはじめなり」は、天皇の御世の始なりの意ならむと、古人は解きたれど、本文になき事なるのみならず、假令、其の意と見るも、猶、不完全なる句なり。歌も、王仁の作といふは、古書に據なき事にて、其の體も、仁徳帝時代の格調ならず、今少し後なるべく思はる。又「あさか山」の歌は、舊注に云へるが如き事實ありて、

○淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人をわが思はなくに

と詠める事、萬葉集卷十六に出でたり。「戯れより」は「於是、有前采女風流娘子、左手捧觴、右手持水、擊之王膝而詠其歌」と萬葉にあれば、わざとなまめき戯れつゝ、詠めるなり。「采女」は、孝徳紀に「凡采女者、貢郡少領以上姉妹及子女、容貌端正者」とありて、宮中に出仕して、配膳などを勤むる役なり。「このふた歌は云々」この二首は、一は天皇の御世の始を祝し、一は王の御心の解けたる歌にて、共にめでたき歌なれば、この頃の幼兒の手習の始に、教ふる事となれりしなるべし。殊に、一首は男の作れる歌、一首は女の作なれば、兒の爲には、歌を學ぶ父母の如しといひなせり。いろは歌を、小兒の手習の始に課する事は、いと後世の事なり。眞名序に「至如難波津之什獻天皇、富緒川之籍報太子、或事關神異、或興入幽玄、但見上古歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲教誡之端」とあり。

そもく、歌のさまむつなり。からの歌にもかくぞあるべき。

「そもく」は、前を承けて後を起す語。「歌のさまむつなり」とは、次に擧げたる、そへ歌、かぞ歌へ等の事をいふ。○詩に六義といふ事あるに依り、眞名序に「倭歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」と書けるを承けて、強ひて、いろくの名稱を作りて、歌に六体あるやうにいひなし、詩にもこの六体あるならむと、本末を顛倒していへるは、一時の作意にて、詩をおとし、歌を揚げて、いともまた、かなるものやうに論せるは、紀氏の、斯道を執する熱心の程見つべき業なり。されば、歌の六體の如きは、甚いはれなき事とも多くして、解し難し。からの歌にもかくぞあるべきは、冒頭のやまと歌はとあるに呼應せり。

そのむくさのひこつねは、そへ歌、

(おほささの御門をそへ奉れる歌、「難波津にさくやこの花冬こもり今を春へとさくやこの花」といへるなるべし。)

ふたつには、かぞへ歌、

(「さく花におもひつくみのあぢきなき身にいたつきのいろも知らずて、と云へるなるべし。)

(これは、たゞ言にいひて、物に喩へなをもせぬものなり。この歌、いかにいへるにかあらむ、その心得がたし。うつ／＼にたゞこと歌といへるなむ、これにはかなふべき。)

みつには、なすらへ歌、

(九)

(君にけさめしたの霜のおきていなば戀しむことに消えや渡らむ。とらへるなるべし。)

(これは物になすらへて、それがやうになむるを、やうにいふなり。この歌よく適へりとも見えす。「たらちめの親のかよこのまゆごもりいふせくもあるか妹にわはすて、かやうなるや、これには適ふべからむ。)

よつにはたごへ歌

「わが戀はよひともつきじわりと海の濱のまさごはよみつくすとも、とらへるなるべし。)

(これは、よろづの草木鳥けだものにつけて、心を見するなり。この歌は、隠れたる處なむなき。されど、はじめのそへ歌と同じやうなれば、すこしさまをかへたるなるべし。「すまの海士の汐やくけふり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり、この歌なごや適ふべからむ。)

「つはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし、とらへるなるべし。)

(これは、言のどとのほり正しきといふなり。この歌のころ、更にかなはず。とめ歌とやいふべからむ。「山櫻あくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふかぬ世に。)

むつにはいはひ歌なり。

「此の殿はうへもとみけりさき草のみつばよつばに殿作せり、とらへるなるべし。)

(これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌、いはひ歌とは見えすなむある。「かすが野に若

菜摘みつゝ萬代をいはふ心は神をまゐらむ、これや、すこしかなふべからむ。おほよそ、むくさに別れむ事は、えあるまじき事になむ。)

○そへ歌は風、かぞへ歌は賦、なすらへ歌は比、たごへ歌は興、たごへ歌は雅、いはひ歌は頌に當て、書けるならむ。然れども、其の稱呼、大方當らず。強ひて穴ぐるにも及ばざるべし。むつにはいはひ歌とのみにては、文章整はず。よりにて、景樹は、なりといふ詞を補へり。これ、いと宜しき考なり。さるは、爰にては、一まつ、結束すべき文勢なればなり。又、本文、左註にまた左註あり。今、一字引おろして、これを別ちたり。

今の世の中色につき、人の心花になりけるより、あたなる歌は、かなきことのみいせくれば、色好みの家にうもれ木の、人忘れぬ事となりて、まめなるごころには、花すよき、はに出たすべき事にもあらずなりにけり。

「あだ」は浮薄の意、「はかなきこと」はまかどせぬ言、「うもれ木の」は、人知れぬといはむ序の詞なるを、色好みの家に埋れたりの意に、いひつらねたり。まめなる所「はまじめなる所の意、「花すよき」は穂に出たすといはむ序詞、「穂に出たす」は公然と顯す事なり。○文意は、當世の風尚は、争うて色に媚び、人情は浮華にのみ流れて、また、かなる事はなくなり、浮きたるまどけなき歌のみ出来れば、只、色に耽けるすぎ人の、内々の翫弄物となりて、嚴格なるあたり

へは、公然と持出すべき事は、決して出来ざるやうに成果てたりと、歎息せり。蓋し、詩學の盛なりしより、士大夫たる者は、皆その方に心を入れて、歌は捨てて顧みざりければ、おのづから、男女の間の花鳥の使にのみ用ゐられて、終に殘喘を一隅に保てるをいへるなり。この節、對句を以て仕立てたる間に、あだなる歌はかななき言のみいでればの單句を挿みて、變化を覓め、且、上文の、力をも入れずして、天地を動かしの句に反襯せしめたり。眞名序に「及彼時變澆瀆、人貴奢淫、浮詞雲興、艶流泉涌、其實皆落、其花孤榮、至有、好色之家、以此爲花鳥之使、乞食之客、以此爲活計之媒、故半爲婦人之右、難進丈夫之前」とあり。

そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。

○決前生後の過渡の句なり。歌の起源を思へば、かくあるべき理ならずと、抑へたり。

いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶらふ人々を召して、事につけつゝ、歌を献らしめ給ふ。

○好色の家にもみもて扱ふものには非ず。古は、世々の帝王も、折々にこれを勵まし、獎め給へりとなり。眞名序に「古天子、每良晨美景、詔待臣預宴、莖者献和歌」とある是なり。

あるは、花をそふこて、たよりなき所にまどひ、あるは、月を懷ふこて、あるべなき闇にたどれる、心々を見給ひて、さかたれろかなりこゑ

ろとめとけむ。

「花をそふ」のそふは、戀ふの誤寫ならむと、契沖律師はいひ、又、景樹の、一本に、もてあそぶとあるに従ふべしといへり。いかにも、本のまゝにては聞えぬ事なり。後拾遺集にも、花を翫ぶとあれば、景樹の説宜し。○花を賞翫するより、深山の人氣遠き所に感ひ入り、月に熱心の餘りに、闇夜の案内も知らぬ野山の道などに迷ふ、くさくさのあはれを述べたる。歌の巧拙善惡を帝の見給ひて、歌主の賢愚得失を見分け給ひしならむとなり。こは、眞名序に「君臣之情、由斯可見、賢愚之性、於是相分、所以隨、民之欲、擇士之才也」とあるを襲へるにて、そのもとは、漢士にて、詩賦を課して人を採りし、舉科の制を下に思へる書ざまなり。さるゝ、わが國に、歌を以て科塲を立てられし事なければなり。

あかあるのみならず、さゞれ石に喩へ、筑波山にかけて君をねがひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心に餘り、

○まか、公の上のみならず、私の思ひを述べむにも、歌こそあれ、といへるなり。以下、本集中の歌の意詞を取りて文なしたり。

わが君は千代にまませさいれ石のいはほとなりて昔の燕すまで 賀歌  
筑波根のこのものもに蔭はあれと君がみかげにます蔭はなし 東歌  
いづれも、君上を稱へ奉れるなれば、君を願ひといへり。「よろこび云々」の句は、同意の事を

對句にいひ換へたるにて、準據は定かならず。

富士の烟によそへて人を戀ひ、松虫の音に友を志のび

○人まねぬおもひを常にするがなる富士の山こそ我身なりけれ 戀歌、一  
○ふじの根のならぬおもひに燃えばも之神たに消たぬ空し烟を 誹諧歌  
○君玄のふ草にやつる、古郷はまつ虫の音を悲しかりける 秋歌、上  
これらの歌にて書けり。「玄のび」は暮ふをいふ。

高砂、住の江の松も、あひおひのやうに覺え、

「高砂」は播磨の國、「住の江」は攝津の國の名所にて、いづれも、年舊ふりし松あるを以て顯はれたり。

誰をかも去る人にせむ高さこの松もむかしの友ならなくに 雜歌、上  
われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世へぬらむ 同  
などあるが如し。「あひおひ」は三説あり。一は舊説にて、相逐の義として、互に追ひみ追はれみする、俗のおつつかつの意なり。二は契沖の説にて、相生の義として、同年に生ひたる意なり。三は荷田東瀟、及び加茂真淵の説にて、相老の義とし、互に老たる意にて、假名もあゝと書くべきなり。相生の説、殊に穩なりと覺ゆれば、今はこれに従ひて、己が老いたる心より、松の老いたるをも、昔の友に擬へられて、われと同じ齡のはとにやと思はるゝ意とす。

男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。

今こそわれわれもむかひは男山さかゆく時もありこしものを 雜歌、上  
秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしがまし花も二時 誹諧歌  
これを取做せるにて、男女共に若かりし時を思ひ出でて、年老いたるを歎息する意なり。「くねる」はくねくねとふに同じく、女心に、クヨク物思ふ體をいふ。「歌をいひてぞ云々」は、上文の、さいれ石に喻へ、筑波山にかけて、と云ふより以下の文を、汎く受けたるにて、喜怒哀樂、さまざまなる人の世にありて、「其の心の鬱結し、其の情の切迫する時々には、歌を詠みて慰むるが、古今の通情にて、即ち、歌の徳なり」と稱讚せるなり。

また、春のあしたは花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、

○再び、上文の意を受けて、歌の功德を述べたり。春のあしたに、秋の夕暮を對へて、四季折々の風物の、わが身の感を惹起すを云へり。夕暮、一本に夜とあるはわろし。さて、準據は、春秋の部に同意の歌多くして、いづれを取らぶべくもなし。おしなべて思ひて書けるにやあらむ。あるは、年毎に、鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露水の泡を見て、我が身を驚き、

鏡に映れる白髪を雪に、顔の皺を寄る波によそへたるは、老人の述懐にて、

うば玉のわが黒髪やかはるらむ鏡のかけにふれる白雪物名

難波の浦にたつ波のなみのまわにやおほれむ云々長歌の二節

とあるに當るべし。又、露や泡やの、もろくはかなきに、わが命をよそへて驚くは、左の歌な  
どに據れるならむ。

露をなぞあだなるものと思ひけむわが身も草にかかぬばかりを哀傷

うきながら消ぬる泡ともなりぬらむ流れてとだに頼まれぬ身は戀歌、五

あるは、まのは榮えおこりて、げふは、時をうしなひ世にわび親しかりしも疎くなり、

難波本に、おこりての下に、げふはとあるを正しき。上のまのはに對へるなり。「世にわび」は世に捨てられて衰へたるをいふ。景樹が、て文字をこの下に補へるは、なかくに、理亂れて文を成さず。さて、こゝは、

いにしへの賤のをたまさいやしきもよきも盛りはありし物なり 雜歌、上

世の中は何かつねなるわすが川さのふの淵ぞげふは瀬になる 同、下

なぞ當るべし。親まかりしも云々の句に該當する歌は見えず。

あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の

鳴のはね搔を數へ、

君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山波もこえなむ 東 歌

いにしへの野中のまみづぬるけれども心の心をまをる人を汲む 雜歌、上

秋萩の下葉いろづく今よりやひとりある人のいねがてにする 秋歌、上

あかつきの鳴のはねがきも、はがき君が來ぬ夜は我ぞ數かく 戀歌、五

とあるに當る。かけといひ、汲みといふは、波水の縁語を以て云へるにて、物に寄せて思を述べ  
る意なり。猶、萩には、詠めといひ、鳴には、數へといへるも、同意と知るべし。「はね搔」は  
羽叩きなり。

あるは、吳竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み  
來つるに、

世にふれば言の葉まげき吳竹のうきふしごとくうぐひすぞなく 雜歌、下

流れては妹せの山のなかにあつるよし野の川のよしや世の中 戀歌、五

これ當るべし。「うきふし」は憂き事にて、ふしは吳竹の縁語、ひきては川の縁語なり。「世の中」  
は男女の間をいふ。○上文、春のあしたと云ふより以下、春夏秋冬哀傷戀雜等の種々の歌のま  
まを、あるはの詞を四度まで挿用して、折返し、排對して叙り來りしを、恨み來つるにの一句  
に結束收拾して、更に、後文を引起せり。

今は富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

(二八)

さやうに、物に擬へ、事に喩へて、思ひを述べ來れるに、

ふじの根のならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬ空しけふりを再出

世の中にふりぬる物は津のくにの長柄の橋と我となりけり雑歌上

など、物のためしに引ける、その富士の烟は絶え、長柄の橋は新造せられたりと聞く人は、世の有爲轉變の甚しきを歎く思ひを、歌を詠みてのみ慰めたりとなり。富士の山の烟は、昔より、斷續定めなかりしなり。夙く、清和帝の朝の人、都良馨の富士山記には、常見烟火とあるが、この序書ける頃は、打絶えしならむ。長柄の橋は、破損したるまゝにて、久しく、新造も無く、橋柱のみ残り居しを、宇多帝の時に、更に造り架けられしにや、帝の御歌に、  
つくるなる橋とまゐるくうらむれば思ひながらをいふにぞありける

又、集中、誹諧歌に、伊勢、

難波なるながらの橋もつくるなり今はわが身を何にたどへむ

とあり。されば、「つくる」を、舊註の一説、盡くるの意に解けるは當らず。また、語格も穩かならず。その意ならば、盡さぬなりといふべきをや。

古へより、かく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞ、弘まりにける。

「奈良の御時」は、大和國奈良に都せられし時代を指せるにて、元明帝より光仁帝に訖る、七代九十

年間をいふ。さて、次に、人麻呂、赤人の事をいへれど、二人ながら、飛鳥(文武)藤原(文武持統)の宮の御時の人なれば、打合はず。故に、眞淵は誤として、ならの御時といふより、おほきみつ、の位といふまでの文を削りたり。されど、飛鳥藤原の御代は、汎く、奈良時代といはむも、つきなからぬ程接近したれば、猶、大らかに書けるものとして見むも、可なるに似たり。さて、昔より世々を経て、歌の傳はり來りし中にも、取分けて、この御時より、盛に、流行またりとなり。

かのおほん世や、歌の心をゑろくめたりけむ。かの御時に、おほきみつ、の位、柿本の人麻呂なむ、歌のひじりなりける。これは、君もひこも、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、立田川に流るゝ紅葉をは、帝の御はん目には、錦と見給ひ、春のあした、吉野の山の櫻は、人麻呂が心には、雲かこのみなむ覺えける。

「かのおほん世や」とありて、又「かの御時」といへるは、句は別なれどうるさし。又、「おほきみつ、の位」は正三位なり。人麻呂、さる位に叙せられし事なし。國史に薨卒の事見えざれば、六位以下の人なり。姑く、正六位と見て、六と三との草書の寫誤を承けて、假名書にまたる誤とする説もあれど、猶快からず。「君もひと身合せたりといふなるべし」は、全く、注釋の書体なれば、左註の文の、本文に混れ入りたるならむ。「立田川に流るゝ紅葉云々」は、集中秋歌下、

(一九)

題を知らず、よみ人知らずの歌に、

たつ田川紅葉みだれて流るめり渡らばにしき中や絶えなむ

の左註に、「此歌はある人奈良のみかどの御歌なりとなむ申すどあり。これによりて書けるにや。されど、奈良の御門は平城帝の御事にて、人麻呂と時代いたく違へば、取合せていふべくもわらず。「吉野の山の櫻云々」は、人麻呂の歌に、櫻を雲と見たる意のはなけれど、上に對して云はむとて、あるまじき事ならねば、かくはいへりと、契沖の云へるは、甚しき強言なり。素より、萬葉集にも、何にも見えざる事なれば、妄なり。されば、かの御時に柿本の人麻呂なむ歌のひじりなりけるの一句を存して、他は皆、盡く削り去るべし。「歌のひじり」は歌の名人といふが如し。○此處より以下は、古來の歌に名ある人々の事を論せり。

又、やまのべの赤人といふ人あり、歌にあやしくたへなりけり。

「やまのべ」は、の文字を省くべし。山部と書く、宿稱姓なり。「あやしくたへなり」は不思議に上手の意にて、神妙の字に當る。前に、人麻呂を、歌のひじりといへる故に、詞をいひ換へたり。

人麻呂は、赤人が上に立たむ事かたぐ、赤人は、人麻呂が下に立たむ事難くなむありける。

(ならのみかどの御うた「たつ田川もみぢみだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ、人まろ「梅の花それとも見えすひさかたのあまぎる雪のなべてふれ、は」はのく」とあかしの浦の朝霧に

鳥がくれゆく舟をしぞかもふ、赤人「春の野にすみれのみにと來しわれぞ野をなつかしみひと夜寐にける」)

人麻呂は長歌に長け、赤人は短歌に秀でたり。大伴家持が、族池主に贈れる文中にも、「壯年未過山柿之門」といふ語ありて、そのかみより、一双の上手といはれしなれば、こゝにも、兩者の軒輕を難き由を、詞を文なして書けり。世説に「陳元方難爲兄、季方難爲弟」とあるを思ひて、詞を換へたるならむ。要するに、兩人好敵手にして、優劣なき意なり。ざるを、いたく、この語に拘泥して、上に立たむといひ、下に立たむといへるに、其の間に、褒貶の意を寓せるやうに論ずる者あり。作者の心にもなき横入なりや。

この人々をおきて、又、すぐれたる人も、吳竹のよゝに聞え、片糸のよゝに絶えずぞありける。

「この人々」は人麻呂赤人を指す。この二聖をさしかきて、勝れたる人も、世々に顯れ、時々絶えず出でたりとなり。即ち、奈良朝の末かけて、山上憶良、笠金村、大伴家持等をいへるならむ。「吳竹の」は世の枕詞、「片糸の」はよりくの枕詞にて、合せざる一筋の糸を片糸といひ、それを繕ふことに、時々意なるより、くをかけたなり。○眞名序に「自大津皇子之初作詩賦、詞人才子、暮風繼塵、移彼漢家之字、化我日域之俗、民業一改、和歌漸衰、然猶有先師柿本大夫者、高振神妙之思、獨步古今之間、有山部赤人者、並和歌仙也、其餘業和歌者、綿々不絶」とあるは、上文、い

に、いへより、かく傳はる中にもとあるより、以下の文に當る。

(三三)

これよりさきの歌を集めてなむ、万葉集となづけられたりける。  
「これよりさきの」は、この古今集に採れる歌より以前のを指せるなり。「万葉集」の題號は、万の言葉といふ説と、万代の義といふ説とあり。

かの御時より、年はもゝこせに餘り、世はこつぎになむなりける。

○この一節、原文には、下文、まかあれど、これかれ得たる處得ぬ處、互になむあるの次に入れり。さては、秩序も立たず、連絡も亂れたり。今は、此處に引上げて、其の意を疏通せしむ。

「かの御時」は萬葉集撰ばれし時を指せり。難波本にも、とせの下に、に文字あるを善しとす。「とつぎ」は十代なり。萬葉撰集の時より、年數は百年餘、天皇の御代數は十代になるといへるを、逆算すれば、平城天皇の御代に當り、其の大同元年より、この醍醐帝の延喜五年まで、全く、百年になる。眞名序に「昔平城天子、詔侍臣令撰萬葉集、自爾以來、時歷十代、數過百年」とあるに合へり。然れども、萬葉集の、平城帝の世に撰ばれしといふ事覺束なし。清和帝の御時、萬葉集はいつの頃作れるぞと問はせ給ひければ、文屋有季が、

神無月まぐれふりおけるならの葉の名におふ宮の古とぞこれ

と答へ奉りし事、集中雜部に見えたり。ならの葉の名におふ宮は、いかにも、曖昧なれど、猶、奈良朝の義に解くべし。平城帝の朝の意ならば、奈良の御門の宮とやうにあるべきをや。

榮花物語月宴卷には、「昔高野の女帝の御代天平勝寶五年には、左大臣橘卿諸卿大夫等集りて、萬葉集を撰ばせ給ふ」とあり。されど、この御時以後の歌もあれば、大伴家持卿の、奈良朝の末に撰びしならむともいひ、又、諸兄卿の選を、家持卿の、つぎて撰みまならむともいひて、一決せず。萬葉集を見渡すに、平城帝の御代近くの歌見當らざれば、この御代の選には非るべし。蓋し、萬葉の研究は、やうく、村上帝の代に始まれる程なれば、この延喜時代の人達の、撰述の時代を誤りたるも、あながち、難とすべからざるが如し。

こゝに、いにしへの事をも、歌の心をも知れる人、よむ人、多からず、わづかに、一人二人なりき。まかあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、互になむある。

「こゝに」は今の平安京となりてよりの、十代百年の間を指せり。「いにしへの事」は、前後に、屢、いにしへ云々、と書けるを考へ合すべし。神代以降、万葉の頃はひままでの歌に就きたる事實をいふ。「歌の心」は歌の本旨なり。知れる人は、いにしへの事をも、よむ人は、歌のこゝろをも、應接すべき文法なり。「わづかに一人二人」とは、只、少數といはむほどの意にて、後に、六人までも擧げたり。○さて、それも十分完全なるには非ずして、互に、得失ありといひて、上文の人麻呂赤人の二聖に對して、評せるなり。眞名序に、「其後和歌棄不被採、雖風流如野宰相、雅情如在納言、而皆以他才聞、不以斯道顯」とあり。

(三三)



いま、この事をいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなれば  
いれず。

(二四)

○其の得失を論せむに、官位貴き人は、餘り輕々まくするやうにて無禮なれば、憚りて入れず  
といへるは、實は、さる貴人には、この論評に値するほどの資格ある、歌人なき事を紛かせる  
老翁の筆法なり。眞名序に「近代存古風者、纒三三人、然長短不同、論以可辨」とあり。

そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、

「その外には、つかさ位高き人を除きたる外にの意なり。」

僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たこへは、繪に  
書ける女を見て、いたづらに、心を動かすが如し。

「淺みどり糸よりかけてあら露を玉にもぬける春のやなぎか、  
「はちす葉のにとりにまぬこゝ  
るもて何かは露を玉とあざむく、  
さが野にて馬よりちちてよめる「名にめでておれるばかり  
そ女郎花わかれかちにと人に語るな、」

遍昭は、歌の體裁を得たれども、誠實の意に乏しと褒貶せり。女を見てを、近藤芳樹が、かく  
ては、喻の意自他二つに分れて、他の五人の例に適はず、眞名序に「華山僧尤正得歌躰、然其詞花  
而少實、如圖書好女徒動人情」とありて、如の下に、觀の字なし。されば、女のとあるべき由  
論じたるは、當れり。さて、繪に書ける美人は、歌の體裁を得たるに喩へ、徒に、人の心を動

在原業平は、その心あまりて、言葉足らず。いはば、まほめる花の色な  
くて、句残れるが如し。

「月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我が身ひとつはもとの身にして、  
これぞこのつもれば人のおいとなるもの、  
「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも  
なりまざるかな、」

「その心あまりて」は、上の、多くの人の歌の、心を得ぬにさし當てたり。これ褒なり。「言葉足ら  
ず」は趣向感情餘りありて、詞のいひ足らざるをいふ。これ貶なり。まほめるの上に、いはば、とい  
ふ語を補ふべし。つきく、皆あれば、こゝは脱落したるならむ。さて、句の残れるを心の餘  
れるに喩へ、色なきを詞足らずに喩へたり。眞名序に「在中將之歌、其情有餘、其詞不足、如萎花  
雖少彩色而有薰香」とあり。

ふんやの康秀は、詞はたくみにて、其のさま身におはず。いはば、あま  
人の、よきまぬ著たらむが如し。

「ふくからに野邊の草木のまをるれば、うへ山風をあらしむらむ、  
深草のみかどの御國忌に

(二五)

「草ふかきかすみの谷に影かくして日くれしけふにやはわらぬ。」

「詞はたくみ」は褒なり。「其のさま身におはず」は其の巧なる詞の取做しやうは、淺く俗に近き心に相應せざるをいふ。これ貶なり。「あき人」は商人にて、卑俗の者なれば、美服を着せむことの、不釣合なるに喩へたり。「よききぬ」は華美の衣服をいふ。真名序に「文琳巧詠物、然其躰近俗、如賈人之著鮮衣」とあり。

宇治山の僧きせんは、詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。

（「わが庵はみやこのたつみまかぞ住む世をうち山と人はいふなり」）

「宇治山」は山城國宇治の山なり。「きせん」は喜撰にて、宇治山に隠遁せる僧なり。正しくは、宇治山の喜撰法師はとか、或は單に、喜撰法師のとか書くべきを、真名序に「宇治山僧喜撰とあるを襲へるなり。」詞かすか」は其のいひなしの幽玄なるをいふ。これ褒なり。「はじめをはりたしかならず」は、一首の上漠然として聞か難きをいふ。これ貶なり。秋の月は詞かすかなるに喩へて、幽玄の意を表し、始終たまかならずを、その曉の雲に紛れたるに喩ふ。曉は只軽く添へたる語にて、深き意はなし。真名序に「其詞花麗而首尾停滯、如望秋月遇曉雲」とあり。但、喜撰の歌體を、花麗と評せるは、いかゞ。この、かすかと改めたるを、や、當れる。

よめる歌多く聞えぬば、これ彼れを通はしてよくあらす。

○この一節は、喜撰の歌の少なき由をいへるにて、後人の註語なり。誤りて、本文に混れたるものと覺ゆれば、宜しく略ぐべし。

そのこまちは、いにしへのそとほり姫のながれなり。あはれなるやうにて、つよからす。いはゞ、よき女の惱めるところあるに似たり。つよからぬ、をうなの歌なればなるべし。

（「思ひつゝぬればや人の見ぬつらむ夢とまりせばさめざらまじを。」色見えてうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける。「わびぬれば身をうさ草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ、そとほり姫の歌」「わがせ子が來べきよひなりさゝがにの蛛のふるまひかねてまゐるしも、」

「そとほり姫」は允恭帝の妃弟姫なり。艶色衣を徹してかゝりやきければ、時人、衣通郎姫と號けたるを詠れるなり。「流れなり」とは、小町が、この歌風に似たりといふ事にや。紀にこの姫の歌二首ばかり見ゆれば、さのみ上手にもなきを、いかゞ。たしかならぬ事なれば、この一句略ぐべしと、眞淵はいへり。但、真名序にも、小野小町之歌、古衣通姫之流也、然艶而無氣力、如病婦著花粉とあれども、猶なきを穩かなりとす。「あはれなるやうにて」は意詞感ある如きの意にて、褒なり。「つよからす」は貶なり。よき女はあはれなるに喩へ、惱める處あるは、強からぬに喩ふ。「つよからぬは女の歌なればなるべし」の一句も、註の文句の混れ入りたるもの、略ぐべし。

大さものくろぬとは、心こころをかしくて、そのさまいやし。いはゞ、たき木おへる山人の、花の蔭にやすめるが如し。

（おもひいでて戀しき時ははつ雁のなきてわたると人はえらすや、「かみ山いざ立寄りて見て行かひ年へぬる身は老いやまぬると。」）

○上文、五人の評語、皆、褒貶相交へ來れるを、黒主のばかり、そのさまいやしと貶しめたるみにて、褒めたる評のなきは、脱文なるべし。この故に、景樹は、眞名序の「大友黒主之歌、古猿丸大夫之姿也、頗有逸興而跡甚鄙、如田夫息花前、とあるに據りて、心こころをかしくてと補ひたり。上文の例によるに、心こころとは文字を添へむぞ、いと宜しかるべき。たき木おへる山人は、其のさまいやしに當り、花の蔭にやすめるは、心こころをかしくてに當る喩なり。

この外の人々、その名聞ゆる、野邊におふるかつらの這ひひろせり、林にちけき木の葉の如く多かれと、歌このみ思ひて、其のさま知らぬなるべし。

○以上六人の外に、歌人の名の世に聞えたる人、萬の這ひ廣がれる如くに充滿し、林の木葉の如くに多くあれど、みづから詠むを、只、これも歌なりとのみ思ひて、前に述べたる如き、其の本體の趣言は心得ざるならむと、近來の歌道の衰へたるを歎きて、抑へたるは、次に、今上皇帝の、今般勅選の事を仰せ出だされたる美事を云ひて、喜悅の眉を開きたる由を揚げいはむ下

掃へなり。眞名序に「此外姓氏流聞者、不可勝數、其大底皆以鮑爲基、不知歌之趣者也」とあり。かゝるに、今すべらぎの天の下まろしめすことよつの時、こゝのかへりになむなりぬる。

○當帝即ち、醍醐天皇の御治世は、今に、春夏秋冬の四時の、九返往かへれりと、四と九との數字を文にして書けり。この帝、寛平九年七月御受禪にて、この序文をもせる延喜五年は、實に九年目に當れり。

あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで流れ、ひろきおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもちけくおほしまして、

「おほん」は大御の音便にて、接頭の敬語なり。君の御慈愛を波に擬へて、我が國をいふにも、大八洲國の名を用ゐ、行渡る事をも、流れといへり。又、御恩恵を蒙る事を、蔭といふより、東歌の「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし、を下に踏みて、その筑波山の麓よりも、蔭はちけしといへるなり。波と海とに對するに、木蔭と山とを以てまたり。前節をかけた眞名序には「陛下御宇于今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰」とあり。

よろづのまつりでこそを聞き召すいごま、もろくの事をすて給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れど、舊りにし事をもおこし給ふ

さて、今もみそなはら、後の世にも傳はれさて、

○萬機を視給ふ御ひまゝくに、文學技藝一切の事をも、御獎勵なさるゝ餘りに、神代以來の世々の帝の、侍臣等に詠ましめ給ひし事や、萬葉集撰定ありし事などを忘れず、再興し給ふとて、歌集を勅選ありて、只今も御覽なされ、後世にも傳はれとての意なり。二つの、とては、次の節へ係る。眞名序に「思繼既絶之風、欲興久廢之道」とあり。

延喜五年四月十八日に、大内記紀のこものり、御書のごころのあづかり紀のつらゆき、ささのかひのさう官おふとかふちのみつね、右衛門の府生みふのたゞみねらにれはせられて、萬えふ集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らゑめ給ひてなむ。

○「延喜五年四月十八日」は、おほせられてへ係けて見る時は、勅選の命を下されし日となり、奉らしめ給ひてへ係くる時は、撰了奏上の日となる。眞名序は結尾に、「干時延喜五年、歲次乙丑、四月十八日、臣貫之等謹序」とありて、奏上の日の如く聞ゆ。日本紀略、延喜五年四月十五日の條に、「今日御書所預紀貫之、撰進古今和歌集一部二十卷」とあり。その他、扶桑略記、本朝世紀、拾芥抄等、皆同じ。日は十八日に非ずして、皆十五日なり。いづれか誤ならむ。景樹は、五年を下命の日とし、奏上は六年にて、右の諸書の五年とあるは、誤寫ならむとまで云へるは、強ひたり。まかのみならず、撰者中、紀友則は、延喜三年二月に、六十一にして死せる由にて、この集哀

傷部に、貫之忠岑等の悼歌あり。さては、景樹の説の如く、五年四月を下命の日とせば、その前々月の二月に死にたる友則に、撰進を命せられし事とならむ。かかれは、五年四月は、撰了奏上の年月と見むぞ、穩かなるべき。

「大内記」は、中務省中の官にて、詔勅の類を掌る。「御書のごころのあづかり」は、宮中の秘書類を藏むる所の預の役なり。「ささのかひのさう官」は前の甲斐の少目なり。「右衛門府生」は右衛門府の下官なり。「万えふ集に入らぬ歌云々」とあれば、集中に、萬葉の歌七首入りたるは、全く誤なるべし。眞名序に「爰詔大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等、各献家集并古來舊歌、曰積萬葉集」とあり。

それが中に、梅をかさすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又、鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て、妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさくさの歌をなむ選はせ給ひける。すべて、ちうたはた巻、名づけて、古今和歌集といふ。

「梅をかさすより云々」より以下は四季、「鶴龜につけて云々」は祝賀、「秋萩夏草云々」は戀、「逢坂山にいたりて云々」は送別羈旅の歌をいへり。又、「春夏秋冬にも入らぬ」は、哀傷、雜、物名、雜躰、大歌所などの、いろ／＼の歌をいふ。これ、前に奉れるを、更に、部類たる趣にて、眞名序に「於

みづの  
大なる水

是、重有詔部類所奉之歌、勅爲二十卷、名曰古今和歌集、とあるにかなへり。部類せぬ前は、萬葉集の如く、時代の先後に従ひて録せしにや。されば、續萬葉集といへる事、前節に引ける、真名序の句に見えたり。さて、真名序かくれたらば、かく、假名序になき委細の事實を、妄に書き加ふべきにあらず。これを以ても、假名序の方、後なる事を思ふべし。「ちうたはた卷」は千首廿卷といふ事、但、この集の歌數は、千百十首ばかりにて、墨消しの歌を除けば、千九十九首あるを、ちうたといへるは、其の大概を示せるなり。「古今」といふ題號は、前に、萬葉集に入らぬ歌みづからのをも献らまめてとある如く、古今の歌を集められたれば、まか名けつたるなり。

かく、このたびあつめ選ばれて、山老た水のたえず、濱の眞砂かす多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の瀨になるうらみも聞えず、さゞれ石のいはほとなるよろこびのみぞあるべき。

「山老た水」は山より流れ出づる谷水にて、涸る、事なければ、絶えずの序詞に用ゐ、「濱の眞砂」は海邊の小石にて、限りもなき物なれば、數多くの序詞としたり。「飛鳥川の瀨になる」さゞれ石のいはほとなる」は、

世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀨になる 雜歌、下  
わが君は千代にましまさせさゞれ石のいはほとなりて昔のひすまで 實歌  
に據れり。〇かく、本集の成りて、昔の撰集の迹も斷絶せず、世に傳はりて、名歌も多く集れ

る事なれば、今よりは、歌道の、淵は瀨と變るやうに、衰廢する恨もあるまじく、小石の巖となるやうに、ます／＼榮行く喜のみあるならむと、言はざり、さて、飛鳥川の句を山した水に、さゞれ石の句を濱のましまさに應對せしめたり、真名序に「淵變爲瀨之聲、寂々閉口砂長爲巖之頌、洋々滿耳」とあるは、聖代を讀せる詞にて、本文の歌道を稱せる意とは變れり。

それまぐら、詞は、春の花匂すくなくして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは、歌のころには、思へど、たなびく雲の立ちあ、啼く鹿のおまふとは、貫之らが、この世生れて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。

「それまぐら詞は」を、枕詞はと續くるは由なき事なり。まぐらにていひ切るべし。さて、「まぐら」を、舊註、臣等の意と解けるは、真名序に拘泥したるにて、牽強なり。眞淵は、難波本にまろらとあるを執したれど、まろは、自ら、尊大にいふ意にも用ゐられたれば、爰にては適はず。三井高蔭は、われらならむ、われとまぐらと、假字の書体紛らはしといへる、比較的穩かなり。其の他、それがしらを、それまぐらと誤れるならむといへる、又、景樹が、まぐらは諸本多く、枕と眞名に書きたれば、もとは、恐らくは拙の字にて、われら拙とありしならむといへる、門人の説に同意せる、いづれも、煩はしき考なり。「春の花」は句の序詞にて、すくなし、へまで係るには非ず。難波本には春の花のとわり。「秋の夜の」は長きの序詞にて、「長き」はまぐらとては、斯

道に長けたるをいへるなれど、漢語の直譯にて、穩かなる詞にはあらず。「かこてれば」は仮託くる意なり。「かつは」は一方にはの意、「人の耳におそり」は人の聞えを憚る事、「歌のこゝろ」は、歌といふ物の思ふ所の意にて、歌を擬人したり。「たなびく雲」は立ち居の序、「啼く鹿の」は、おきふしの序詞なり。鹿はともすれば、膝折伏せて、起臥しげきものなればいふ。○貫之自身等は、詞草の藻華は乏しくて、虚名のみ道に長けたるやうにいはいはれたれば、一は、人の聞く所を憚り、一は、歌の手前にも恥入れど、起ちても居ても、寐ても覺めても、自分等が、此の如き聖代に生れ合せて、かくの如き歌集勅撰の美譽ある時に遇ひたるを悦びたりとなり。眞名序に、「臣等、詞少春花之艶、名籍秋夜之長、况哉進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌」とあり。

人まろなくなりになれど、歌のこごごまされるかな。

○この道の大聖人麻呂は、既に、死失せたりけれど、歌道は滅びずして、この勅選の集に残り留まれる事よと、今日の盛事あるを讚稱せり。これは、遂に、前節の「柿本人麿なむ歌のひとりなりける云々に應じて、上文を結束し、且、下文を引起せり。次の一段は、この細説なり。眞名序に「嗟人丸既没、和歌不在斯哉」とあり。これは論語に「文主既没、文不在茲乎」とある筆法を承けたり。

たごひ、時移り事去り、たのしび悲みゆきかふこも、この歌のもじあるをや。

「時移り事去りたのしび悲み行きかふ」は、陳鴻が長恨歌傳に「時移事去、樂盡悲來」とあるをさながら用ゐたり。「もし」は文字なり。これを本居宣長の、若しの意と見て、久しくといわれらばへかれる詞とし、あるをやの四字は、次の、あをやぎ、より混れたる誤なるべしとて省きて、「この歌のもしあをやぎの云々と連ねたるはいかに。若しと見ては、前文に、後の世にも傳はれどとある、詔命に適はず。○意は、上古の如く歌ありども、文字なくは傳ふべき業ならぬを、よしや、時世變遷し、諸事盛衰すども、万の事起し給ふ今の聖代は、この歌の文字あるに於てをや」といへるにて、さて、下文を引起して、古を仰きて今て戀ひざらめかもと結ひ止めたり。

あをやぎの糸絶えず、松の葉の散失せずして、まさ木のかつら長く傳はり、鳥の跡久しくとまれらば、この歌のさまをも知り、事の心をも得たらむ人は、

「あをやぎの糸」は絶えずの序、「松の葉の」は散失せずの序、「まさ木のかつらは眞折葛にて、蔓草なり、長くの序、「鳥の跡」は久しくを隔て、ととまれらばにかゝる序の詞なり。○以下、上文に、後の世にも傳はれどとある意を繰返して、細叙せるなり。さて、この歌集の、世に絶えず、散佚せずして、永久に傳はり止まりたらば、歌の本旨をも知り、今度の勅撰の事譯をも辨へたらむ人は、といへるにて、歌のさま、事の心は、上文に、こゝに古の事をも歌のこゝろを知れる人儘

に一人二人なりきといひ、又、歌どのみ思ひて其のさま知らぬなるべしなどあるに呼應せり。  
大空の月を見るが如くは、古を仰きて、今を戀ひさらめかも。

○今より遙か後世になりて、其等の人々が、空なる月を見る如くに、この集に依りて、古を仰ぎ崇び、今を戀慕はすしてあらむやはといへり。「大空の月」は古をたすけ、「見るが如くは」仰ぐをたすけたり。「古を」は萬葉集以後の、この集に載れる、古歌の制作せられし時代を指し、「今を」は、この延喜時代を指し、「戀ひさらめ」は後世を指せり。さて、この古と今とは、この集の題號の本づくところなり。

この文、四六駢麗體の漢文の格調を、步襲して書けるなれば、句を摘み、章を抽く時は、金玉の名句佳句、榮々層々として、燦爛眼を驚かすが如き觀われども、全躰の首尾を通じて論ずる時の、餘に、敷演を助めたる結果、繁褥に過ぎ、冗漫に失して、精神魄力の充分ならざるが如し。貫之の文の至れるものにはあらじ。却りて、集中の歌の詞書を見渡すに、何といふ節もなければ、穩やかにして筆力勁健なり。他にさるべき人もなければ、これも、貫之が筆と覺ゆるを、一は思ふが儘に書流せるもの、一は拘泥する處ありて書けるものなるによりて、かかる相違も出來しならむ。但、この文、後世の歌人の法る處となりて、歌集序體の文の嚆矢たり。

# 古今和歌集卷第一

## 春歌上

ふるごしらに春立ちける日よめる 在原元方

年の内に春は來にけり、一年をこそこやいはむ、今年こそやいはむ

(釋)ふるごしらに春立ちける日 ふるとしは舊年なり。年改まりて後、去年を云ふ。春立ちける日は立春の日をいふ。此の時代には、清和天皇の御世に頒布されし、宣明曆を用ゐたりき。固より大陰曆なれば、大概、正月の始に立春の節ある筈なれど、推歩に多少の出入を生じて、かく前年の十二月中に立春ある事もあり。但、歌は去年の暮によめるにて、年の内、といへり。○よめる の下に、歌といふ語含まれたり。○年の内に 今年のうちにの意。○來にけり 俗言の來タラネといふに當る。けりに歎息の意あり。

一首の意は、年内に思ひがけず春は來にけりな、さては、昨日までの同じ一年のことを、去年といはむものか、それとも、元の今年といはむものかと感ひたるなり。

(評)繁劇なる歳暮中に、周章しくも春の來れるを、意外と思へる趣、にけりといふ詞に籠れり。五句は二句に意相應せり。四句、五句、同じ語法を以て、折返して謠へるは、意詞相愜ひて調の

自然を得、かつ、聲韻の呼應に無限の味あり。又、年といふ語の數多重なりたるは、止むを得ぬわざながら、格別、耳立たぬやうに使ひこなしたるどころ、却りて、作者が手腕の巧を示せり。正月一日を立春の日と慣ひたる心より、春來たりといへば即ち、年も立換るやうに思はれて、去年今年をいづれとも辨へぬさまに、幼く詠めるが、歌の境なり。されど、かやうなる趣向は、陰曆時代に生活せし人ならば、或は、直覺的に感情を惹起す事もあるべけれど、如何にせむ、今は言筈を経ずしては、一首の意たどり難ければ、幾分か妙味を減殺せられむ恐るるうへに、着想理窟に根底したれば、感情塞がりて、只、器用なる事をいひたるものよと思はるゝまであるは、くち惜し。貫之が新撰和歌には、之れを略さたるぞ眼高とはいふべき。さるを、巻頭の面目比類なき事と、北村季吟が評せるは、なか／＼に鈍まし。撰ひ采りて置くべき所なれば、天の春に従ひて此處に載せたるなりといへる、賀茂真淵が説ぞうべなる。

春立ちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やこくらむ

(釋)〇ひちて 浸しての意。〇むすびし水 手に掬ひ上げし水なり。

一首の意は、夏秋の頃暑さに堪へて、納涼すとして、袖の濡るゝをも知らずて、掬ひなごせし水の、この間の冬の寒さに氷りたるを、今日の立春の長閑なる風の、再び、もとの水に吹解かすならむ、さても、四時の循環するは遙なるものよとなり。

(評)初二句は、極めて水に親みしさまなれば、うつなく、夏秋の暑き頃とは知られたり。四句春立つけふのといへる語調の、いかにも打弛びたるに、陽春の景氣躍如たり。さて、春になりたりとて、すぐに氷の融くるものには非ざれども、月令に「孟春之月東風解氷」なごいへる、公界の理に任せていへるなり。又、常の河沼の水なごならば、殊更に思ひ寄する程の感じは起るまじきを、暑き頃、袖まで濡らしてなづさひし水なるから、春立返る今日しも、まづ一番に、風やこくらむと思ひ出でらるゝにて、想の連絡自然に叶へり。更に思ふに、この歌、水と氷との結ぶといふ縁語を思ひ寄して、春風の氷を解くといふを取合せて、結ぶと解くを闘はせたる、巧にはあれど、縁語に纏はれて、目前の實景に疎きはくちをし。されば、場所の有無も判然せず。全跡を想像より成るものとすれば、場所を持たざれども、見やうによれば、現在氷れる水に對して詠めりとも聞ゆ。さはいへ、首尾のびく／＼としたる調にて、いと長閑やかに聞ゆるは、立春の歌にはふさはしき姿なり。其の聊か細やかなるふしの交れるは、延喜時代の歌の特徴と知れ。

題知らず

よみ人知らず

春霞たてるやいづこみよし野のよし野のやまに雪は降りつゝ

(釋)題知らず 此の歌を詠みたる時の事情の、詳に知られぬをいふ。歌の題といふ物を作り設けて盛に詠むは、後世の事なり。依りて、此の集中に題知らずとあるは、後世にいふ題の事には非ずと知るべし。〇みよし野 みは真といふに同じと美稱にて、大和國の吉野をいふ。〇つゝ



働きの重なる意の辭なり

一首の意は、春來れば即ち霞の立つならひなるが、其の長閑やかなる霞の立ちてあるは、何處の空ならむ、此の吉野山には、雪が降りくして、一向に春のけしきとも見えずとなり。

(評)吉野は山深く寒き土地なるが、其の邊に住める人の、春の初に見廻らして、峰には玄かく雪の降れるを、春のえるしたるべき霞は、いづこに立てるならむとて、霞もいまだ立あへぬ初春のさまなる事を思はせたり。詞巧ますして意工に、長け高きは、更に、この延喜時代の風姿にあらす。二句無限の力量あり。三四の句、同じ詞を打重ねていへるは、さひの隈檜の隈河と詠める類にて、調を緩かにせむが爲に、奈良朝時代の歌人が、好みて用ゐたる慣手段なり。さりどて、極めたる古風とも見えねば、大やう、奈良朝のはて、平安朝の最初の頃の作ならむか。さて、詠み人知らずとある中には、作者の知られながらも、其の名を顯はし難き事故あるを、まか記されたるもあれど、そは稀なる特例にて、大方は作者の詳ならざるをいへり。いづれも、昔より傳誦されて、捨て難き歌を擧げられたるなれば、皆高尚にして、時代の古さが多し。二句たたるやとある本もあれど、採らず。

二條の後の春のはじめの御歌

雪のうちれ春は來にけりうぐひすの氷れる涙いまやこくらむ

(釋)二條の後、清和天皇の皇后なるが、東光寺の僧善所密通の事に依りて、寛平八年に后位を停

めらる。後に、朱雀天皇の天慶六年に、勅ありて、本位に復し給へり。故に、この延喜の頃は、二條の后と書くべきにあらずと、契沖律師のいへるが如し。されば、新撰和歌に、詠み人知らずとあるが如く、此の集にも、延喜奏覽の本にはまかありけむを、復位の後に書き改めしものならむと、眞淵はいひ、この歌の前後のを合せて、三首ながら、題知らず、詠み人知らずの歌にてありけむと、香川景樹はいへり、又、富樫廣蔭が、これ及び前後の二首も、二條後の御歌ならむといへるは、歌の風躰をも辨せぬ説にて、更に取るに足らず。○雪のうちれ 雪のあるうちにの意。○うぐひすの氷れる涙 人は泣けば、涙の出づるより、鶯も啼くものなれば、涙あるやうに取做して、さて、其の涙の氷るともいへるなり。

一首の意は、春とも思はれぬばかり、雪の消えずある處へ、意外にも、長閑なる春は來にけりな、さては、雪は勿論、冬より來鳴ける鶯の氷れる涙も、はや、打解くるならむといへるにて、こは、歌の表面なり。

(評)そもく、この後の后位を停められしは、寛平八年九月廿二日にて、やがて、冬なるが、何時、もとの御身の上にならるゝ事ならむと、待伴びしく思ひ給へるうちに、早くも其の冬は暮れ、年は換はれるより、意外と打驚きて、春は來にけりと宣ひ、さて、かゝる憂事、御涙の袖に氷るばかりなるを悲しみ給へる御心より、庭前に、この冬よりさゝ鳴ける鶯も、わが如く涙の氷りて伴びしかりつらむと、思ひ寄せ給ひて、されど、鶯の涙は、この春の來たるに逢ひて、今や解くらむを、わが涙のみは、冬の儘に結ばれて、春の來ぬる心地もせぬがつらしと歎き給へる

なり。答を蒙りて逋息し給へるうちに、はじめての立春に逢ひ給へる御心中、思ひ遣られ奉りて、いと畏こうこそ。かく聯想の上より、鶯にも涙あるやうに詠みなすが、やがて、歌といふものなるべきを、鶯に涙あるべき理なし、又、涙の氷る筈あらむや、作り物にして、實情の歌にわらずと、難する論者もあれど、こは、歌の趣をも知らざる理窟にして、いと傍痛く、第一、詞のうへにのみ泥みて、かゝる深意のある御歌なるを曉り得ぬ、僻説なり。されば、源道濟が和歌十脉にも、この御歌を比興の脉として擧げたるぞ宜なる。但、この歌の風脉は、少し下りて、緘巧の傾向あるは、全く、後世の新古今集の風脉の先をなしたるものならむ。

題をらす

よみ人あらず

うめが枝に来るる鶯はるかけて鳴けどもいまた雪は降りつゝ

(釋)○来る 来て馴れ居るなり。○春かけて 冬より春へかけての意なり。

一首の意は、梅の枝に来馴れ居る鶯の、冬の頃よりこの春へかけて、頻に鳴けども、雪は、いまだに降りつゝして、一向、春めかぬ事よとなり。

(評)この歌の三四の句を置き易へて、「来るる鶯鳴けども春かけていまだ雪は降りつゝとやうに、春

かけてを鶯に係からず、雪に係かる意としたる舊説を、景樹の難じて、さては、來居るの詞いたづらなりといへるは、至極せる説なり。さて、春の物なる鶯は、はや、冬のうちより來りて鳴くばかり、心あるを、冬の物なる雪は、春になりても、今に降りつゝして、甚だ、心無しなりと、雪と鶯とを相對比したるに、いよく、雪の疎ましささま顯れてをかし。況や、初句は、花の咲きたる梅枝にて、所謂、花開き鳥啼く陽春の景氣、眼前に活動せれば、猶降る雪の佗ひしさ、いはむ方なかるべし。

雪の木に降りかゝれるをよめる

素性法師

春たては花こや見らむあら雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

(釋)降りかゝれるを 降りて懸かりてあるを見てよめる意なり。今降りかゝるには非ず。○見らむ 見るらむと同意なり。

一首の意は、花咲く春の時節になりたれば、雪をも花と思へるにやあらむ、昨日まで鳴かざりし鶯の、今日は、雪のかゝれる枝に來て鳴く事よとなり。

(評)あなほぞまし、あれは、冬よりのあなほ雪なるものをといふ餘意あり。自分が花を待つ心より、見馴れたる梢の雪を、ふと、それかど見惑ひたるおろかしさを、鶯のうへに託して、いひ果てたるなり。されば、鶯を嘲れるは、即ち、みづから嘲れるものぞ。この意を景樹は聞誤まりて、いはく、初春のあした、夜のまの雪などの、梢白く降れるを、花よりけに面白く打見るに、折し

も鶯の鳴くを、汝もわが如く愛づらむの意より詠めりといへるは、あらず。さては、初句の春立てばとあるが、いたづらならずや、はの辭の力ある事に注意せよ。冬はさもあらずて、見過ぐしたる雪を、春立てば、花とや見るらむの意なる事を吟味すべし。聲調の圓滑流麗なるが、この歌の特色ならむ。

題をらす

よみ人あらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花に見ゆらむ

或人の曰く、さきのおはさおはいまうち君の歌なり。

(釋)深くそめてし 甚しく思ひまみての意、しは語調を強むる辭。○をりければ をりは居りの意。折りの意とせる説もあれど、僻事なり。○消えあへぬ 消えむとして、未だ消えぬをいふ。あへぬは、渾べて、まか爲むとして、未だ爲竟らぬをいふ。花の咲きあへぬ、日の暮れあへぬ、皆、同意なり。○さきのおはさおはいまうち君 前の太政大臣といふ事、まうち君は、前の君を詠れるにて、天子の御前近く居る君といふ意なり。藤原良房、同基經相繼ぎて、太政大臣たりければ、前後の稱を附して、良房を前の太政大臣といへるなり。前官の義にはあらず。さて、この左註は、後人の書入にて、採るに足らぬ事は、既に、前人の説あり。一首の意は、冬のうちより、志深く、花の事を思ひ込みて居たれば、それ故に、かく消えかゝりて未だ消えざる、梢の雪の、はや、花と見ゆるならむとなり。

(評)雪の花と見え、花の雪と見ゆる趣向は、この集の頃にありては、猶、多少の藝策たりしならむも、今日に至りては、人々道破して、陳腐厭ふべし。奈良朝時代の人丸、赤人、この集のうちにて、業平の諸作などは、いつも新硯を發するが如く、到底、人の歩襲を許さず。蓋し、さばかり摸倣し得らるゝは、まことの秀逸ならざればなり。

三句、もとは、をりけれかとありしを、書き誤されるならむ、結句、奥儀抄(藤原清輔の著)顯本(僧顯照の著)等に見ゆるかどあるは、懸合を思ひて、後に改めしにやあらむと、本居宣長はいひ、否、はじめより、見ゆるかどありつるにて、らむと結べるが非なりと、景樹は論じ、その外の註者も、皆、三句と結句との打合、わろさやうに難じたれど、更に、さる誤なき事は、前條の解釋を見れば明らかならむ。却りて、難者の思はずして、毛を吹き疵を求めたる嗚呼業なり。

二條の後の、さう宮のみやすん所ご聞えける時、正月三日、御前に召して、仰事ある間に、日は照りながら、雪の頭に降りかゝりけるを詠ませ給ひける、  
文屋 康 秀

春の日の光にあたるわれなれとかしら雪なるぞ侘びしき

(釋)さう宮のみやすん所 皇太子を生み奉りし御息所の意にて、皇太子の妃といふ事には非ず。とら宮は東宮にて、春宮と書きて、猶、トウグウと訓む。但、春宮と書くは、皇太子の座す御殿をさしていひ、東宮は皇太子の御身の上に係かる事に書く例なり。御息所は貴人の妾にて、

御部屋様など稱するが如し。故に、今日の稱呼の義とは違へり。さて、東宮は陽成天皇を申せるにて、後に、皇后となり給ひし二條后の、また、女御の列にて、東宮の御息所と申したる時の意なり。○春の日の光にあたる 正月三日の春日の影を受け居るをいふ。○侘びしき つらき意なり。

一首の意は、長閑なる春の日の光の如き、東宮殿下のあり難き御惠を蒙りて、行末憑もしき事と思はるゝ私には候へども、かやうに早くも、頭が雪になる事の、せむ方なくつらしとなり。(評)康秀は、地下の官人なれば、春宮御殿の階下に拜伏して、御息所の御用の趣を承れるに、日はさしながら、泡雪のちら／＼と、康秀が頭上に降りかゝれる間、打拂はむにもすべなくて、其の儘に、拜伏し居たれば、冠は勿論、頭髮にまで、白く雪のたまりし景色の、いかにをかしかりしならむ。さればこそ、御息所も歌は好み給ふに、康秀は有名の歌人なれば、歌詠めと、御所望ありしなれ。康秀則ち、只今の景色を歌の表面として、裏には譬喩を以て、わが述懐を詠めり。東宮は春の宮とも申すより、其の御寵命を蒙れるを、春の日の光を受くるに喩へて、我が身の榮譽ある事を、まづ悦びたる意を顯し、次に、白髪を頭の雪とも譬へいふ事あるを以て、下句は、わが追々、老境に臨みて、餘命なきを歎く意を述べて、とても行末永く、御餘光を蒙りせよとねば、今のうちに早く、御引立給はりたしと願ふ意を含めたり。さすがに、六歌仙の一人に推されたる程の伎倆ありて、二つの譬喩、恰もよく適ひて、無理ならず。表裏二面、いづれよりしても、うまく聞ゆ。加之ならず、咄嗟の際、猶、練々たる餘裕を存して、巧に、わが身

分の卑賤を訴へて、萬一の榮達を冀へるは、この老、なか／＼狡獪なり。かく小利口に、氣轉の利きたる處、即ち、この老の本色にして、輕浮なる、卑野なる、人品を想像するに足る。歌のさ、ま、巧は即ち巧なれど、氣韻の卑さも、これが爲めならむ。紀氏が、商人のよき衣若たらむが如しと評せるも、其故なきにはあらじ。

この康秀の歌に就きて思ひ出だせる事あり。そは、萬葉集に「十八年正月、白雪多零積地數寸也。於時、左大臣橘卿、率大納言藤原豊成朝臣及諸王諸臣等參入 太上天皇御在所供奉掃雪。於是、降 詔、上臣參議并諸王者令侍于大殿上諸卿大夫等者令侍于南細殿、而則賜酒肆宴。勅曰、汝諸王卿等聊賦此雪各奏其歌。」と詞書ありて、其の時の歌どもを擧げたり。これ、天平十八年元正上皇の御前にありし事にて、時節といひ、雪といひ、場所といひ、狀況といひ、事實といひ、殆ど、今と一轍に出でたるものならずや。然して、當時の諸臣は如何に詠みて奉りしか。則ち、左大臣橘諸兄卿は、

ふる雪のふる髪までに大君につかへまつればたふとくもあるかと歌ひ出でたりき。雪と白髪とを取合はせたる趣向も、亦、今と相似たらずや。然るに、彼れは、白髪になるまで仕へまつれば、貴くもあるかと、君恩を海の如しと謝し奉り、是れは、頭の雪となるを侘びしさと、不平を隱約の間に洩らして、私利を冀へり。堂々たる大臣と、地下の小官と、同一に論すべくもあらねど、其の心掛に、雲泥の相違ありとぞいふべき。尤もこれ、強ひて、康秀をのみ咎むべきに非ず。時勢の自ら然らしめしものぞ。さるは、平安遷都後、藤

原氏勃興の機會を作りしより、大鏡に、「藤榮之木枯る」といへりし如く、枯れたるは豈に獨、紀氏のみならむや。勢力なき氏姓の者は、有爲の才を抱きつゝも、陸沈して、終生伏櫪の憾を遺す者多かりけり。茲に於て乎、業平は色に遁れ、遍昭は佛に遁れき。彼の碌々たる者は、只管、藤氏の鼻息を伺ひ、機嫌をはかりて、萬一の榮達を僥倖したりき。司召縣召に申文を捧げて、微簿の官祿を得む事を、畢生の大事とまたりき。されば、彼等の所詠に、何の氣骨かあるべき。何の熱誠かあるべき。催馬樂にはゆる、「骨なき蚯蚓、力なき蛙」といへるは、暗に、時世を當てこすりたる、嘲罵の辭なりしやもはかるべからず。平安朝以後の歌詠が、奈良朝時代に富みたりし、武人的忠憤の意氣を洩らせる、雄大眞摯の作に乏しきは、素より、其の處なり。

雪の降りけるをよめる

紀貫之

かすみ立ち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

(釋)雪の降りけるを、只、雪とのみいふ時は、後世にては、冬季の題なれど、此の時代には、題詠を專とせざりしなれば、冬にも春にも、歌の趣に従ふ事にて、此處なるは、素より、春の雪の降りたるを詠めるなり。○木の芽もはる、すべての草木の冬枯れたるが、春になれば、芽を出だすを張るといふを、時候の春にいひかけたり。春といふ語も、もと、この意より出でていふ事なり。○里も、もは俗言のサヘモの意なり。

一首の意は、霞も立ち、木の芽も萌え出づる時も時とて、泡雪の、ちら／＼と降り來れば、こは不思議、花なきわが里にサヘモ、花の散りけるよとなり。

(評)花を待ち思ふ心より、雪を花と見做すは常套ながら、花ぞ散りけるといはむとては、まづ、花なき里もと、詞を表裏に綾なして、豫め、其が地を作れるが、この歌の手のある處、作者の歌風の細やかなる處なり。花といふ語を折返して用ゐたるは、單に、聲調の諧ふのみならず、大に、語句に力量の入りて聞ゆ。又、花なきは、自分の家の庭わたりの見渡しなるべきを、さりとて、花なき庭もなごいはむには、霞立ち木の芽もはると、大らかにいひ下せる、風情に打合はず。乃ち一轉して、里もの一語を着けたるが、作者の技倆の凡ならぬ處ならむ。詮する所は、とても、花は見らるまじとあきらめし、わが家にも、思ひがけず、花と散りける物のあるが、珍しく面白き意なり。初二句は、只、春といはむとて、其の景色を以て、詞を續けたるのみと説ける人あるはいかに。さばかり、軽く看過すべきならむや。霞は立ち、木の芽は張るより、雪も花と聯想するものなるを。

春のはじめによめる

藤原言直

はるやこさ花やおそまこ聞きわかむ鶯たにも鳴かずもある哉

(釋)○春やとさ花やおそま、春の速さか、花の遅さかといふ意。○聞きわかむ、聞きて判たぬといふ意。○だにも、俗言のサヘモといふに當る。

一首の意は、今年春の來やうの、いつもよりは、ちと早過ぎたるなるか、それとも、春は尋常に來たれど、花の咲きやうの遅きなるか、そのいつれといふ事を判断するには、鶯の聲を聞いて始めて始めて知るべしと思ふを、如何にせしか、其の鶯すら、今以て鳴かざる事よ、何故にこの春は、かく、いつまでも寒きならむとなり。

(評)鶯も鳴かぬは、即ち、春の早きに定まれるなるを、さる理窟に着せずして、幼く詠み做せるが、歌の趣なり。春寒料峭として、梅花も咲かず、もはや鳴きつべき、鶯たにも鳴かぬが待遠さに詠めるなり。初二句、同一の句法を折返したるは、とせむかくせむと、分別に感ひたる、自然の調なり。即ち、年の内に春は來にけりの歌の下句と、同一轍に出づるものぞ。上句の語調強きに過ぎて、下句殆ど負けむばかりなるを、結句の字餘りになれるが爲めに、緩急相應じ、強弱相濟ひて、首尾おのづから相整ふ。

春のはじめの歌

壬生忠岑

春來ぬこ人はいへともうぐひすの鳴かぬ限はあらじこそ思ふ

(釋)○鳴かぬ限は、鳴かぬうちはの意。○あらじ、然ニハアルナイの意なり。

一首の意は、春は來たりと、世間の人はいへとも、また、鶯が啼かぬが、自分は何でも、鶯の啼かぬうちは、何時までも、春にはあるまじと思ふとなり。

(評)鶯を深く愛賞する心より、其の聲を聞かぬうちは、春を春とも思はぬまじにて、誰れが何とい

ふとも、われ一人は、あらじと思ふと、頑固に力みかへりたる處、如何にも、とけなくて、詩人的狂熱の、物に觸れて横溢したるを見る。

寛平の御時ささの宮の歌合の歌 源 當 純

谷風にさくるこほりのひま毎にうちいづる波やはるのはつ花

(釋)寛平の御時 宇多天皇の御宇をいふ。寛平は、其の世の年號なり、御時はオホン時と訓む。大御時を音便にいへるなり。○ささの宮 皇后宮にて、七條后温子と申して、藤原基經の女におはします。○歌合 歌人を左右に分ちて方人を定めたりなどして、優劣を判するなり。これに、判者を立つるものと、衆議判に依るものとあり。其の元は、鬪詩に倣ひておこりたる、一種の風流なる遊戯にして、この御時の歌合ぞ、物に見えたるはじめにはありける。○谷風 谷より吹く風なり。これを、詩經の谷風の註に、「東風謂之谷風」とあるによりて、即ち、春風をいふとの古説われど、これは、漢語の直譯には非ず、谷の風の事とすべきは、勿論なり。○ひま 隙なり。○はるのはつ花 春咲く物のうちの第一の花といふ意なり。

一首の意は、春の初の谷間の風に、山川に張り詰めたりし氷も、所々うち解けて、其の絶え間毎に、白く吹き出づる波は、即ち、花の如く見ゆるが、世間の花はまだ咲かぬ頃なれば、これや、東風第一の花ならむとなり。

(評)花信二十四番の魁なる、梅花ささしおきて、打解けて漲り出づる波の花をば、第一番に推せ

るは、面白き見付け物ならずや。初句の谷風を、優ならぬ詞のやうに難する者あれど、これは弘く、歌詞を考へ渡さる僻説といふべし。結句の下に、ならむといふ詞あるべき語勢なるを、省きて、體言にて止めたる、これも一つの格なり。いたく優れたる歌にもあらねど、全首を、しく逞しく詠みなされて、下句殊に、力量あり、結句、開口音を疊用せる、聲調いと花やかに聞えて、陽氣發する處金石も透るといふ勢あり。この種の風脈は、集中稀に見る所ならむ。

紀友則

花の香をかぜのたよりたぐへてぞ鶯さそふあるべにはやる

(釋)これも、寛平の御時后の宮の歌合の歌なり。總べて、詞書のなきは、前の詞書をかけて聞くべし。○かぜのたよりに 風の吹きて来る便宜にの意。○たぐへ 連れ伴はしむる意。○あるべ 手引、又は案内者などいふ意なり。

一首の意は、此の花の香を、風の吹き行く幸便に連れ立たせて、いまに來鳴かぬ鶯を誘ひ出して来る、手引には遣るぞ、外の事には遣られぬ大切の花の香なれど、これを嗅がば、鶯も出で來ずには、えあらじと思ふによりてとなり。

(評)花の香の花は、諸木いづれにもあるべきやうなれど、鶯の來鳴かぬ頃なれば、梅の花なるべし。さて、來む人を待ちかねては、案内者を遣りて迎ふる事のあるに思ひ寄せて、日々に待ち居る鶯を迎へむ爲には、何を遣らむか。幸ひ、梅花に鶯は離れ難と中らひなれば、必ず誘はれ來つ

べければ、即ち、梅の香を手引には遣るといふ趣向なり、結句のには、といふ助辭の用法、尤も、注意せよ。古來の注釋、皆、これを漫然と看過して、更に説き及ぼせるものなきは何ぞ。餘りに、疎陋といふべし。さて、この意を演繹すれば、外の事には決して遣られぬ、大切の花の香なれど、鶯誘ふるべには、惜まらずして遣るといふ餘意の含まるなり。かくてこそ、鶯を待ち戀ふる心の、切なるさまも見ゆるなれ。花の香は風にたぐへじとすともすべなきを、かく幼くいふが面白きなりと、眞淵の評せるは、さる事ながら、もとより、月到風來的の自然の句ならねば、いよいよ、巧なる程、却りて、興味の索然たる感なき能はず。

大江千里

鶯のたにより出づることなくは春來ることをたれか知らまし

(釋)○鶯のたにより出づること 鶯の、谷の古巢より出でて鳴く聲をいふ。さて、鶯の谷より出づる事は、毛詩に、幽谷より出でて喬木に遷るといへる本文に據りて詠めるなり。但、此方のうぐひすは、里近く住み馴れて、幽谷などより出づるものにはあらねど、鶯の字をうぐひすと訓じてよりは、皆、其の趣に詠めり。○たれか かは反動の辭なり。○まし 假に、事を設けて、想像する場合に用ゐる辭なり。又、希望の意なるもあり。

一首の意は、もし、此の鶯の、幽谷より鳴きて出で来る、聲がないならば、假令、春になりたりとて、春の來る事を、誰れかは知らむ、とても知る者なからむとなり。

(評)山中曆日無し、わづかに、即今、軒端に來鳴く鶯の一聲を聞き、春ぞと思ひ定むる、山里人の心より、天下の人もかくあるべしと、頑に思ひ入りたるが面白きなり。三句のは文字清みて讀むべし。四句、新撰萬葉には、春はくるともどあり。又、結句、古今六帖には、たれか告げまじとあり、景樹はこれに左袒して、本文のまゝにては、上句にふさはぬやうに論ひたれど、今の如くに説かば、何の仔細かあらむ。畢竟するに、よく思はずして、無益の辯を費せるものなり。まかのみならず、調もかくれて、優ならず。この集の本文を以てめでたしと定む。さて、前に出でたる「春來ぬと人はいへども云々の歌と、これとは、互に、相表裏して、かのく、好處あり。但、これよりも彼れり、今、一段の眞摯なる處あるを認む。

在原棟梁

春立てど花もにはははぬ山里はものうかる音にうぐひすぞ鳴く

(釋)○花もにはははぬ 花の咲かぬ意。○山里 山家なり。○ものうかる 物憂くあるのくわを約めて。かといへるなり。面倒に大儀なる意なり。

一首の意は、春にはなりたれども、花も咲かぬ山家にては、都とは違ひて、鶯も、興なく面白からず思ふと見えて、大儀にすまぬ聲をして鳴くとなり。

(評)鶯の聲に、差別あるべきならぬと、都とは違ひて、山里は、春ながら餘寒さびしく、梅だに咲き出でぬが、興なく思はるゝより、鶯のさゝ鳴にて、また、充分ならざる聲を、わが心から、

鶯の張合なく思ひて、物臭き聲にて鳴くやうに聞きなしたるを、即ち、鶯の意として詠めり。思ふに、都人の、何か心憂き筋の事ありて、山里に入り籠りたるが、述懐なるべし。二句、廣蔭の説に、花の咲かぬには非ず、咲きても匂なき意なりとわれど、初句よりの語意語調を考へ見るに、然るべしとも覺えず。さて、歌は聊か、理窟に涉りて、感淺し。

初句六帖に、春なれどとあり、又、結句、一本に、鶯のなくとあるを、眞淵は采り、又、上田秋成も、鶯ぞとあるは叶はずとまでいひたれど、わろし。これは啼くべきわれよりも、鶯が存外に鳴くといへる意なり。聞知るべし。

題を知らず

よみ人知らず

野べちかく家居しをれば鶯の鳴くなる聲はあさなく聞く

(釋)○家居しをれば 家作して住みて居ればの意、しは語調を強むる辭。○あさなく 毎朝といふ事、なほもど飯着の意なるを、轉用したるなり。

一首の意は、かくの如き野邊近き場末に住居を占めれば、何事も都とは違ひて、思ふに任せぬ事のみなれど、まかし又、此處の取得には、鶯の、あのやうに鳴く聲は、毎朝聞くとなり。

(評)これは、都に住むべき人の、勢なくなりて、さる片田舎に住處を構へしものならむ。さて、皆人の聞きたくする鶯の聲には、不自由せぬを自慢して、せめてもの心遣りとはまづなるなり。其の底の意を推せば、鶯の聲の外は、よろづ、心のまゝならぬ由なるべし。一語も寒酸を言ふこと



なくして、其の意隠然たるは、四句の鳴くなる聲はのはの辭に、力あるに依りて、まか聞き做さるゝなり。すべて、詞淺く意深くして、氣韻おのづから高し。萬葉集卷の十二、

あつさ弓はる山ちかく家居してつぎて聞くらむうぐひすの聲

梅のはな咲けるをのへにいへ居せばともしくもあらじ鶯のこゑ

などあるに胚胎して、藍よりも青しといひつべくや。

二句一本に、家居しせばとあり。

春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

(釋)春日野 大和國の名所。○な焼きそ 焼く事勿れの意、野を焼くは、枯草を拂はむとする事なり。

○若草の 若草の如きの意、春の野の弱草は、いかに愛らしく美しければ、つまといふ語の序に用ゐたり。此の歌にては、枕詞と見るべからず。○つま 古は夫妻相互につまと呼びあへるも、こゝは妻をいふ。○こもれり 野の中に入交りてある意なり。

一首の意は、野の番人よ、餘所の野はともあれ此の春日野、何時はともあれ此の今日は、焼きてくるゝな、如何となれば、今日は焼かむもいたはじ氣なる、此の野の若草の如き、なつかしき妻も籠りて居り、我も亦、こゝに籠りて居るぞとなり。

(評)奈良の都人の、たま〜、愛妻の手を携へて、程近き春日野に、春日郊行と洒落れたるが、端なく

野焼起りて、折角の愉快を妨げらるゝを厭ひて、春日野は焼くな、今日は焼くなと、折り入りて、野の番人に頼めるなり。二つのはの辭、例の力ある重き遣ひさまなる事に注意すべし。さて、いづれもな焼き、そへかゝれり。又、今焼かれむとする枯草の中にまじりて、なつかしげに萌え出でたる若草を捉へ來りて、細君の枕詞に取合せたる機轉、いと神妙なり。又、下句の仕立は、同一の句法を折返して、聲調を整へたるものなるが、其の際に、つまの一語をわれと謠ひかへて、姿致を取れるは、古き歌謠に例ある事にて、眞に、歌三味を得たり。これを要するに、寛平、延喜以降には、絶えて見る事能はざる格調にして、風流蘊籍、情致委曲、前の「野邊近く家居しをればの歌と、殆ど、相拮抗するに足る。景樹が、かなと野に遊びても、女は人目を恥ぢて忍び隠るゝ意より、妻も籠れりといひ、さるに添へて、われも籠れりといへるのみ。故に、籠れりは、専ら、妻にかかれる詞と見るべしといへるは、説き得て宜し。

この歌、伊勢物語には、初句を武藏野はとして、野を焼くも、男女の欠落者を搜索せむが爲に焼く事とし、さて、其の女の詠めるものと云たるは、かの物語の作意にて、面白くは聞ゆるものから、實況には、いかゞあらむ。

春日野のこゝろ火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ

(釋)○とぶ火の野守 飛火野の野守といふを略したるなり。飛火野は、春日野のうちにあり。とぶ

火は烽火の事にて、寇などある時、火を揚げて合圖をなすをいふ。春日野に烽火臺を置かれし事は、續日本紀、元明天皇和銅五年の條に見えて、奈良の京の警備と云たりしなり。故に、其の邊を飛火野といへり。野守はいづこにてもあれど、此處は烽火臺の守者ならむ。○今 俗言のモウといふによく當る。○若菜 弱き芹薺の類をいふ。○摘みてむ 摘まむといふ意に略同じ。

一首の意は、この飛火野の番人よ、一寸、この野邊に出で様子を見よ、この通り、若菜はまだ摘まれさうにもなきが、汝はこの野に住居してあれば、大方知らるゝならむ、一鉢モウ幾日ばかり過ぎて、此處の若菜はたしかに摘まうぞとなり。

(評)これも、歌主は奈良の都人にして、まかも若き婦人なるべし。さるは、いにしへは、春は若菜を摘みなどして、野に出でて遊ぶ事を婦女子の唯一の娛樂としたればなり。春の來る即ち、心急がるまゝに、籠を携へ、布具志を持ちて、飛火野に來て見れば、目的の若菜はいまだ生ひ立たず。其の失望いばかりぞや。餘に口をしければ、何時頃摘まるゝぞと、野守の翁を責め問ひたる情致状況、思ひやるだにいとをかし。又出でて見よといへるに、野守の、あからさまにも、野邊には立出ですして、家のみ引籠り居る趣見え、まか籠り居るに、餘寒の厳しき事おのづから知られ、さては、いまだ摘まむばかりは、若菜の生ひ出でぬ頃なる事も明白なり。僅にこの一語、所謂、畫龍點睛の妙ありとやいはまし。

み山には松の雪たに消えなくにみやこは野邊の若菜摘みけり

(釋)○み山 みは例の美稱にて、たゞ山をいふ。後世は深山をいふ事となりたれど、古くは、深山を奥山とのみいへり。○には にてはの意。○だに 俗言のサへといふに同じ。○消えなくに消えざるにの意。なくはぬの延音なり。

一首の意は、山邊にては、猶寒くて、地にあるは無論、疾く消えぬべき、松の梢の雪すら消えぬに、都の方にては、早、郊外に出でて、若菜を摘みけるよとなり。

(評)この歌詠める場處、極めて曖昧なり。舊説をはじめ、眞淵も、宣長も、都の方より山を望みたる趣とし、景樹は、山中より都の方を見渡したる趣に解けり。他木の雪をおきて松の雪をしも取出でたるに、おのづから景色ありて、日影疎き山家の實況を想像せしむれば、山住の人の、氣候の差違あるを感じて詠めりとする方、比較的妥當の見解なりと認む。但、おのれは別に説あり。思ふに、これは實境の歌にはあらじ、恐らくは、當時流行せし、屏風などの畫に題せる歌ならむ。松に雪ある山のかたへに、都近き野邊の若菜摘みのさまを畫がきたるをば、打任せて、大らかに詠めるならし。故に、歌主の居處は、山とも野邊とも、定まらざるなり。此の集秋部下に、在原業平の「千早ぶる神代もさかず立田川からくれなゐに水くゝるとは」と詠めるが、實際に疎きも、畫に對しての作意なればならむを、彼れには詞書あるも、これにはなきは、故わりて、當時既に、事情不明となりしものならむ。

聯對法を以て、反對の事實を上下の句に分配し、按排したるは、この歌の特徴として、大に、

人の注目を惹くに足る。初句及び、三句の頭のみ文字さし合ひて、聲調、聊か、不快に感ぜらるるは、殊なる難にはあらねど、平頭病とて古人は嫌ひき。且、上句、逞しく健かに調べ出でたるを、氣魄やう／＼弛び來りて、結尾掉はず。此の弊は、奈良朝時代の五七調の作には稀にして、平安朝以後の五七調には、多く見る處なり。蓋し、五七調は、五七五七と調べ來りて、又、五とおこり、七と收まるべき處を歌ひ約めて、二句十二字を、一句七字としたる如きものなれば、どもすれば、餘勢横溢して、結句の字餘りとなる事珍しからず。さるを、七五調にありては、初五文字より七五と調べおろして、更に、四句を七とおこしたれば、五と結句は收まるべきが順序なるを、五七調の詩形を借れるが故に、其の摸型のまに／＼、強ひて、七文字に歌ひ延べたるものなり。されば、結句の輕薄微弱に流るゝは、數の免れ難き處ならむ。

○

梓弓おしてはる雨けふ降りぬあすさへ降らばわか菜摘みてむ

(釋)○梓弓 梓はアカメ柏にて、其の木にて作れる弓を梓弓といふ。さて、弓の弦を張らむとては、押し付くる事あれば、弓を押して張るといふ意にいひかけたる序の詞なり。○おして 押通しての意にて、けふ降りぬあすさへ降らば、おしなべて、或は、強ひての意に解ける諸説は、皆當らず。○さへ 物の副ひ加はる意の辭にて、俗言の意とはかはれり。一首の意は、春雨が、今日一日中は押通してさへ降りたり、かくて、明日も降るならば、多分、

(評)前の「春日野の飛火の野守出で、見よ」の歌に比較するに、思ひ入りたる處淺くして、聊か劣りざまなれど、一雨一雨に春めきて、やう／＼、若菜摘むべき時候にならむ事を喜べる意、言外にあらはれて、感氣あり。又、景樹が舊註の意に従ひて、明日さへ降らば、濡れ／＼も若菜摘まむと解けるは、いまだし。

若菜はよき程に生ひ立つべければ、晴れ次第、若菜を摘まむぞとなり。

仁和のみかどみここにいましませしける時に人に若菜賜ひける御歌、

君がため春の野にいでて若菜摘むわがころも手に雪は降りつゝ

(釋)仁和のみかど 光孝天皇を、御代の年號の仁和を以て稱へ奉れるなり。○みここにおましましける時 親王にて御座ありし時なり。○人に若菜賜ひける御歌 或人に若菜を贈りたまへる時に副へて賜へる御歌といふ事なり。いまだ、時康親王と申せる時の事なれば、賜ひけるとは書くべからざる理ながら、後に、天皇となり給へる故に、かくいへるなり。○君がため 貴公の爲といはむが如し。○ころも手 袖と同じ。

一首の意は、貴公に進上せむが爲に、この若菜を春の野邊に出でて摘む拙者が袖に、雪が思の外に降りかかり／＼して、寒くて甚だ難儀なりとなり。

(評)春の雪はとむかへたるに、泡雪の降りくるを意外とする意籠れり。又、わが衣手にと

あるを思ふに、けしきばかり、袖に袂にうち散る趣にて、天きり合ひておしなべて降る、冬の雪のさまならぬ事著し。所詮は、野邊にて獨ちて詠み給へる歌と聞ゆ。これを、人の爲に、親王の御身として、雪降る野邊に出でて、御手づから摘み給ふにはわらじ、人に若菜給へる日も、雪の降りけるによりて、かくは詠みなし給へるならむと、木下幸文のいへるは、穿ち得たる説なり。又、萬葉集に、

君がためやま田の澤にえぐつむと雪消のみづに裳のすそ濡れぬ

とあるは、これと同一の筆法にして、かゝる難儀を冒しても、貴公の爲にはと、心籠めたる進物なれば、其の積りにて賞翫ありたしといふ餘意を含めり。かやうに、殆ど、恩に着するばかり甚しくいふが、即ち、火を水といひ消ら、無を有といひ做す歌の情なるを曉らす、これ、往時の習慣なり、當世風の、心にもなき卑下謙退をいふと異りて面白しと、人の評せるは、大早計の斷案といふべくや。さて、萬葉のは、質樸なる間に、おのづから、風情あり。これは又、聊か、鍛鍊を加へたるがうへに、いまだ、延喜時代の纖巧の風を帯びねば、めでたしと申し奉るべくなむ。

歌奉れと仰せられと時よみて奉れる 貫 之

春日野の若菜つみれやゑろたへの袖ふりはへて人の行くらむ

(釋)歌奉れと云々 豫て詠みかきたる歌、或は、新に詠めるをも差上げよと、命せられたる時、新し

しく詠みて奉れる歌なり。○ゑろたへの 白き絹布の事にて、袖といはむ枕詞となれり。但ここは、白き色の意に轉用せられたり。○ふりはへて、わざわざの意なり。ふりに袖振る意をかけたり。袖を擧げて打振るは、人を招くとして、女のする事なり。

一首の意は、春日野の若菜を摘みに、あのやうに面白さうに、白妙の袖を振りて、招き合ひつ、わざと、女達の出掛くるならむかとなり。

(評)奈良の都人になりて詠めり。若き女達の、例の籠なを携へて出づるを見て、彼等は、郊外の若菜摘みに行くならむと、羨ましげに思ひ遣れるなり。袖ふりはへては、この作者の好みて用ゐたる語法にして、後にも、時鳥人まつ山に鳴く、土佐日記にも、わが戀ふる人わすれ貝など詠めり。又、人のの一語、自他の見地を立てたる處にして、物羨みするさま見え、序に、語調を緩和したり。全篇一の閑文字なく、玲瓏として玉を延べたる如くなるは、流石に、貫之獨特の伎倆といふべく、眞淵も、詞は句毎にうるはしと評せり。但、心高くやさしとまで稱へたるは、過褒にはわらじか。

題 志らす

藤原敏行朝臣

春のさるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみたるべらなれ

(釋)○春のさる 霞の衣といふより、其の衣を春といふもの、着ると、擬人したり。○かすみの衣 霞の、山や草木などの上に覆ひかかれるを、衣と見做していへり。○ぬきをうすみ 横糸が薄

くての意なり。衣を織るには。經(縦)緯(横)の糸あり。みはクテともサニとも譯す。○みだるべらなれ 亂レサウナ様子ヲと譯す。そもくべらなりといふ語は、平安朝の初期までは、絶えて無かりしを、承和の前後に至りて、やうく、發生したるもの、如し。延喜時代には、好みて用ゐしにや、諸家の歌集中に數多散見せり。然るを、問もなく、勢力失墜して、拾遺集の頃には、殆ど、廢語と等しきまでになれるは、元來、其の語の雅馴ならざるが故ならむか。一首の意は、春の著る霞の衣は、横糸が薄くて、通例の人の衣とは違へば、外の事にては亂るまじきか、山より吹おろす風には、あちらこちらが、破れ損じさうなる様子ヲワイとなり。

(評)見渡しの山がたつきて、波のく、打靡ける霞の、恰も、薄衣を引延へたらむが如くに、風のままにまに漂ひ行くさま思ふべし。三句は、只、糸の弱しといふほどのことなれば、經緯いづれにもあるべきを、調の宜しきに任せて、ぬきを薄みとはいへり。但、この種の譬喩は先例多かる事にて、別に、この作者の掬めたる巧には非ず。さて又、この作者は、經濟の才にこそ長じぬれ、詠歌の方は、其の短なる處なりけむ。光孝天皇の、嵯峨に行幸し給ひし時「翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなると、覺えず不祥の語を吐きて、逆鱗に觸れしが如き不始末を醸し、其の他「立別れいなほの山の峰に生ふるまつと聞かしば云々、或は「千代のふる路あどはありけりとやうに、縁語いひかけ等の修飾を旨としたる歌のみ多く、天然の節奏あるが稀なり。舍弟業平朝臣の天才には、更に似もつかずや。山幸も海幸も、おのがさちく、すべなかりけむは、神代の昔すら然りしなり。

寛平の御時后の宮の歌合によめる 源のむねゆきの朝臣

ごまはなる松のみどりも春くれば今ひごしほの色まさりけり

(釋)○ごまは 常磐の約にて、もと、常しへなる磐石の意なるを、常に變らぬ物をそれに喩へて、常磐なるといへり。○松のみどり 松葉の青き色をいふ。俗に松の若芽にいふとは違へり。○ひごしほ 一染といはむが如し。まはは染むるをいふ。一層、一段なといふ意に用ゐるは、後に誤れるなり。

一首の意は、いつも變らぬ松の綠色サへモ、一般の草木萌ゆる春の來れば、さすがにモウ一染、緑の色が増りけるよとなり。

(評)もの辭、春くればの句に應じて、其の意、最も重く強まれるが故に、俗言のサへモの意に聞かて、他の冬枯する草木に、殊更に、對せしめていへる事となるなり。さては、天下の草木に春色の行渡らぬ隈なき事思ひ遣られぬべし。若し、この餘意を想像せずして、徒に、表に顯れたる詞のまゝに心得むには、餘りの只ごと歌たらむ。

歌奉れご仰せられし時よみて奉れる つらゆま

わがせ子が衣はるさめ降る毎に野べのみどりぞ色まさりける

(釋)○わがせ子 我が夫といふ事なり。○衣はるさめ 衣を洗ひて張るといふに、春雨をいひかけたり。

一首の意は、わが夫の衣を洗ひ張りする、其のはるといふ名の雨の降る度毎に、野邊の草木の緑の色は、存外に増りけるよ、夫の衣の洗張のたびに、色の褪め行くには引換へてとなり。

(評)野邊近き場末に住居せる、貧家の妻女の心になりて詠めり。背戸に洗濯する折しも、生憎、春雨の降りくしては、垣根の野邊の青み行くを見て、それとは反對に、大事の夫に著すべき衣の色の、やうくわろくなるを、下に打伝ひたる意の籠れる事、その辭の妙用によりて知られたり。されば、衣の色は何にても拘はらぬ事なるを、衣といひ、緑といふ言あるによりて、強ひて、當時六位の官服なりし、緑色の衣と云たる解もあれど、穩かならず。まして、廣蔭が、貫之、當時久しく六位なりければ、早く加階して、五位の緋衣にうつらむ事を冀ひて、色まさるといふに衣の色の變る意を含めて、細君の作に託して獻詠せしなりといへるは、餘に、牽強附會に過ぎたらじやは。さて、この歌も、巧は巧なり。これ、この作者の長處にして、即ち短處なり、おのれは、この作者に對しては、寧ろ、拙ならむ事を望むもの、仰によりて奉れる歌としては、感心し難きを如何にせむ。三句、古今六帖には降るか、つにとあり。

あをやぎの糸よりかくる春もぞ亂れて花のはころびにける

(釋)○あをやぎの 春の頃の柳を、色によりてあをやぎと入り、のは連辭の意に非ずして、俗言のがに通ふ辭なり。○糸よりかくる 糸を纏る事にて、かくるは軽く添へたる詞なり。○しも

ぞしは強辭、もは歎辭、ぞは物を強く取出づる意の辭。○綻びにける にはいといふ過去の助動辭の變化なり。

一首の意は、糸を繕りては綻びも縫ふべきなるに、あの青柳が糸を繕りかくる春の當節はサア、花が思ひがけず、いたく咲き亂れて綻びヨワイとなり。

(評)梅が笑へば柳が翠むといはむ程の事を、これは柳の枝を糸に、花の咲くを衣の綻ぶるに喩へて、すべて、物縫ひの業のうへにていひ果てたる、譬喩の取做し、いと興あり。三句のしも、強く物にさし當つる意なるより、前後の語勢によりて、殆ど、却りての意味にまで聞做さる。四句は、三句の語調の急迫せる餘響を受けて、亂れて花のと轉倒せる語法を用ゐ、且は、多數音より成立てる亂れてを上に、少數音より成立てる花のを下にして、四文字三文字を合せて一句を組織せるは、意詞共に自然の調に協へるものにして、物の急遽切迫せる場合をいひ顯はさむとするには、必ず然るべき語法なり。

西大寺のほこりの柳をよめる 僧正 遍昭

上 歌 春 淺みどり糸よりかけてまらつゆを玉にもぬける春のやなぎか

(釋)西大寺云々 昔、京都の朱雀通りの羅城門外の鴻臚館を捨て、東寺西寺といふ大刹を建てられしが、今は東寺のみ残りて、西寺は廢せり。其の西寺を西大寺ともいひしなり。柳をよめるは柳を見てよめるの意なり。都の大路には、昔は柳を多く植ゑたりしなり。○淺みどり 淺さ

綠色にて、俗に、薄萌黄といふに當れり。○まらつゆ 露は白ければいふ。○玉にもぬける玉にしても通して居るの意、もは歎詞、ぬけるは貫きてゐるの約なり。○やなぎか 柳なるかなの意にて、かは歎詞なり。

一首の意は、さすがに所柄とて、薄萌黄の糸を縫りかけて、白き色の露を玉にしてマア、數珠繫ぎに通して居る、春の柳なるよとなり。

(評) 煙塵の糸にも譬ふべき芽出し柳のふし／＼に、露の白玉の溜れるを見て、そのあたりに徘徊せる、西大寺の和尚達が爪繰れる、花田色の緒の、水晶の念珠を思ひ寄せて、柳が數珠を拵へて居るやうには形容せるならむ。さるは、淺緑糸よりかけてといひ、玉にもぬけるといへるなど、打任せたるさまならぬを思ふべし。且は、かく解してこそ、詞書の西大寺のほどりとあるが、徒言ともならざるなれ。伊勢の歌に、

青柳の枝にがれる春雨は糸もてぬける玉かぞを見る

とあるは同想の譬喩にして、只、青柳を主としたると、春雨を主としたるとのたがひあるのみ。恐らくは、通昭がこの歌を拘へるにやあらむ。歌も劣りざまなり。又、初二句、淺緑の糸と續くべきなるを、の文字を略けるは、例ある事にて、後世の歌にも、時鳥聲あかなくに尋ねきて云々 願季「小夜千鳥行方をこへば云々後鳥羽院の如き、皆、句初の下にの文字を補ひて聞くべき歌なり。又、糸の淺綠色と、露の白色との色彩の配合、いと映え／＼しくて奇麗なり。抑も、この僧正の想を構ふるや、奇巧の中に狂痴の意味を寓したれば、大に、可笑的の分子に富めり。是れ、

他の歌人達には、容易に見られざる特色にして、優に、歌仙として、古今に潤歩せる所以ならむ。この歌をはじめて、つぎ／＼の諸作を通觀せば、思ひ半に過ぎむ。

下句顯昭本に、玉にもぬける春の青柳とあり。又、同書古異本に、玉にもぬるか春の青柳とあり、景樹は後の方を執して、定家の密勘にも論なければ、その上は皆然ありけむを、今は青柳の青の詞、初句の淺みどりと同意なるをいたみて、かく直せるなるべしといへり。されど、のみ勝れる點もなければ、猶、この本文のまゝにてあらむ。

題を知らず

よみ人知らず

も／＼ち鳥さへづる春は物毎にあらたまれどもわれぞふりゆく

(釋) も／＼ち鳥 百千と多くある色々の鳥にて、小鳥の類をいふ。これを古今傳授三鳥の一として、事々しく昔は秘めたりき。沙汰の限や。○さへづる 何事とも聞分れず、聲のまげき狀なり。○ふりゆく 舊くなり行く意なり。

一首の意は、鶯や、何や、さま／＼の鳥の、盛に鳴く春は、空のけしきも草木の色も、すべて、物毎に新しく改まれども、それに引換へて、わが身ばかりは年老いて行くとなり。

(評) 百千鳥囀るといふに、浮立てる春景見えて、物毎に若やぎゆく中に、獨舊り行くらむ老人の述懐、哀深きにやと、景樹のいへるは盡せり。萬葉集に、

ふゆ過ぎて春し來ぬればとし月はあらたまれども人はふりゆく

とあるを、すこし、引換へたるのみなれど、初二句は、砂を黠じて金と化せしめたるものなり。三句以下は、猶、平凡に庶幾くや。

(三四)

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥哉

(釋)をちこち 俗にアチコチといふに同じく、彼方此方の意なり。遠近の字を填て、其の意に心得るは、すこし違へり。○たづき 手着きにて、手寄所、とりつき所なといふ意なり。○おぼつかなく 不明瞭なる意にて、俗にボットシテアルなといふに近し。○よぶこ鳥 ある鳥の名なり。よぶといふより、覺東なくも呼ぶと、上よりいひかけたり。此の鳥も、三鳥の傳授の内の一つなり。古歌の例を考ふるに、四季に通じて詠みて、あながち、春の鳥にもあらず。眞淵は、俗にいふカンコ鳥にて、字音より稱へ誤れるならむといひ、中山美石、仲田顯忠は、年ヨリコイと鳴く鳩ならむといへど、明かならず。川柳點にいはいはく、「猿ならば猿にしておけよぶこ鳥と、眞に達者の言なり。

一首の意は、あちやこちやの取付き所さへも知らぬ山の中にて、ボットしたる聲にて、不明瞭にも、人を來よと呼び立つる、よぶこ鳥なるよどなり。

(評)景樹が、こは山陰などを行くに、深く奥まりたらむ茂みより、さる鳥の打鳴くを聞きて詠めりといへるをよしとす。従ひて、三句を山中なるにの意に釋して、山中に居て詠める歌のやうに

解ける諸註は當らず。たづきものもの辞、心をつくべし。四句のもの辞の、たづ軽く、歎辭として添はれるとは異りて、重く力ある用法なれば、俗言のサヘモの意に聞取らるゝ事は、例のことなり。又、おぼつかなくもの下に、我をといふ語を略したり。さて、大意を以て推するに、よしや、呼子鳥の正體判然したりとするも、餘りよき歌にはあらざるならむ。

雁のこゑを聞きてこちへまかりける人を思ひてよめる

凡河内躬恒

はるくれは雁かへるなり白雲の道ゆきふりにこちやつてまじ

(釋)雁のこゑ云々 歸雁の聲を聞きて、北國へ行きたる人を思ひてなり。こしは三越路とて、今の越前越中越後のあたりをいふ。まかりは退出の意にて、此處なるは、京より下れるなれば、よく適へり。但、この時代の頃より、漸く、退出の意ならでも、たゞ行く事をもいへり。○雁かへる 雁は春秋に寒を追ひて南北すれば、越國は北方の寒地なる故、雁の故郷と見立てたるなり。○白雲の道 雲路といふに同じ。○ゆきふり 行觸にて、行くく物に觸るゝをいふ。源氏物語夕顔の卷にも「いかなるいきふれにかへらせ給ふぞやとある、いきふれも同意なり。さて、道を行くといふより、白雲の道ゆきふりと續けたるは、猶、前に出でたる貫之の歌の、白妙の袖ふりはへての語法と同じ。○こちやつてまし 傳言をまやうかの意なり。

一首の意は、長閑なる春が來れば、聲立てて雁があれ、故郷へ歸ることよ、さては、空の雲路

(三五)



を遠く北國へ行くことなれば、其處に住まへる朋友の宿のあたりを過ぎなむ折、其の出逢ひがしらに、君も歸り給へといふ、傳言を志やうかとなり。

(評) 去年雁の渡る頃に、都を出でて、越國へ赴きし朋友ならむ。相思の情に堪へずして打詠むる折しも、大空に歸雁の聲を聞きて、あはれ、春が来れば雁が歸るなり、然るに何とて、人は歸らざるか、春が来れば君も早く歸り給へと、この歸雁に言や傳てましと、待ち戀ふる熱情の昂進しては、言傳の出来る、出来ぬの分別なしに、一圖に思ひ入りたるが、詩境なり。されば、かへるの一語を以て、全篇の主眼となすべく、初句のくればは、これと對へて闘せたる詞なり。まかのみならず、ばの辭に力あれば、春くれば、雁のみにあらず、人も歸るべきもの、やうに聞做さるゝが、言靈の玄妙なり。白雲の道といふに、未遠く遙かなる旅路のさま思ひやられたり。さて、雁に言傳をする事は、前漢の蘇武が雁書の記事なれど、この歌はあながち、それに據らざるも可ならむ。

歸る雁をよめる

伊

勢

春がすみたつを見すて、ゆく雁は花なき里に住みやならへる

(釋) 歸る雁を、歸る雁を見てよめる意なり。

一首の意は、これよりは、やうく、時候も好くなり、面白き花も咲出でむ時節なるに、この長閑なる春の霞の立つを見かけて、打捨て、歸り行く雁は、其の心のいかに解し難きが、思ふに、昔より、花といふ物のなき土地に住み馴れたるならむか、花の面白味を知り居る以上は、決して見捨て、歸る事は、なり難き道理なるものと成り。

(評) わが花を愛する心より、誰もく同じやうに思ひ定めて、はかなく雁の心を疑へる所に味あるなり。前に、貫之が「花なき里も」と詠めるに比すれば、かれは猶、小刀細工を施せる痕迹の歴歴たるを免れざるを、これは絶えて、針目のあらはれざれば、女の手業まがらたりとやいはまし。

題をらす

よみ人をらす

をりつれば袖こそ匂へ梅の花ありこやこゝにうぐひすのなく

(釋) ありとや、あると思つてかの意なり。

一首の意は、梅の花を折りたれば、移り香にて、袖がこれこのやうに匂ふ、それだけにて、眞の梅の花はありもせぬに、袖の匂ふのを、梅の花が咲いて居ると思つてか、此處に来て鶯が鳴くとなり。

(評) さてく、鈍なる鶯ではあるワイ、こは移り香チャぞといふ餘意を含めり。大方、鶯の來鳴くは、梅花を慕ふ心と定めたる詠み做し方にして、袖の匂の高さの一通りならぬ事あるし。諸註、鶯の鳴く事に重きをかきて、袖の移り香の事を軽く見たるは精しからず、又、四句のこゝにを梅の花につけて、梅の花こゝにありとやの意に、宣長の解けるは、語脈をよく味はざる誤

なり。歌は巧を盡めて、巧ならざるもの、蓋し、興趣の不自然なる爲ならむ。

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ども

(釋) ○あはれもど、感歎の詞なるが、一轉して、身に染みていふにいはれぬ感じをさしていふ事となれり。○おもほゆれ 思はると同じ。○宿の梅ども 宿は庭といふ程の事なり。ぞは指示す意の辭にて、こゝにては、上のたがに應じて、詰問する意あり。もは歎詞なり。

一首の意は、この梅の花は、色も宜しきが、それよりも一層、この香の方があはれと思はるゝよ、かやうに宜き薫りのするは、嘗て、誰が香を焚きまめたる袖を觸れし、この庭の梅ヅイマアとなり。

(評) 昔は薰籠あり、火取りありて、衣服に薰物する事専ら行はれ、上流社會にては、女のみかは、男も盛に、身嗜みに焼き試みしかば、移り香といふ事、物語もの、其の他の歌文に數多散見せり。こゝも、其の袖の薫りの、梅に移り残りたるものとして詠めり。袖ふれしは宿のを隔て、梅へかゝる語法なり。さて、この歌、單に、梅が香を愛する意のみにはあらじ、必ず、託する處、諷する處ありしならむ。思ふに作者、意中の女の許を音づれたるに、庭前の梅花の、たゞならずうち薫じたるを、こは如何なる男の移り香ぞ、油斷のならぬ事かなど、怪める方に取りなして、擲擲せしものなるべし。これを、この歌のをかしきふしなるべく、殊に、たがの一語妙いふべからず。

宿近く梅の花うゑじあぢまなく待つ人の香にあやまたれけり

(釋) ○宿 萬葉集には屋前とも書きて、古くは家の前をいひしが、この頃は、直に家の事をいふやうにもなれり。こゝは其の意なり。○うゑじ 植ゑるの意。○あぢまなく 俗言のツマラナクの意。○あやまたれけり 間違へられたツイなり。

一首の意は、以來、家近くコンナ梅の木は植ゑまい、其の故は、花のよく匂ふが爲に、來もせぬ待ち人の袖の匂に、つまらなく間違へられたツイとなり。

(評) 來むと約束せし戀人など待てる、女の詠めるにや。梅の香にツイ欺されては、若しやど、徒に、心どきめさせらるゝより、エ、コンナ物は植ゑじといへり。かのがれが人待つとて端居せるより、梅が香も匂ひ來るなるを忘れて、宿近く梅の花のあるが氣にくはぬやうにいへる、痴態面白し。さて、二句を景倒が、梅をば植ゑじなどあるべきを、梅の花うゑじといへる、幼くてめでたしといひ、又、廣蔭が、梅の花の咲けるを植ゑたるなりといへる、いづれも語け難し。これは素より、眼前に、眞盛なる梅花を見れば、打任せて、去か詠めるものなるのみならず、待つ人の袖の香に誤たるも、花の咲きてのうへの事なれば、かのがれから、其の響をも重ねて、花と置きたる事を聞知るべし。後にも遍昭の歌に、  
蓮葉のにどるに去まぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく

とあるも同一のいひ倣しにて、蓮が本来の主意なれど、露の置と處にも縁あれば、葉の字を添へたるが如し。殊に、この句の字餘りなるに力籠りて、植ゑと思ふ決心の、なみくならぬ趣見たり。又、人の香とのみいひて、袖とも何ともいはざるは、今の世にありては、少し、詞の不完全なる心地はすれど、前にもいへる如く、昔の人の袖は、皆、打薫りしなれば、殊更に、まかことわらでも、其の意は通せしなり。

(四〇)

梅の花たちよるばかりありとより人の咎むる香にぞなみける

(釋) ○たちよるばかり云々 ホンノ立寄るといふほどの事があつた、其の時から意なり。景樹の、立寄らむとせしのみなりしをと解けるは、當らず。○咎むる 不審を打ちて怪むをいふ。

一首の意は、梅の花の蔭に、ホンノ立寄るか寄らぬか、といふ程の事があつた其の時から、今まで、如何なる人に寄添ひて居たりしならむと、皆人の咎むる香にサ、着物が染みたワイとなり。

(評) 梅の香氣の高くて移り着き易き事を、甚しくいへるものなり。

以上の三首は、香氣を主として詠めるにて、比較的「たが袖ふれし」の詠を以て、尤もなつかしとす。さて、茲に一つの注意を要する事あり。そは他ならず、同一同量の香氣も、古人と今人とは、美を感ずる程度に於て、淺深多少の相違ある事なり。さるは、人智の進歩するに従ひて、

眼耳鼻舌の官能、著しく發達し行く中に、狗、他と反比例に、退歩の傾向を有するを、鼻官の能力とす。近くは、聞香の技の廢れたるを以ても、これを證するに足りぬべし。却りて、未開の人民は、この官能の完全なるを見るにあらすや。即ち、亞弗利加内地の蠻民の如きは、殆ど、犬猫等の獸類に近きばかりの、鋭敏なる嗅感を有せりといふにあらすや。さては、古人は今日のわれより、蒸臭を感ずる事の、甚しかりしならむ。鼻官に映する美感の、一層著しかりしならむ。古歌に、梅や、橘や、菖蒲や、菊やはいふに及ばず、香氣を賞美する趣向の多く見ゆるは、決して偶然にあらす。只、憾らしくは、この官能の退歩によりて、古人の諸歌し、賞揚せる嗅感の美を、充分に認識する能はざることを。

梅の花を折りてよめる

東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花折りてかささむ老かくるやと

(釋) ○うぐひすの笠にぬふてふ梅の花 笠にぬふは笠として縫ふの意、前にもある、遍昭の歌の玉にもぬけると同じ語法なり。古へ、笠を作るを縫ふといへり。されば、そを作り出だし、地ならむ。笠縫の里といふ名も見えたり。猶思ふに、其の笠は菅笠などにはあらじ、衣笠の類か。てふはといふの約なるちふの通轉なり。さて、此の集大歌所の部、及び、催馬樂に入れる「春柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠。といふ歌に本づきて詠めるにて、鶯の木傳ひあるくを縫ふといへるより、笠も縫ふものなれば、取合せて、梅の花笠を縫ふといへるなり。○か

(四一)

頭に挿む意、草木の花をも葉をも、頭に挿すを、古くは髻華といひ、後にかざしといへり。○老かくるやと、老いたる顔付が隠るゝやいかにとの意なり。

一首の意は、古くから、鶯が笠に籠ふといへる梅の花なれば、笠は人目を避くる爲に、頭や顔を隠すもの故、一つ折り取つて、吾が容貌の老も隠るゝかいかにと、試に挿頭して見むとなり。

(評)この歌、老の述懐なる事は論なけれど、意調花やかに、雄々しく力ありて、さのみ、委靡衰弱せる氣象の、見認められざるは如何にといふに、史を按ずるに、この作者常公は、文徳天皇の齋衛元年に、年四十三にして薨じ給ひにき。さては、老とこそいへ、僅に、山口の事なれば、おのづから、花やきたる方にはなれるならむ。猶思ふに、四十の初老を費する事は、嵯峨上皇、仁明天皇の御賀をはじめての例として、この時代には、盛に行はれし事と見ゆれば、この公も、其の四十の算に満たれし時の春、必ず、賀宴を催されしならむ。興に入り、酔に乗ずる餘り、庭上の梅花を手折りつる際、樂人等の、かの催馬樂の青柳の曲を謠へるより、そを引取りて、鶯の笠に籠ふてふこの梅の花と思ひ寄せ、又、老とは名のみにて、隠せば隠れぬ事もあるまじき程の齡なれば、老かくるやいかにと、梅の花笠かざしてみむとは、歌ひ給ひしならむ、結句の果てに、試にといふ語を含めて聞く時は、其の意いよゝ明らかなるを覺ゆ。其の現場の狀況を思ひ遣りて見れば、なかく、興味深く、風情ある歌にこそ。

題を知らず

素性法師

よそにのみあはれこそ見ゆ梅の花あかね色香は折りてなりけり

(釋)素性集には「うめの花を折りて人のがり遣るとて、と詞書あり。○よそにのみ 餘所にかげ離れてばかりの意。○あはれ 前にもいへる如く歎詞なるが、こゝにては賞むる意に用ゐたり。

○あかね 飽かれぬの意。○折りてなりけり 折つてのうへの事であつたツイの意なり。

一首の意は、これまでは、梅の花を、只遠方からばかり、一圖に、あゝ見事など見たツイ、今思へば、梅の花のいつまでも飽かれぬよき色香は、存外に、かく手に折取りて、近う見てのうへの事であつたツイとなり。

(評)大方の花とはちがひて、梅の花は、却りて近きさりのせらるゝ由を、心に合點たる趣なり。

家集の詞書によれば、かく飽かれ色香の物故、獨のみあはれと愛づるも詮なければ、この折枝を君にさし上げ申す、といふ餘意を含めて聞くべき事となるなり。込み入りたる意想を、安々と、なだらかにいひ續けたるは、この法師の尋常茶飯なり。結句、簡潔を極む。以て詞の省畧法の一例とすべし。

梅の花を折りて人におくりける

君ならでたれにか見せむ梅の花いろをも香をも知る人ぞ知る

(釋)○君ならで 貴君ならずしての意。○たれにか見せむ かは反動の辭なれば、誰に見せうぞ、見すべき人もなしの意。○いろをも香をも 色の善悪も、香の淺深もの意なり。

一首の意は、この梅の花は、貴君ならずして誰に見せうぞ、見すべき人もなし、さるは、梅の

花のいふにいはれぬ、よき色をも香をも、何事にも辨へある人がサ、よく知りて見分け聞分けするワイとなり。

(四四)

(評)上下のかけ合、前後の關係によりて、貴君こそ、其の色香を知る人なれば、今、この花を贈り申すといふ餘意を含めたり。四句色をもといひ、又、香をも同じ語法を重疊せしめ、結句にまた、知る人ぞまると、同語を繰り返せる、聲韻呼應の間に、一種、縹渺として辿るべからざる美感の生ずるを認む。さて、この歌の底の意は述懐にて、わが知己と憑むは、君ならで外になければ、宜しく御引立を冀ふと、梅花によそへていひ送りしにはあらじか。

くらぶ山にてよめる

つらゆき

梅の花にほふ春べはくらぶ山闇にこゆれとあるくぞありける

(釋)くらぶ山 山城にありといふ説もあれど、確とせず。日本紀に倉歴、和名抄に藏部、久良布と見えたる地は、近江の甲賀郡なれば、其處にある山とすべし。○にはふ春べにはふは氣色の映えてうるはしきにいふ。此處にては、直に、香の義には見るべからず。春べは春の頃の意、野べ、山べなどの方といふ意のべより轉じたるならむ。榮えの約なりといふ説もあれど、當れりとも覺えず。○まると、著くにて、判然の意なり。

一首の意は、何時もとは違ひて、梅の花の咲く春の頃は、取分け、闇といふ名のくらぶの山を、まかも、闇い暗の夜に越えて行けども、梅の花のさまこそ見えぬと、其の句が、存外に、

判然とよく知れたワイとなり。

(評)著きは、既に、梅の花、ふ春べはとあれば、其の句ふ事の著き意なり。六帖には、この句、咲きぬる時はとあり、これは、咲きぬる事の著き意となる。いづれも二句に譲りて、結句の上にあるべき詞を略げるものぞ。ざるを、諸註、句は本文のまゝにて、意は六帖の趣に解せるは矛盾なり。景樹も同じ誤謬に陥りたれど、さすがに、二句に折合ひ難き處あるを發見して、六帖のを正しとせり。されど、この二首は、全然、別趣の歌にして、あへて、混淆すべきにあらず。さて、本文の方は、調の弛びて聞ゆるを、六帖のは、やゝ、打迫れる處あるは、入選の際、選者達の、例の引直さしものにやあらむ。後に秋部上、在原元方の歌に、  
秋の夜の月の光しわかればくらぶの山も越えぬべらなり  
とあるも、暗部の山を着想の起點としたる事は同一なり、元方も貫之も、同時代なれば、いづれか早く詠み出でた歟けむ。いづれか人の跡を踏襲せしならむ。但、闇に越ゆれとあるしとは、純然たる理窟にして、元方のに、劣る事數等。

月夜に梅の花を折りて三人のいひければ折る

こてよめる

みつね

月夜にはそれとも見えす梅の花香を尋ねてぞあるべかりける

(釋)梅の花を折りてと云々 梅の花を折りてくれよと、他人の躬恒に誂へたるなり。○それとも見

(四五)

えず、それが梅の花とも、さして見え分れずの意。○香を尋ねて、香を目當にしての意、尋ね行く意とは見るべからず。

(四六)

一首の意は、一枝折らむとて、庭の中をあるけども、かくさやかなる月夜には、月の影の白く見渡されて、梅の花が、たしかにそれとも見分らぬワイ、玄かし、此處へ来て見れば、このやうに高い香のするものを、かくと知りしならば、香を常に尋ねて折るべきであつたワイとなり。

(評)春ながら霞晴れたる月の夜に、高貴の人の御前に伺候し居たるが、庭の梅を折りて參れどの仰せのまゝに、木の下に立寄りて、さて詠めるなり。結句のはてに、あゝ存外ナ、我ながら馬鹿なる事をして居りたる事よ、の餘意を含めり、上句には、専ら、花の色の、月の光に混ひて覺束なき由をいひ、下句には、香のいと高かる由を述べて、明かに、色と香とを相對照せしめたるものなれど、色といふこと、詞のうへに見えねば、誰れも心付かず。これ、作者の巧を弄する猾手段なり。

二句、家集に、見るとも見えじとあるは、理も聞えず、いとわるしや。

春の夜うめの花をよめる

春の夜の闇はあやなむうめの花色こそ見えね香やはかくる

(釋)梅の花をよめる。例の、梅花を見てよめる意。○あやなし、布帛の文のなきより出でたる詞にて、理りの立たぬ、譯の分からぬなをやうの意、益なしの意に解する舊説は、精しからず。○

やは、反動の辭なり。

一首の意は、春の夜の闇といふ奴は、さて、理屈もないものナ、暗くすれば、梅の花はリヤ見ぬ、なれども、香がサ隠るる事かいヤイとなり。

(評)暗夜には、殊に、香の高きものなれば、そを趣向の主眼としたり。さて、暗くてなつかしき花の色の見分け難きより、意地の悪き闇といふものが、人に知らせじとて、梅花を隠せるものとし、やはの反語を用ひて、闇に對ひて強くさし當て、イッッ、このやうの事ならば、初めより色をも見せたがよほどの餘意を籠めたり。つまり、闇を擬人したるにて、作意、面白し。

はつせにまうづる毎に、やどりける人の家に、久しく宿らで、程へて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かく定かになむやどりはある、さひひ出たして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる。

つらゆき

人はいさ心もあらずふるさははなぞむかとの香に匂ひける

(釋)はつせに云々、はつせは初瀬、また、泊瀬と書き、今は長谷といふ。有名なる觀世音菩薩の像を安置せる寺にて、大和國泊瀬山にあり。古へ、殊の外、繁昌せし靈場にて、貫之もこの信者なりけむ、度々、參詣する毎に、何時も中宿りせし或人の家に、近來、參詣は去ながらも、

(四七)

立寄りざりしなり。元來、京より初瀬までは、二日路を要する所なれば、かく中宿りありと知るべし。かく定かになむ云々は、久々、宿をも借らず、年月経て貫之の音づれたるを、其の主人もさる者にて、速にも出迎へず、家來を以て、頗る、不沙汰を咎めて、他の言はひはず、只、私方は昔の通りに依然として、かく確かに居ります、とばかりいはしめたり。この語の裏に、然るを、何とて、近來は、御立寄りなかりしか、と咎むる意を含めて、厭味をいへり。貫之即ち、隙さす、其の家の門内の梅花を一枝折りて、この歌をいひ入れしなり。○人はいさ 人はこの家の主人を指す。いさは否やの意、下に必ず、知らずと受く。いさど濁る時は、誘ふ意にて別語なり。○心も知らず 心も知られずの意、れ文字を略くは、乾されぬを乾さぬといへると同例なり。もは嘆詞。○ふるさと 今は、旅にある人の、我が本貫の地を指していふ語なれど、古くは、故都の地をいひ、一轉しては、住捨て、年故りし里をいへり。こゝも其の以前、度々宿りし家なれば、昔の縁故ある家の意にていへるなり。○花を 梅の花を強くさしていふ。○むかしの香に 昔句ひたる其の香にの意なり。

一首の意は、久し振にて來たれば、主人は心が變りしか、變らぬかの程も、何とも知られぬワイ、まかし、昔馴染の所は、さすがに、馴染甲斐に、この梅の花がサ、相變らず、昔のまゝの香に匂うたワイとなり。

(評) さすれば、餘所、しくなざる、御主人よりは、この梅の花こそ、御尋ね申す拙者と同じやうに、親切に存せらるるといふ餘意を含めり。人はと花とを相對照して聞はしめたと、助辭の

用法の、いど力あるとによりて、まか聞ゆ。主人の、貫之の來られぬは、門違ひにてもせられしかど、皮肉をいへるに對して、こなたも、梅の花は依然、好意を表して、昔の香に匂へるを、かくよそしくせらるゝ御主人は、心が昔に變りしかも知れぬと、諷諭せるは、如何にも、臨機應變の辭令に巧なるものといふべくや。此の主人も、貫之の交際する程なれば、多少、歌心ある者と見えて、返歌に、

花だにも同じ香ながら咲くものを植ゑけむ人の心知らなむ

と、只管、打詫びて、前の擬勢に似もやらず、折れて下手に出でたることをかしけれ。要するに、句毎に力入りて、歌のさまも逞しげなるは、一つは、二句にて切りたれば、大體の語調の、五七なるにあり、又、一つは、初二句を、三二、四三と輕重を轉倒せしめて組立てたるが爲に、調の切迫したるに應じて、四句に、力ある重き意のぞ、文字を挿用したるにあり。結句は、たゞの平叙なれば、比較的輕く弱く、權衡を失へる嫌われど、これぞ、此の時代以後の歌風なれば、さのみ耳立ちても聞えず。

水のほごりに梅の花の咲けりけるをよめる

伊勢

春でこにながるゝ川をはなご見て折られぬ水に袖やぬれなむ

(釋) 咲けりける 咲いてあつたの意。○ながるゝ川を 伊勢集のこの歌の詞書に「池に花など散り

たるどあるより、川は水の誤ならむといひ、又、池に續きたる遣水をいへるならむなどいへる。舊説は、家集に拘泥したるものにして、夙く、伊勢集は後人の偽選なる由、景樹の考あり。又、或人の説に、川は影か、はとけと、書體紛らはしければ、誤れるならむといへど、遽に信じ難し。○なむ 未來の事を既定にいひ、倣す詞にて、希望の意のにはあらず。

一首の意は、これから先、毎春々々、花影の水に映れるものを誤りては、其の流る、川を眞の花と見て、一枝折らむとして、折られもせぬ水の爲に、袖が濡る、事であらうかとなり。

(評)川とは名のみの細流に、水ありとも見えぬばかり、打覆ひて、花影のさせるより、道理を打越して、直に、川を花と見るとはいへるにて、女ながらも、才氣縦横なり。又、花にはあらで、只、其の影の映れる水なれば、折られもせずして、却りて、其の水の爲に、とやうに、長々しういひもまつべきと、折られぬ水の一句にいひ取りたるは、簡にして悉せるもの、凡手のまねび難き處なり。舊説は、いづれも、初句を、これまでの春毎にの意と見て、今年もまた、懲りずまに謀らる、趣に解せるは非なり。こは、今年始めて見たる梅の花にて、向後も、春毎にまかばかれて、袖や濡れなむと危ふみたるものぞ。四句の意も、實際に、折り試みたるにはあらず。只、あらずしを治定していへるのみ。

年をへて花の鏡なる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

(釋)前のと同時の詠なり。○花の鏡となる水 花の爲の鏡となる水の意。○ちりかゝる 花の散りて水面へかゝるを、鏡に塵のかゝる事にかけてたり。○くもる 鏡面の明らかならぬを、爰にてはいへり。

一首の意は、まことの鏡は、塵かゝりて曇る習ひなるが、年を重ねて、毎年、春は花の影の映りて、其の花の鏡のやうになる水は、花の散りかゝるのを、曇ると人のいふであらうかとなり。(評)鏡と見立てたるも、其の水の、極めて清み徹りて、花影の、さやかに映れ、ばなるべし。初句は、上句にはさして用なきを、只、鏡の年を経て曇ると、いはむ爲に、かけるなりといへる、千秋の説はさる事なり。猶思ふに、其の梅は老木にてやありけむ。故に、既往に遡りて、年を経、てどうち任せてはいへるならし。これを、我が毎年々々見馴れし意と見むは、更に當らじ。さるは、詞書に「梅の花の咲けりけるをよめるとあれば、咲きてありけるを、今、見付けたる趣なる事を思ふべし。ちりかゝるは、今散るを見ていふにあらず。前の歌の「袖やぬれなむとよめると同趣にて、只、仮に、事を設けて巧める序に、鏡の縁語を以て、面白く洒落れたるのみ但、其の洒落の自然なる、渾然として、絶えて痕跡を存せず。これ、この作者の、最も得意とする處、後にも、

あすか川淵にもあらぬわが宿もせにかはりゆく物にぞありける  
山川のおどにのみさく百敷をみをはやながら見るよしもがな  
など、いと多かり。敏行朝臣のに比すれば、彼れい、猶、古硬なる處あるを、これはいと、輕



々を詠み去りて、修辭の巧は、遂に優れり。去りてこれを小町のに比するに、はかなくなたらかにして、まかも、自然の感興ある點に於て、數歩を譲るが如し。

(五二)

家にありける梅の花の散りけるをよめる

つらゆき

くるこあくこ目がれぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

(釋)○くるこあくこ 日の暮るといふても、夜の明くといふてももの意。○目がれぬ 目を離さずに見詰めて居るをいふ。かれは離るの意、物の絶ゆるにも、盡くるにもいふ詞なり。○人ま人の居らぬ間をいふ。○移ろひぬ 移ろひは移りの延言にて、物の變遷するをいふ。故に、花の移るは、色の變るよりはじめて、散るをいふ、ぬは過去の助動詞なり。

一首の意は、庭にある梅なれば、日が暮るといひては見、夜が明くるといひては見して、まばしの目放しもせぬものを、この梅の花は、何時のわが居らぬ間に、かくは散つてままひしならむとなり。

(評)暮るとは、夜のはじめをいひて終夜を知らせ、明くとは、一日のはじめをいひて終日を知らせたり。かく、終日終夜を掛けて目がれぬと、こちたく、誇張したるは、下に、いつの人まど、疑問の語をいひ出でむ襍染なり。人まの、人は誰れをも指せど、上句の響を承けたれば、猶、自身をいへり。すべて、まもり目のある時は、詮方なき世の習慣を踏みて、梅の花は、何時の人間

を覗ひて移ろひぬらむと、不審なたるを、この奇警なる處とす。庭前の梅花に對して、毫も動きなきやうに、恰好の地步を占め待たる作なるかな。

寛平の御時ささいの宮の歌合のうた よみ人あらす

梅が香を袖に移してこどめては春は過ぐともかたみならまし

(釋)○こどめては 留めておきたらばの意○かたみ 紀念となる物をいふ。○まし ましをの意也。一首の意は、梅の匂を、袖へ染ませて留めて置きたらば、春はよしや過ぐるといひても、其の匂が、春の形見にてあるならむにといへるにて、出来る事ならば、さはまたき物なるが、其の仕方はなきかまらむの餘意を含めたり。

(評)散り方の梅に對して詠める趣なり。散るはいかにも惜しけれど、禁めむすべもなければ、せめて、其の匂にても留め置きて、形見としたしと思へど、それだに難かる事打侘びたり。四句、直叙すれば、花は散るともど打出づべき處なるを、類似の意義に轉換して、春は過ぐるともど、一層、誇張するたが、婉曲にして味ひあるなり。二三の句、六帖に、袖にこき入れてどめたらばとあるは、勿論、新撰萬葉に、とおもはむとあるも采り難し。

素性法師

散るこ見てあるべきものを梅のはなうたて句の袖にこまれる

(釋)これも、前と同時の歌なり。○うたて うたへの轉語なり。時と處とに依りて、少しづつ、其の意

(五三)

義を異にす。こゝは、俗言のアイニクの義に庶幾し。

(五四)

一首の意は、梅の花は、あゝ散るゝとばかり、ツヒ一通りに、見て居らう筈なるものを、あいにくな、梅の香が、何時か、袖に留って居るワイとなり。

(評)かくては、よそくしく、散るとばかりは見て居られぬ、いかにも、其れが惜しく、氣に懸かりてといふ餘意あり。これを諸注、散りし梅の花の事の忘れぬと解けるは、上句を過去に見たる誤ならむ。梅の花の散る木の下に、立さまよへる人の心になりて詠めり。散ると見てあるべきは、ふとは、梅花に冷淡なるやうに聞ゆれど、實は、熱中の餘りに放てる激語にて、散るは、甚だ、残念なれども、せむ方なければ、まひて思ひ諦めて、冷眼に看過せむと動むるものなる事は、下句の意を釋ねて知るべし。散る事の惜かる由を思はせむとて、まづ、香の袖にとまりて致し方なき由をいへるは、客を借りて主を形する筆法なり。うたての一語、おき得てうまし。

題あらす

よみ人あらす

ちりぬとも香をたに残せ梅の花こひしき時のおもひ出せむ

(釋)おもひ出 思ひ出しぐさなり。

一首の意は、仮令、花は散つてまじうとも、せめて、香だけは、跡に残してくれ、梅の花よ、さらば、後に、そなたの戀しい時の心を慰むる、思ひ出しぐさにせうとなり。

(評)散り方の梅花に對して詠へたるにて、前首と、其の意、又、反對せり。すらくとして、可も不可もなし。

人の家に植ゑたりける梅の花の、咲きそめたりけるを見て  
よめる、  
つらゆき

ことより春をりそむる櫻花ちるこいふ事はならはさらなむ

(釋)人の家に 或人の家になり。○春をりそむる、花咲き初めて、はじめて春を知るをいふ。○なむ 希望の辭なり。

一首の意は、今年から春を知り初めて、はじめて咲くこの梅の花よ、すべての花は、咲けば散るが、ドウツ、その散るといふ事は、見做はないでもらひたいワイとなり。

(評)これは家主への挨拶を兼ねて、行末を祝ふ意にて詠めるならむ。すべて、擬人に仕立て、花咲きそむるとあるべき處をも、意義を轉換して、春知り初むるといへり。一首の姿流麗にして、其の聲調の清亮和諧なる、其の意の幼くて、底に巧みある、これ、この作者の特長なり。天曆の御製に、

咲きそむる所がらにぞ櫻花わだに散るてふ名をたつなゆめ

略、同意ながら、言語の修飾に至りて、巧拙の雲泥なるを見る。三四の句、六帖に、梅の花ちるてふこととはとあれど、梅の花は櫻の花ほど、散り際の脆き物ならねば、散るといふ觀念を喚起

(五五)

す力の浅かるをや。又、といふをてふと約めたるも、纖弱にして平板なり。爰は必ず、正格にいひて、字餘りになるに任せたらむぞ、句に力入り、散るの一語も、強く、表顯せられて、調の協ひぬべきなる。

(五六)

契沖師云はく、此の歌より、次の卷に、貫之の、「水なき空に浪を立ちけるといふ歌までは、櫻の花なり。よりて、歌に櫻とよめり。櫻と詠まぬ歌は、詞書に櫻といへり。其の中に、此の卷には、櫻の咲ける程をいひ、次の卷は、散るを詠めり。平城天皇の御歌より後、貫之の「みやまかくれの花を見ましやといふまでは、詞書にも、櫻といはず、歌にも、只、花とのみ詠みたれば、よろづの花を詠めり。後に、花といひては、櫻ぞと心得る類にはかはれりといへり。

題をらす

よみ人あらず

山高み人

もすさめぬさくら花いたくなわびを我れ見はやさむ

又は、里遠み人もすさめぬ山櫻

(釋)○高み 高さ故にの意。○人もすさめぬ 世間の人も賞翫せぬの意、もは歎詞。○いたくなわびを 甚しく辛氣に思ふなの意。○見はやさむ 見て賞翫せうの意、はやすは榮えしむる意にて、もてはやすのはやすと同じ。

一首の意は、山が格別に高さ故に、常の花見の人も、來て賞翫せぬ、この櫻の花よ、人の賞翫せぬからとて、大層に辛氣に、クヨクヨ思ふなよ、なせといふに、この拙者が見はやして遣ら

うワサとなり。

(評)たま〜、櫻狩だに人の來ぬ、高峰の花に對ひて、山住の人の詠めるならむ。そも〜、賞翫されぬは、感心すべき事ならねば、櫻の心にも打侘ぶるものと擬入して、いたくなわびを、抑へ、さてこそ、我れ見はやさむと揚げて感めたる、四句と五句との應接、姿致あり曲折ありて、おもしろし。

左註に、又はとして擧げたる上句は、聊か、理をいひ過したる傾ありて、本行のには劣れり。すべて、よみ人あらずの歌は、多く古歌なれば、さまざまに、傳誦せられたるなるべきを、捨てずして、選者の擧げられたるものならむ。

○

やまさくらわが見にくれば春霞峰にも尾にもたちかくとつゝ

(釋)○やまさくら 山の櫻なり、櫻の一種の名稱には非ず。○峰にも尾にも 峰は山の頂の高く尖りたる處をいひ、尾は峰通りより麓まで長く引はへたる處をいふ。依りて、尾上といふ時には、自然、峰の事になれども、尾とは別なり。

一首の意は、山の櫻を、自分が、かく見に來れば、あの春霞が、高さ峰にも、低き尾にも、只モウ、花を、立ちては隠し〜するワイ、さても、意地の悪き霞なるよとなり。

(評)見にくれば花を立ち隠しつゝと、二句より結句へ續く語法にて、霞の意地悪き状、おのづから、

(五七)

其の間に表顯せらる。殊に、わがの一語の、人には兎に角、自分には格別に、意地悪くするやうに思ひ取りたる稚態、いとをかし。又、峰にも尾にもと、場所を一々指示きたるに、斷又續とやうに、むら／＼にかゝれる霞の景氣、目前に浮ぶを覺ゆ。

(五六)

染殿の后のおまへに花瓶に櫻の花をさし給へるを見て  
よめる、  
前のおほきおほいまうち君

年ふればよはひは老いぬるかはあれど花をし見れば物思もな

(釋)染殿の后 文徳帝の皇后にて、清和帝の御母なり。この作者太政大臣藤原良房公の御女にて、明子と申す。染殿は良房の邸なりけるが、後、この皇后の住み給へるによりて、染殿の后と稱せり。○よはひ 命ある物の年の數をいふ。○老いぬぬは過去の助動辭。○まかりあれど さうではあれどなり。○花をししは強辭。○物思ひ 氣苦勞に心配なる事をいふ。

一首の意は、年數が経てば、存外に、自分の齡は老いくれたワイ、これ、いかにも悲しき事なり。さはあれど、かく、立派なる花をサア見れば、悲しい處か、何の心配もなしとなり。

(評)皇后宮の御殿の花瓶の櫻を見て樂しめるは、表面の意にて、下には、皇后を花に比して、この御有様を見れば、老の憂さを忘れて樂しといへる、譬喩歌なり。蓋し、わが女明子の、かく、皇后となり給ひ、東宮をも生み奉りて、榮華窮りなき御様子は、春花の句ふが如くなるより、思

ひよそへたるなるべく、定めて、其の花瓶の櫻は、咲きも残らず、散りも初めぬ、常に、爛漫たりしものならむ。又只、齡は老いぬとあらば事足るべきを、年ふればといひ添へたるは、老いぬる事の、心憂き意を強めむとの業にて、かくまで、老い朽ちむとは思はざりしに、あゝ、といふ餘意を含めり。まかはあれど、思ひ返したるより、喜氣洋洋たる調に一轉して、子女の立身出世を、老後に見たる心のうち、如何なりけむと、まづ思ひ遣らる。初句のば、四句のばに相對へて、初二の句と四五の句とを合掌せしめ、三句をこれが連鎖としたる篇法なり。又、三句のはの辭、四句のしの辭の力あるうへに、三句も結句も、字餘りなれば、句毎に力量ありて、首尾毫釐の弛びなきは、恰も、九石の弓を張れるが如しや。廊廊の氣象おのづからに備はれりといひつべし。

なぎさの院にて櫻を見てよめる 在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのとけからまじ

(釋)なぎさの院 河内國交野郡にあり。文徳帝の皇子惟喬親王、常に出でまして、遊び給ひし處なり。伊勢物語に「昔、惟喬のみこと申すみこはしましけり。山崎のあなたなる、水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花の盛りには、其の宮へなむおはしましける。供に、右馬の頭なる人を、常にゐておはしましけり。……今、狩する交野の渚の院の櫻、殊に面白し。……右馬の頭なる人のよめる」として、この歌を擧げたり。右馬頭といへるは、業平の事なり。土

(五九)

佐日記にも、渚の院の事をいへる條に、この歌を出だせり。○たゞて一向にの意。○なかりせば 無いであらうならばの意。○春の心 春の人心なり。春その物の心の義にはあらず。○のどけからまし のどけくは穩に悠長なる貌なり。ましましをの意なり。

一首の意は、イツツ、世の中に、一向に、櫻といふ物が無いであらうならば、結句、春の人心は、長閑やかであらうにといへるにて、なまなか、櫻のある故に、長閑なるべき春も、何かと、心騒しくてならぬといふ、餘意を含めたり。

(評)櫻を愛する餘りに、雨や風やに、若しは散りはせぬかと、花のうへの心許なくて、心の長閑やかならぬより、進り出でたる嘆息なり。決して、櫻を惡みて、無からむ事を欲する意には非ず。されど、單に、櫻のうへのみにては、聊か、誇張に過ぎて、浮華に陥る嫌なきにもあらぬと、こは他に、深意ある事にて、廣蔭が、惟喬親王を櫻によそへ奉れるなるべしといへるぞ、いと宜しかるべき。さるは、この親王は、文徳帝第一の皇子におはすれば、必ず、儲君に立たせ給ふべきなるを、外戚に勢力なきが爲に、却りて、藤原氏の出なる、御弟の惟仁親王（和）に引越され給ひにき。この兩所の、東宮争ひといふ名稱の、野乘に貽れるを見ても、其の競争の劇甚なりしを知るに足らむ。従ひて、この不利なる結果を、いかに不快に、思召されしならむ。

伊勢物語に、畋獵に耽りてのみおはする趣の見ゆるは、恐らくは、排悶遣悶の手段たるに過ぎじ。當時、藤原氏の跋扈專横を憤る輩は、この親王に心寄せ奉らぬ、はた無かりけむ。作者輩平朝臣は、もとこれ、王孫にして、兄行平朝臣と共に、始めて、在原氏を賜はれる人なるに、

仕官茲に二十年、僅に、五位の右馬頭たり。そのわたり、藤氏の一家一門の、日に榮え、王氏の勢力の、日に盛るを見て、いかで慨しと思はざらむ。されば、惟喬親王の擁立を以て、藤氏排斥の唯一の手段と信じ、熱心に、拜趨して、其の目的を達せむと励めしならむも、事遂に欺らずしては、親王の御不幸、また、察するに餘りあり。とにかくに、此の親王故に千々に心の碎かるゝより、寧ろはじめより、此の親王おはしまさざらむには、かくまで、物は思はじといへる、せめてもの述懐なるべし。富士谷御杖が、櫻は、業平の關係せし、二條后に比したるなるべき由いへるは、事は差へど、この歌の、寓言なる趣を思ひ寄れるは、即ち同じ。寄託深遠にして、表裏の二面、いづれも、首尾貫徹し、感慨字句に溢れ、熱情楮表を往來せり。花を皮肉とし、實を骨子としたる作なり。

三句、土佐日記に、咲かざらばとあり。

題を知らず

よみ人知らず

石はとるたまなくもがな櫻はを手折りてもこむ見ぬ人のため

(釋)○石はしる 石上を迂るにて、瀧にいひ續くる語なり。もとは、イハハシルといひけむを、石の字を書けるより、遂に、イハハシルとはいひ慣へるなるべし。○たまなくもがな 瀧は、今は垂水の事にのみいへど、舊くは、瀧ちて流るゝ水をいへり。がなは希望の辭。○手折りても手折りは字の如し、もは數詞なり。

(六二)

一首の意は、この岩の上を迸る早い川が、なくてマア欲しい事よ、さらば、向岸の櫻の面白さが、咄にはならぬ故、家に居て見えぬ人の爲に、家苞にするやうに、一枝折りて来うとなり。  
 (評)飛沫玉を跳らし、雪を噴く、さる溪流の對岸に、櫻の花の咲き出でたる、何とも言語に絶えたる美觀なるべし。されば、せめて、其の老るしばかりに、一枝折りて、見ぬ人にも思ふものから流の爲に障へられ、行かれぬより、あゝ残念などいふ、餘意の生ずるなり。初二句、岩間を傳ふ早川のさま見るやうなり。結句のはてに、この辭を含めて、四句へ返る續きなるを、かく轉倒せしめたるが、この歌の諧調となれる所以なり。  
 四句、六帖に、手折りもてこむとあるは、調に協はず。

山のさくらをみてよめる

そせい法師

見てのみや人にかたらむ櫻はを手にて折りて家づみにせむ

(釋)山のさくらを云々 次なる「春霞なにかくすらむの歌の詞書と同じく、山を望めるさまに聞ゆれど、歌は、山に入りて櫻を見たる趣なれば、山のは、山にての誤か。○見てのみや やは反動の辭。○家づと 土産に同じ。

一首の意は、この見事なる、山の櫻の花は、只見たるばかりにて、歸りて人に話さうか、話されはすまい、ドリヤ手に手に、澤山に折りて持ち行きて、土産にせうとなり。

(評)三四の伴侶と、山邊に遊びて、思ひの外に、言語道斷なる、盛の櫻の花に出逢ひたる、嬉し

の餘りに詠めるなり。手毎にといへるは、十分に多く、枝を折りて、この壯觀なる程を、都人に知らせむといふ意を顯して、いたく、逸興あり。

花さかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこきませてみやこそ春のにしきなりける

(釋)○見渡せば 遠く見やる事なり。○こきませて こきはすこくなどいふ言なれど、此處にては、軽く添へたる詞にて、ここに意はなし。打交せて、入れませてなどいふに同じ。

一首の意は、かく見渡せば、柳の青き色と、櫻の白き色とをませこせにして、あの京のけしきは、存外に、春の錦といふ物であつたワイとなり。

(評)京の東山あたりより、洛中の朱雀大路の柳の中に、家々の櫻の咲き交りたらむを望まむには、紅縁相參差して、いかで、錦とは見えざるべき。劉後村が鶯梭の詩に、

擲柳遷喬甚有情。交々時作弄機聲。洛陽三月春如錦。多少工夫織得成。

と詠せし轉句と、同一の落想にて面白し。又、紅葉の頃は、山を秋の錦と見るは常の事にて、古來の詠歌に、其の例いと多かれば、それに對へて、今は、山より都の方を見渡して、春の錦は都にこそありけれといふ意を含めたる事、都ぞの、どの辭にて知られたりといへる、景樹、廣蔭等の説、微細を穿ちて、よく、箇中の消息を解せるものなり。

(六三)

櫻の花のもこにて年の老いぬる事を歎きてよめる

紀 友 則

色も香も同じむかしに咲くらめと年ふる人ぞあらたまりける

(釋) ○同じむかしに咲くらめと昔の通りに同じに咲くであらうけれど意。○あらたまる 新しくなる意にはあらず。爰にては、昔に變りたる意に見るべし。

一首の意は、この櫻は、色も香も變りなく、昔の通りに咲くであらうけれど、年數を経る人がサ、櫻には違ひて、昔の若き時とは、存外に變つたワイとなり。

(評) 刻延芝が代悲白頭翁の詩に、  
年々歳々花相似。歳々年々人不同。

とある句を、さながら譯せるならむ。變る變らぬの表裏の意を、上下に對抗せしめて、文をなせり。二句、六帖に、昔ながらとあるに比すれば、詞は巧なり。又、三句にさくらといふ語をたち入れたり。古く、この二三の句のいひなし、妥當を欠けるやうの難もあれど、よく見明らかる説にや。但、餘りにいひ過して、餘韻に乏し。

折れる櫻をよめる

つ ら ゆ き

たれじかもごめて折りつる春霞たちかくすらむ山のさくらを

(釋) 折れる 折りてあるの約。○たれじかも しは強辭、かは疑辭、もは歎詞なり。俗に、誰れがマ

アといふ意。○ごめて折りつる とめては突きとめての意、つるは過去の助助辭。○櫻を 櫻なるものとの意なり。

一首の意は、誰れがマア、つきごめて、かくは折り來たれる事ぞ、さぞや、霞が立隠すであらうと思ふ山の、この櫻なるものをとなり。

(評) 花のある程の山は、おしなべて、打露める頃なるより、櫻の在處ハ、定めし知れにくかりしならむに、そを折り來し人は、そも誰れかと、わざと、驚き訝れるに味ひあるにて、實は、其の折枝の主への挨拶の詞なり。

歌奉れご仰せられし時よみて奉れる

さくら花咲きにけらしもあらしひきの山のかひより見ゆる白雲

(釋) ○咲きにけらしも 咲いたらしいマアにて、けらしは、けるらしの略、もは歎詞。○あらしひきの 山の枕詞、山は裾を長く引きはへたる故にいふ。○山のかひ かひは山と山との間なり。一首の意は、マア櫻の花が、意外に咲いたらしいワイなア、あの山の間から、白い雲が見ゆるはとなり。

(評) 見渡しの山の端に、何時の間にか櫻の咲きたるを、今見付けて、意外と驚ける趣なり。山のかひは、雲霧の蒸騰する處なれば、白き物の見ゆるを、雲といはむに縁由あり。さて、常の雲のたやすまひともさ變りたれば、櫻の花と思ひ寄るは、おのづから、陽春清和の彌生の候なれば

なり。二句、六帖及び顯照本に、けらしなどあり。なも歎詞なり。藤原俊成卿は、もどあるを執せられ、近時、韻脚を云爲する者も、結句のはてのも文字と、同韻同字を踏みたる歌のやうにいへど、諾け難し。さるは、初二句、多く、ア列の開口音を臚列して、聲調を花やかにせむと勗めたるを、僅にこの一字、調子低きオ列の音に終らむ事、いかなるべし。なは同じ開口音なれば、他音との調和も保たれて、旨く諧へるものを。又、三句を枕詞にて充填したるも、結句、白雲見ゆるとあるべきを、見ゆる白雲と倒装したるも、切迫なる調を避けて、悠長和諧なる調に就けるにて、この歌體に相協へり。古來、滞りなくさはやかにいひ下したる歌と評せられ、荻生徂徠は、花を詠める第一等とまで稱讚せり。西行上人も、いたく、この風をや翼はれけむ、その傑作の一なる。

おしなべて花のさかりになりけり山の端とどにかゝる白雲  
といふ歌は、全く、これを藍本とせるなりけり。但、流石の貫之も、囊裏の物を探るが如くに、容易く、かゝる秀逸を得しにはあらじ。家集に、

山のかひたなびさ渡る白雲はとほき櫻の見ゆるなりけり  
とあるは、全く、同意にて、この原作なめれど、いたく、詞の續け柄の劣れるを見よ。推敲の忽にすべからざる事、かくの如し。貫之は、一首の歌を廿日も案せしと、俊賴口傳にいへるは、かゝる折の事にやありけむ。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 友 則

み吉野の山べに咲けるさくら花雪かこのみぞあやまたれける  
(釋)○山べ 山邊なり。

一首の意は、外の土地にては、さる事なけれど、雪に名高き吉野の山に、一面に、白く咲きてある櫻の花は、トント降積れる雪かどばかりサ、見違へられたワイとなり。

(評)西行上人の歌に「吉野山櫻が枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな」とも詠まれて、吉野は山深ければ、遅くまでも、雪のかゝりて、花の咲くにさし合ふやうの事もあれば、山の端に花の白さを見て、又も雪かと思ひ惑はむ、さもあるべき趣にこそ。六帖に、末句、白雲とのみあやまたれつとあるは、後撰集に、

み吉野の吉野の山のさくら花白雲とのみ見えまがひつ、  
と詠めるに似たれば、さる方に紛れたるならむと、景樹の説なり。

やよひにうるふ月のありける年よみける

伊 勢

さくら花春くはゝれる年たにも人のこゝろにあかれやはせぬ

(釋)やよひに云々 やよひは彌生の義にて、三月の異名なり。うるふ月は、太陰曆にては、月日の間餘を一月に立て、年中に配するなり。これを閏月といふ。爰にては、三月が、二ヶ月續きたる事と知るべし。○春くはゝれる年 常よりは一月多くして、春の日數の増加したる年の意。○



あかれやはせぬ あかれは厭かれの意、やはせぬは、なせにせぬぞ、まざるな物だにの意、やはは反動の辞、ぬは否定の助動詞なり。

一首の意は、これ櫻の花よ、せめて、春の一月加はりて、長くなれる今年なりとも、人の心にはマア、なせに厭かれはせぬぞ、厭かれはまざるな物であるにとなり。

(評)閏月のあるを、春の加はれるといひ做せるは、このおもとの口吻なり。さて、春加はれるより、櫻も例年よりは、長く咲くものゝやうに巧み出でたるは、陸侍郎の詩に、

今年閏在春三月。剩看金陵一月花。

とあるに似たり。恐らくは、この句を翻案して、更に、一層の趣向を構へ出だましにやあらむ。すべて、物は見馴るれば、厭かるゝが常なるより、せめて、春長の今年なりとも、見厭かれぬべきを、何故厭かれぬ櫻の花ぞと、わが愛する情の際限もなき趣を、櫻を主として、逆寫したるなり。

さくらの花のさかりに久しくとはさりける人の來たりける時によみける  
よみ人ゑらす

あたなりご名にこそ立てれ櫻はな年にまれなる人も待ちけり

(釋)さくらの花云々 久しく訪はざりける人の、たましく、花の盛に來たりけるなり。伊勢物語には「年頃音づれざりける人の、櫻の盛に見に來たりければ、あるじ、と詞書ありて、この歌を

擧げたり。○あた 變り易くて頼み難きにいふ。人のうへにては、薄情の意に用ゐる。○名にこそ立てれ 評判になること。○年にまれなる 年内に稀なる意なり。

一首の意は、櫻の花は、散り易く仇なりといふ、評判にこそなりてあれ、この櫻の花は、なかく、仇には非ず、かやうに、一年の内にも、稀々ならでは來ぬ、水臭い人をサへモ、散らずに待ちつけたりとなり。

(評)されば、一年のうちにも、たまさかならでは來ぬ、人の心の方が、遙に、仇なりといふ餘意を含めり。専ら、二句のこそといふ詞の勢に引立てられたる歌にて、三句櫻花とあるも、上下に活きて、一歌の心に及ぼしたり。結句、殊にこそきたる言ひさまにて、もの辭、例のサへモの意なり。さて、この集の詞書も、伊勢物語のも、この歌主は、男女いづれとも判然せざれど猶、仇なる由の名に立てる事ありて、男の途絶ゑたる女なるべし。さりければ、猶、異心もなくて、獨住して居たる貞操を、櫻に託して誇れるなり。

返し 業平朝臣

今日來ずはあすは雪こそふりなまじ消えずはありごも花ご見まじや

(釋)返し 前の返歌なり。萬葉集には、和歌、又は、答歌と書きて、コトヘウタといひしを、この集にはかく書けり。○雪とぞふりなまし 雪の如く降りて散つてまはらうの意。○消えずはありとも 消失せずして存して居るともの意。○見ましや やは反動の辭なり。

一首の意は、私が、今日尋ねて来ればこそ、この櫻を花とは見れ、若し、今日来ぬならば、明日はモウ、雪のやうにサ、なつて散つてまきはうワイ、それも、まことの雪ならねば、假令、消えずにはあるととも、もとの花とは見やうか、否、雪とまでは見えはすまじとなり。

(評) すれば、今日私が来るは、花の爲の僥倖にして、花は、固より、評判の如く仇なる物のみ。只散りて雪とならぬ、今日の間を訪ひ来たれる私が、親切の情あるなりといふ餘意を含めたり。本の歌の、今訪ひ来たれる人の、無沙汰勝に、無情なるを恨みて、人よりは花の方が仇ならずと云へるを、又、打返せるにて、下の意は、其方は評判の無情者なれば、たましく、餘所に移り果てぬ程に訪ひ来ればこそ、かくは見つれ、今の間おくれたらば、決めて他人の物となりなむ。さらむ時には、さて座すとも、本のわが物なりと見るべけむやと、却りて、わが早く来れるを誇れるなり。贈答いづれも、筆路迂回、情思曲折して、諷諭の妙、殆といふべからず。但、贈歌はこれ、情真の語、工夫を求めずしておのづから工なるもの、答歌に至りては、巧に、口舌を翻弄して、一時をいひ勝たむと試むるものなれば、風骨感慨、聊か後れたる心地す。

熊谷直好の説に、贈答の歌の詞書に、其の名をいはず、人とのみ書けるは、皆、その詠人知られざるものなり。されば、この歌も、前後の歌とひとしく、よみ人知らずなりけむを、恐らくは、後人、物語によりて、業平の名を加へたるなるべし。さらでは、此の詞書「櫻の花の盛に、業平朝臣の云々となくては、餘の例に違へりといへり。

題を知らず

よみ人知らず

ちりぬれば戀ふれとあるしなき物を今日こそ櫻折らば折りてめ  
(釋) ちりぬれば 散つてままへばの意、ぬれば過去の助動辭。〇あるし 驗なり、詮なり、益なり。一首の意は、散果ててからは、如何に見たく思ひても、其の詮もなきものなるを、今までは惜しくてえ折らざりしが、モウ散りさうなれば、早く今日の内にこそ、この櫻は思ひ切りて、折るならば折らむ、氣は進まぬ業ながらとなり。

(評) 折りて、花瓶になりとも挿して、大事に長く、賞翫せむの心構へなるべし。夜の間もうしろめたさばかり、盛過ぎたる花に對しては、實に、今日こそと思ひ切りたるを得ざる、場合ならずや。されば、この句の語調、おのづから迫れり。又、結句を、景樹が、折れくといはむばかり、強き語勢なりとて、詞のうへにのみつさては解くべからざる由論へれど、いかゞ。こは猶、理のままに、緩やかなる語勢なるべし。さるは、惜しくて折り難けれど、置けば散るによりて、據なく、心には進まぬながら、折らば折りてむといへる趣なればなり。六帖に、躬恒のうた、櫻花夜のま散りなむ後やいかにけふこそ行きて折らば折りてめ

同意同調にして、下句殆ど同じ。相通せて、結句の、うち侘びたるゆるき調なるを思へ。

〇

折りこらばをしげにもあるか櫻花いさ宿かりて散るまでは見む

(釋) 〇をしげにもあるか 惜しうにア見ゆる事との意、げは形容をいふ、かは歎詞。〇さ

誘ひ促す意の發語なり。

一首の意は、この櫻の花は、あまり、見事にて、見捨てゝは歸りにくければ、一枝折りて行かむと思へど、折取らうならば、いかにも、後に惜しくなりさうにマア見ゆる事よ、それよりはサア、この邊に宿を借りて、この花の散るまでは、是非に居て見やうとなり。

(評)路傍の盛の花に對して詠めるならむ。一度は折取らむとせしが、又、餘り、見事の花にて、折らば後悔しさうなれば、今は折るは止めて、散るまでは、宿かりて見むと思ひ直したるは、花を愛する情の深さに、ちいに、心の乱るゝ状なり。宿かりてを、諸註、花の蔭に宿りてと解せるは早し。まからは、宿しめてなごいふべきをや。かりては、主ある時にいふ語なれば、この花蔭の人の家に宿を借るなり。後世、家隆卿の、花の宿借せ野邊の鶯と詠めるも、鶯を花の主と見ての歌なるを知れ。結句、散るまではのはの辞妙なり。是非に見むと、固く思ひ入りたる趣、この一辞によつて顯はる。若し、凡手ならば、漫然と、もの辞などを下しつべき處なるを。

紀のありこも

櫻色にころもは深く染めてきむはなの散りなむ後のかたみに

(釋)○櫻色 櫻の花の如き色なり。櫻色といふ定まれる染色のあるに非ず。○散りなむ 散つてまうであらうの意。○かたみ 紀念の物をいふ。

一首の意は、まことの花ならずとも、着る物は今から、櫻色によくよく染めて、着やうと思ふ

ワイ、それは追付け、花が散つて仕まうであらう、その後の形見にサとなり。

(評)せめて、其の色に似たる衣を着て、花のなからむにも、形見と見て慰まむといへる、櫻の花を愛する心の深さを見つべし。衣をといはで、衣はといへるは、他の物はいかにもあれ、せめて、この着物はと、取分くる意なり。

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人によみて

おくりける

みつね

わが宿の花見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひとかるべき

(釋)詞書の意は、躬恒の家の櫻の花の、咲出でたりけるを、見に来たりける人の、立歸りし後に、詠みて贈りしなり。○まうで 參出を音便にいへるにて、本は尊き所へ行くをいふ語なれど、この時代には、只軽く、行くの意に用ゐられたり。○花見がてら 花を見かたなり。一首の意は、己が庭の花を見物がてらに、尋ねて来る人は、格別、主人の自分を親切に思ひての事ならぬ故、目的の花のある間はとにかく、追つけ、花が散つてまうであらう其の後にサ、必ず、其の人が来すなりて、戀しうありさうなワイとなり。

(評)この来りし人は、風流の數寄者などにや。躬恒の家の櫻の、殊に、見事なる由を聞き及びて、常は、さまで親しき間柄ならぬと、花見がてら、音づれたりしならむ。白樂天の詩に、

遙見人家花便入。不論貴賤與親疎。

といへる趣、則ち、これに庶幾し。故に、主とする處は花にありて、主人の躬恒は旁なれば、一旦、花の散りなむには、再び來らむ事も覺束なきは、勿論なり。さる際の人、何の戀しき事かあらむなれども、再び逢ひ難からむの意を、婉曲に戀しかるべきといひ搦へ、今より、その事が氣懸りになるやうに、わざと戯れて、暗に、諷詠したるなり。もとより、風流韻事に屬する事にて、花見がてらに來るも、又、歌詠みて贈るも、極めたる打解け業なるを、其の人を腹きたなく、浮薄なる人物のやうに解釋して、花見がてらに來たるを、心に憤りて、詠みて贈れるなるべしと、或人の釋せるは、甚しき横入りにて、歌を解き殺すものといふべくや。又、家集に、

わが宿の花のたよりに訪ふ人は散りなむ後にまこと思はむ

とあるは、等類なり。恐らくは、推敲洗練の結果、この集の如くはなれるならむ。四句のどの辭力ありて、花の咲ける間はどこにかくの餘意を生ず。忠岑が和歌十跡といふものには、餘情の歌として、これを擧げたり。蓋し、諷詠は、成るべく、婉曲を旨とし、婉曲なれば含蓄あり、含蓄あれば餘情かのづから生ず。さては、かく、各種の趣味を具足せる、この歌の妙作なる事は、いはでも知られぬべし。

亭子院の歌合の時よめる

伊勢

見る人もなき山さごのさくら花ほかの散りなむ後を咲かまじ

(釋)亭子院 拾芥抄に、七條坊門の北南、西洞院の西二町、寛平法皇の御所、元は東七條后温子の家とあり。此の集に、亭子院といへるは、即ち、宇多帝を申せるにて、帝の御位を去り給ひて、

此の院におはしましける時の歌合をいふ。さて、この歌合は、延喜十二年の事にて、此の集奏覽以後の事なるに、春部上下のうちに、此の歌ども三首あるは、後に加へ入れられたるなるべしと契沖はいへり。

一首の意は、ドウセ見はやす人もなき、山里のこの櫻は、イツソよそ外の櫻が、悉く散つてまうであらうその後にな、咲くがよいといへるにて、さすれば、外に花もなき故、否とも、遠方からも、わざ／＼見に來て、少しは、賞翫にも逢はむといふ餘意を含めたり。

(評)山家の花の、見る人もなくて、徒に咲散る事を憐み惜みて、まかせよと、櫻に對ひて教へたる口氣なり、初句を諸註、來て見る人もの意に解せれど、來てといふこと蛇足なり。結句、咲かまじといへる語調の、いかにも弱く、力なげなるに、さし當れる事の止むを得ざるより、佗びては、聊か優れる方を希ふ意籠りて、勲に、早く咲きてもはやされぬよりは、快からぬ事ながら、人も來て見やうと思へば、後れて咲いたが、またましなりと云ふ意に聞ゆるなり。そもそも、伊勢は、宇多帝の御鍾愛を承けて、寛平の間、更衣となり、遂に、皇子を誕し奉りては、御息所としも稱せられたるを、後には、新人に恩寵を奪はれけむ、延喜の御代の頃には、大に、零落して、佗びえられたる趣は、今昔物語にも見え、又、この集の雜部下にも、家を賣りて詠める詞書ありて「飛鳥川淵にもあらぬわが宿もせにかはらゆく物にぞありける、とやうの歌あるを

もて思入は、自然、わが身の上の事をば、下に歌きて、かゝる歌も出来たるなるべしと本居豊  
類はいへり。いかにも、さる事とぞ覺ゆる。

(七六)

古今和歌集卷第二

春歌下

題をらす

よみ人をらす

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむこや色かはりゆく

(釋)〇たなびく 横に靡くをいふ。〇うつろはむとや 散らうとていうてかの意、やは疑辭なり。

一首の意は、見るも長閑に面白き霞の棚引く、春山の櫻の花は、モウ散らうとていうてか、其の色が、段々と白けて、變つて行くツイとなり。

(評)遠山の櫻の、早くも白丁して、色も艶も褪め果てたるは、まことに、今も風吹かば、散らむとする氣色にして、さても、はかなき花よと、打蓋ける餘情籠れり。但、其の詩境平凡にして、感興の淺薄なる心地す。初二句は、只、山の櫻をいはむ料に、時下の景物を点綴して、春山を形容せしまでなれば、霞に用ゐるに非ず。されば、色かはり行くを、霞のうへにかけて見るは、いみじき誤なり。後撰集に、貫之、

白雲を見えつるものをさくら花けふは散るとや色こもになる

今を思ひて詠めるにや。されど、詞續をつぶしとして、この流暢なるに如かず。さて、この

(七七)

歌、散らむとする程の事なれば、散る櫻のはじめに置きて、次より、散るを詠めり。  
(七八)

○待てごいふに散らせしごまるものならば何を櫻に思ひまさまし

(釋)○散らでし 散らすにサアの意、しは強辭。○何を櫻に思ひまさまし 何物を櫻にも増して愛し思はむ、世に櫻はを愛すべき物はあるまじの意なり。

一首の意は、散るのを待てど、人のいふに、それを聞入れて、散らすにサア、ごまる物であるならば、何物を櫻より、大切に思ひ増さむ、世の中に、これに越して思ふ物はあるまじ、いふ事を聞入れずして散りてすら、これ程めでたき櫻なるものとなり。

(評)散りかかりては、猶豫もせずして散るが、櫻の一つの疵なりといひ立てたるは、即ち、反映の筆法にして、この疵を除けば、他は間然する處なき、無上至極の物なる意に落着す。かく、陽におどして、陰に揚げたる、表裏のいひなし、これ、人情の機微に涉れる處にして、一篇の詩趣は、全く、此處にあり。又、待てといひたりとて、いづれの花かはとゞまらひなれども、櫻の、餘りにはかなく散るより、それを惜む熱情の迫りて、知らず／＼迸り出でたる詞なるのみ。初句の字餘り、語調に力量の生じて、待てと思ふ意、一方ならず強く聞ゆ。若しこれを、待ててふにと約めていはむか。忽に、沈痛の調を失ひて、氣味索莫たらむ。蓋し、この歌の全體の勁健なる調にうち合はざればなり。新撰萬葉に、

散る花の待ててふ事を知らませば春は行くとも戀ひざらましを  
とあるを引合せて、いかに、輕重強弱の差違あるかを味ひ分くべし。

○残りなく散るぞめでたき櫻はなありて世の中はてのうければ

(釋)○めでたき 愛痛きの約にて、勝れて宜しき意。○ありて 存在しての意。○はてのうければ 終りがわろく、心愛きものなればの意なり。

一首の意は、櫻の花は、屑く残りなじに散るがサ、殊に宜しいワイ、それは、世の中といふものは、長らへての語りが、必ず、わろくいやなるものであれバサとなり。

(評)散るを愛でたしとは、まづ、矯激の語を放ちて、人耳を愕かすもの、かくして、人の注意を惹かむとするは、詩歌の常套なり。固より、散らぬに越したる事なけれど、到底望み得べき事にもあらぬが、第一義は斷念して、寧ろ、其の散るを扶け做して、不本意ながら、第二義に満足の意を表せむと計るものなり。老後に及びて佗びえれたる人の、落花に對せる述懐にや。年の寄るまゝに、憂き事の重なるにつけて思へば、花も、一盛にて、残らず散る方が、寧ろめでたしと、わが身の上より思ひ寄せたるものなるべきは、下句の、力なく、打佗びたる調なるにて聞知らる。畢竟、上句は下句の前提、下句は上句の解釋なり。悲觀的の理趣を基礎としたる作なれど、二句、常識の軌道を逸したるが如きに、聊か、詩味の動くのみ。四五の句、世の中ありて

はてのうければと續く語法なるを、ありて世の中と倒装したるに、諧調とされるなり。前にも「櫻花咲きにけらしもの歌の結句、白雲見ゆるといふべきを、見ゆる白雲と倒装たるも、皆、この調に因る事なり。さて、前の歌は、待てといひても止まずに散るが疵なりといひ、これ、其の残りなく散るが勝れたる處なりといへり。かく、反對の意の歌を並べ擧げたるが、撰者の趣向なり。

(八〇)

この里に旅寐をぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて

(釋)○旅寝 眞の旅行ならでも、一夜にても他に宿泊するを、古へは旅寝といへり。○まぬべし きてまぬべしとの意。○ちりのまがひ 散亂る、其の花のまがひにて、まがひは紛れなり。○家路 家へ歸る道をいふ。

一首の意は、今夜は、この里に泊つてまぬべしさくら花、櫻の花が、面白く散亂る、紛れに、うかくと、家へ行く路をも忘れてサとなり。

(評)都人の、程近き山里に、春遊を試みたるが、詠めるなるらむ。紅々白々、歴亂として飛ぶ面白さの、見捨てては歸り兼ねて、躊躇せらるゝ趣を、旅寝まぬべしとまで、誇張たるを妙とす。時の移るまで見惚れたるさま、思ひ遣らる。下句は、白樂天の詩句に「花下忘歸因美景」の意にて、花の散るをめでて、歸るを忘るゝ事なるを、其の花の散る紛れに、家へ行く路の覺束な

くなれるやうに、表裏に取做したるは、巧筆細思、まことに、詩家三昧なり。六帖に、

散る花に家路まぬべしこの里にわれはまれにぞ長居しにける

同巧異曲の歌なれども、措辭婉曲ならず。字句、やゝ、生硬の嫌あり。この語々洗鍊を経て、無窮の興趣あるに及ばざる事歎等。

○

うつせみの世にも似たるか花櫻さくこ見しまにかつ散りにけり

(釋)うつせみの 世と續くは、現身の意にて、人の一生の間をいへり。後には、蟬の名に用ゐられ、再轉しては、蟬脱を云へるもあり。○世にも似たるか もも、かも歎詞。○花櫻 源氏物語幻の巻に「はかの花は一重散りて、八重咲く花櫻盛り過ぎて、樺櫻のひらけ、貫之集に「雨ふれば色さり易き花櫻、詞花集に「紅の薄花櫻など見ゆれば、色づきて花やかに咲く、一種の櫻なるべし。○かつ、一事の中に他事の交る貌をいふ。又、物の些少なるをいふ。時間の少きには、はやと譯す。此處は其の意なり。

一首の意は、少壯の身も、すぐに老衰ふる、この人間の身のうへに、よく似たる事かな、花櫻は、咲くつと見たる間に、はや散つて來たワイとり。

(評)無常迅速の悲觀を主としたる歌にて、當時の普通觀なり。但、其の聲調花やかにて、歌意と調和を欠くは、開口音の多き故ならむ。舊説には、世を、世の中の意とえられたれど、いかゞ。さては、

(八一)

下句の意に親切妥貼ならざるをや。よく、意釋に照し合せて、分寸の違ひ目あるを弁ふべし。

(八二)

僧正遍昭に詠みてれくりける  
これたかのみこ

櫻はな散らば散らなむ散らすこてふるさこ人の來ても見なくに

(釋) ○散らなむ 乃ひは希望の辭。○ふるさと人 我が、もと住みたりし土地の人をいふ。○來ても見なくに 來てもマア見ぬのにの意なり。

一首の意は、この庭の櫻は、散るならば、勝手に散つて貰はらうとい、仮令散らすに居るとても、到底、かの無情なる故郷人は、來てもマア見ぬのに、徒に待つは、益なき事ぞとなり。

(評) この惟喬の親王の、出家を給ひて、叡山の麓、小野といふ處に住給へりし事は、伊勢物語に見えたり。さて、都におはし、時の親昵なれば、遍昭をさして、故郷人とは詠み給へるならし。初二句の意を案するに、これまでは、人もや來ると思ふから、散るな〜と誂へ居たりしならむを、今はと思ひ諦めたるさまなれば、前の歌に「折らば折りてめでとあると、同一の語意語勢にて、進みて散れと許すには非ず。好まぬ事なれど、散るならば、そなたの都合次第にて散れといへるにて、其の弱く力なき調なるに、打佐びたる情の、深く聞ゆるなり。又、散るといふ詞を、三度までも折返したるは、伊勢物語に、

白露は消なば消なむ消えずとも玉にぬくべき人もあらじと  
と、同一のいひ做しにて、單に、聲調の相諧ひて、宛轉滑脱なる調子の、聽感に快味を興ふる

のみならず、散る或は消ゆといふ意を強めて、主腦の語とまたる事も知らる。表面は、櫻に對ひて、わが歎息を述べたるが主意なれど、其の半面には、かばかりに、いたく待たせながらも來ぬ、故郷人を不人情と怨むる意籠れり。されば、其の不人情なる故郷人と目指されて、この御歌を贈られたる遍昭は、誠に、面目次第もなかるべく、早速、御室に拜趨すべく、思ひ立ちしにやあらむ。畢竟、遍昭が、久しく音づれ奉らざりし怠慢を、花のうへに託して、掠めて答め給へるものぞ。比興幽微、所謂、絃外の音、味外の旨あるものか。

雲林院にて櫻の花の散りけるを見てよめる

そらく法師

櫻ちるはなのところは春ながら雪ぞふりつゝ消ぬがてに

(釋) 雲林院 山城洛北紫野にあり。淳和帝の離宮なりしを、常康親王に賜ひ、親王出家の後、遍昭に付囑して、元慶寺の別院とし給へるより、天台宗の寺院となれり。作者そらくは、承均と書く。○消えがてに 消ぬ難さうにの意なり。

一首の意は、櫻の散る花の場所は、時節は長閑けき春にてありながら、恰も、冬の最中のやうに、雪がサ、降りくして、まかも、それが消えにくさうにするといふなり。

(評) 雲林院の庭園、一面の花吹雪は、坐に、冷氣骨に沁む心地するより、獨、其の寒景を強めむとて、雪の消えがてにするといへるなり。元より、落花の事なれば、何時までも残れるなるを、

(八三)



雪のうへにて誇張して、理りを合せたり。二句、諸註解し兼ねて、櫻の花の散る所はといふべきを、文字餘る故に、上下したりといへるは、僻言なり。こは、景樹、廣蔭等の説の如く、花の場所といふ意に見るべく、さては、管に、一二株のみならず、數千株の花の林と知られ、其の落花は、はじめて、雪どふりつゝといへる風情に、打合ふべきものなるをや。貫之が歌に、  
春深くなりぬと思ふをさくら花散る木の下はいまだ雪ふる。これは、やうく、數株ばかりの落花と聞ゆ。其の構想こそ、略似かよひたれ、風情承均のに及ばざる事遠し。

櫻の花のちり侍りけるを見てよめる　そせいほうと

花散らす風のやどりはたれか知るわれに教へよ行きて怨みむ

(釋)散り侍り　この侍りいかい、なきをよしとす。○やどり　宿所なり。

一首の意は、このマテ、花を散らす風の奴の宿所は、誰れぞ知らぬか、知りたる者あらば、我れに教へてくれよ、さらば、そこに行きて、存分に、恨みをいはむとなり。

(評)魔風一陣、紅を墜し白を零す。真にこれ、無慘の極遺恨の限なり。いかにせむ、所定めず吹く風なれば、恨みむに由なきが、人には、夜は宿る所あれば、風にも、其宿は定めてあるべきならむとの聯想より、其處へ行きて恨みむと思ひ寄れる、狂痴の意想、いと面白し。この法師の歌體を通觀するに、父、遍昭に比しては、奇抜の氣、戲謔の想に乏しけれど、必ず、一ふしありて、巧語人願を解かざるはなく、温雅清秀なる点に於ては、却りて、父に優れり。但、この

歌などや、父の衣鉢を傳へたる作ならむ。國史に「素性亦善和歌頗有父風」と見えたるも、其の謂なきにあらず。

うりん院にて櫻の花をよめる

そらく法師

いさ櫻われも散りなむ　いさかりありなば人にうきめ見えなむ

○この歌、素性集に入り、六帖にも素性の歌とせり。○前の「櫻ちるの歌の詞書の、これと同じさまなるに、間に素性の歌を挟みて、又、承均の歌を擧げたるは、いかくなれば、是れば、素性の歌なるべしと眞淵はいひ、景樹は、これは、由性法師の歌にて、承均にも素性にもあらじといへり。由性も遍昭の徒弟にて、雲林院別當となりたる人なれば、そも一理あるが如くなれど、尙、其の確證はなく、歌意も誰れの作としても聞ゆれば、まづ、齋のまゝに従ふを穩かなりとす。廣蔭は、このあたり、部立の違へるなりとて、(一)櫻花ちらばちらなむ、(二)いめ見し君もやくると、(三)春霞なに隠すらむ、(四)たれこめて春の行方も、(五)櫻ちる花のところ、(六)花ちらす風のやどりは、(七)いさ櫻われもちりなむ、(八)枝よりも仇にちりにしとやうに、序次を立てたり。○われも散りなむ　身の行方もなくする事、即ち、退散の意なるを、花に對へて、われも散るといへり。○いさかりありなば　一時の盛りがわつてしまふならばの意。○うきめ　愛さ目に、めは見ぬの約、難儀ナ目、恐ロシイ目の目と同じ。○見え　見られの約なり。一首の意は、いさ櫻よ、汝が散るならば、自分も一所に、何處へなりと、退散してままはむ。

花も人も、一盛りがあつて去まらうならば、衰へたる見苦しき様子を、人に見らるゝならむと思へばサとなり。

(八六)

(評) 榮枯盛衰の、世間の常法なる事は、作者の、夙に承知せる處、今更驚くにも足らぬを、われも散りなむと、其處ともなく、あくがれ出でむの決心をまで、打出でたるは、作者さし當りて、何かいたく、感動激昂せし事あるを、たましく、落花を見て、惘然、覺悟したらむ口氣にて、感氣あり。景樹が、作者を、雲林院の別當たる由性法師として、其の名譽なる、別當職を辞して、寺を開かむと思ひ立てる意にて詠めりといへるは、其の事實こそ、遠には諸難けれど、歌の意は、よく聞取り得たる考なるべくや。初二句のいひなし、簡潔なり。又、この歌、二段に切りと、のへたるに、いつれも、なむといふおなじ詞を以てとぢめたるは、古歌には多かる例にて、後世の如く、さのみさし合とはせざりしなり。

あひ忘れける人の、まうできて歸りにける後に、よみて花に  
さしてつかはしける。 つらゆき

一め見し君もや來るご櫻はなけふは待ちみて散らば散らなむ

(釋) あひ忘れりける云々 舊知己の、久し振にて訪來れるが、間もなく歸りて去まひたる後に、花の枝に、歌書きたる紙をつけて贈りけるなり。○一め見し 一度一寸見しなり。○君もやもやは萬一の事を疑ひていふ詞。○待ちみて みては試みての意なり。

一首の意は、これ、櫻の花よ、此の間、一寸逢ひし人が、又、若しや來るかど、今日一日だけはサ、待試みて、いよ／＼來ずば、其の時にこそ、散るならば、勝手に散つて實はうとなり。(評) いかにも、暫時にて立歸りし人なれば、猶、景慕の情に耐へず、今も逢はむと下待つ心を、櫻のうへに移して、今日だけは待試みてといへるは、大方、今日は御座りさうな物ぞと、間接に、其の來訪を促せるにて、措辭、極めて、婉曲なり。かく、いひおこせられたる人、苟も、物のおはれ知れらむからには、必ずや、花に辜負する謗受けむも心苦しければ、其の日を過さず、再び訪はでは、えあらぬ業なるべし。況や、散り方の花にさして遣はしけむには、時の間も、猶豫がたき心地まつらむよ。

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花散るまをたにも見るべきものを

(釋) ○なに 俗言のナセと同じ。

一首の意は、山の櫻の花を、春の霞が、このやうに、なせに隠すのであらう、それは、見事なる盛りの間はどこにかく、せめて、其の散る間だけでも見る筈のものを、それも、霞故に見られぬがつらしとなり。

(評) 散るまをたにもは、盛りの間に對せる意なり。さて、今は、盛りの間を見たしなどいふ、驕り沙汰にはあらで、せめて、はや見立てもなくなりたる、散る間をなりとも望むに、それをす

(八七)

ら、猶隠して見せぬ霞は、そも、何の心ならむ。誠に、意地が悪いの一言を呈するより外はなかるべし。かくいひ落すが、此の歌の手にて、僅に、なにといふ一冷語を下して、この意、一首に波及活動す。いつも霞める遠山の櫻の、覺束なきを見渡して、さて詠めるならむ。

心地そこなひて煩ひける時に、風にあたらじごとて、れろとめてのみ侍りけるあひたに、折れる櫻の、散り方になれりけるを見てよめる

藤原のよるかの朝臣

垂れこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

(釋)心地そこなひて云々 氣色の悪くて惱みて居りける時、邪熱にてもありしにや、吹く風に當るまじと思ひて、簾、几帳などを下して、内を籠らせてばかり居りける間に、折りて花瓶に挿しおきたる櫻の、はや咲過ぎて、散りさうになりてありたるを見てよめるなり。○垂れこめて簾帳帷を垂れて、内を籠らせての意。○春のゆくへ 春の暮行く方の意なり。

一首の意は、自分は病氣故に、垂れこめて、引籠りてのみ居て、春の月日の過行く方も、一向知らぬ間に、兼てより、咲かば見むものと、折角樂みに待ちし櫻さへも、はやこのやうに、散り方になつてまうたツイとなり。

(評)病氣の、やゝ、輕快を覺えし折にや、垂れ籠めたる帷などを掲げさせたるに、あたりになし置かせたる、花瓶の櫻の、はや、末になれるを見て、知らぬ間の日數の程を、打驚けるなり。但、

其の端的の作ならむには、第一に感觸したる、櫻の移ろへる事を先にし、第二の觀念たる、春の行方もまらぬ意を後にことわりて、倒句を用ゐるべきが、其の驚愕の意思を表はす、適當の語法なるべきを、これは、一旦思ひ鎮めてさて詠めるなれば、風情の、秩序正しく寄り來るまゝに、眞直にいひ下せるなり。待ちしの一語を添へて、殊に垂れ籠めし日數の、長かりし意を強めたる、妙といふべし。思ふに、其の折枝は、蕾のうちより挿したる櫻なりけむ。又、二句のはての、もの辭は、春の行方のみならず、何事をも覺えざりし意を含み、四句のはてのもの辭は、病み着さし頃に、既に咲初めたりし、餘所の櫻の移ろふは、無論の事として、待ちし櫻さへもの意と聞ゆるは、上の強き語勢に惹かされて、この辭に力の籠ればなり。針灸藥餌の間に、あたら、三春の歌を空しうす。眞に、凄婉絶むとするの作。

東宮の雅院にて櫻の花のみかは水に散りて流れけるを見  
てよめる

すがのく高世

枝よりもあたに散りにし花なれば落ちても水の泡さこそなれ

(釋)東宮の雅院 待賢門内中御門の北、壬生の東にあり。東宮の御元服の座を設け、其の御宴もある所なり。常は、東宮の音樂學問等を習ひ給ふ所とぞ。○みかは水 禁中の砌を流るゝ水にて、此處ハ雅院の下水をいふ。○散りにし にもしも過去の助辭なり。

一首の意は、枝からも、はかなく散つてままひし、櫻の花の事なれば、下へ落ちてもやはり、

脆き水の沫とサなるワイ、他の物とはならずしてとなり。

(評)さて、花は、何處まではかなき物ぞ、といふ餘意を含めり。上下の、もの辭、相呼應して、其の韻遠く、味ひ長し。落花点々、水に貼して浮べるが、恰も、水沫の如く見ゆるを、斷然、水の沫と變化乏了れるやうに詠み做せるを、この歌の、一ふし巧める處とす。

櫻の花の散りけるをよめる

つらゆき

ここならば咲かずやはあらぬ櫻花見るわれさへにまづ心な

(釋)〇ことならば かくとならばの意。〇咲かずやはあらぬ なせに咲かずには居らぬカイの意。

〇まへ 物のあるうへに添ひ加はる意の辭。〇まづ心 静かなる心なり。

一首の意は、櫻の花は、とてもこのやうに、早く散る程ならば、一向に、最初より咲かすにあればよいものを、何故咲かすには居ぬぞ、このやうに氣せわしく散る櫻の花を見て居る。自分までが、そはくして、落着いたる心もないワイとなり。

(評)なせ、最初より咲かぬのであると、殿しく、花を談じ付けたるは、愛惜の情の餘りに出でたる激語にて、蓋し、反映の筆法なり。前に、業平朝臣の、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

と詠めるに似かよひて、一層、核實ならむ事を欲したれど、彼れは天工、これは人為、比較しては、即ち、雲泥の差あるを見る。

櫻の如く散るものはなとこ人のいひければよめる

さくら花さく散りぬとも思はえず人のこころを風も吹きあへぬ

(釋)櫻の如く 櫻の如く疾くの意。〇散りぬ 散つてましまふなり。〇思はえず 思はれずの意。〇吹きあへぬ 咲かむとして吹く間もなきをいふ。

一首の意は、自分には、さう櫻の花が、早く散つてましまふとも思はれぬワイ、そは、櫻の花は、まだ、風の吹くを待ちて後散るを、人の心はサ、早く移り變る物にて、風の吹く間もないワイとなり。

(評)されば、人心は取分け仇なる物ぞ、といふ餘意を含めて、人の詞に就きて、今一つ其の上をいへるなり。ぞの辭、櫻の花に對へて、人の心をば、強く取出でたる意なり。風も吹きあへぬは、變る事の早さをいはむとて、花の縁語を以て理りを合せたり。げに頼み難く變り易きは、飛鳥川の深瀬にも喻へ來れる人心なれば、そを深く憤りての作なる事は、いふまでもなけれど、猶、詞書に、人のとある、其の人たるや、作者の契をかはせる婦人などにて、この頃、心變りせし素振の見ゆるが、いへる詞にもやあらむ。さらば、其の情致狀況、相照映して、一層の感慨あるが如し。

さくらの花の散るをよめる

さきの友則

ひさかたのひかりのとけき春の日にまづ心なく花のちるらむ

(釋)〇ひさかたの もと、天の枕詞なるが、轉じては、日月雨雲星なぞ、すべて、天象の物の枕詞に用ゐらる。此處にては、日の光と續く意なるを、略して直に、光にかけたり。〇ひかりのどけき春の日に 日の光の、ゆつたりとして麗らかなる、春の日であるになり。春の日の日は、時節の意にて、太陽の事には非ず。にはなるにの意なり。

一首の意は、大空の日の光の、ゆつたりとしたる春の日なるに、何故に、花が、このやうに落着いたる心もなく、そはくくと、せわしく散るのであらうぞとなり。

(評)初句に、枕詞を置きたるも、三句まで一旦にまらべ下したるも、調をのどめむとの業なり。又、三句のにと、結句のらむと相呼應して、其の間に、何故にといふ疑問の意を生ずる事は、意釋に照して知るべし。但、これを詞のうへに顯はさるは、この歌には、殊に、大事の理由ある事にて、作者の商量を費し、處ならむ。さるは、何故になぞやうの、難詰的の言語を用ゐる時は、意調の激して、平和なる一首の仕立を害すればなり。花のの、のの辞も、また、調を緩和したり。畢竟、靜中の動を認めたるが趣向にして、まづ心なく散る花あるに、いよく、春の日の長閑けく、靜やかなる感じの浮ぶを覺ゆ。語勢一の迫れる處なく、なだらかなるに、聲調また滑らかにして、のびくとしたる姿なるは、よく、歌意と相愜へり。この集中の絶唱、神品に入るものか。

二句、六帖に、光さやけきとあるはむろし。

春宮のたちはきの陣にて櫻の花の散るをよめる

藤原のよしかせ

はる風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふこ見む

(釋)春宮の云々、たちはきは延喜式春宮式に「帶刀舍人三十人分配侍衛」とありて、春宮御警衛の武官なり。其の帶刀の、兵仗を帶して陣列する語所を、帶刀の陣といふ。〇あたり、近邊なり。〇よきて、俗のヨケテに同じ。〇心づから、心がら、自然にの意、即ち、心がらなり。〇見む、試みむの意なり。

一首の意は、春風汝は、咲く花の近邊をばよけて吹けよ、それは外でもない、風に當らぬとも、若し、花は自分の心から、ひとりでに散るものかと、驗して見むと思ふ故にとなり。

(評)よもや、櫻の心がら散りはすまじの餘意あり。かやうの擬人は、例の事なれど、猶をかし。今も、風に誘はれて散る花を見て、其の風に逃へて見たるは、蓋し、落花を惜む情より、種々に思ひ感ひて、心を盡せる趣なり。

さくらの散るをよめる

凡河内躬恒

雪このみふるたにあるを櫻はないかに散れどか風の吹くらむ

(釋)〇雪このみふるたにあるを、雪のやうになりて、只管散るサへ惜しくあるものをの意。〇いかに散れどか、ドノやうに烈しく散れどいうてかの意なり。

一首の意は、櫻の花は、風の吹かぬ時にも、雪のやうに只管散るが、それサへ以て惜しくある

ものを、またこのうへ、どのやうに劇しく散れというてか、風の吹くのであらうとなり。  
 (評)落花を雪と見立てたれば、其の縁にて、散る事を降るといひ換へて、下の散れとあるにさし合ふを避けたり。又、のみの辞に、花の頻りに散る状をめぐらし、いかにちれどかに、吹き添ふ風の、無慘なるさまを強く聞かせ、且、これまでは、風なくしても、雪とのみ散りし趣を知らせたるなど、作者が、彫蟲の技に長けたるを見つべし。景樹が、心面白く、詞うるはしく、調高くなつかしきは、勝れたる歌なべしと、いたく、賞讃せるは、蓋し、おのれが、憲章する歌風に適應せるより、殊に宜しくは聞えしならむも、一わたり、さる俤はありて、手なきやうにて手のあるが、この出色なる所以なり。

ひえにのほりて歸りまうで來てよめる

つらゆき

山高み見つゝわがこしさくら花風はこゝろにまかすべらなり

(釋)ひえに云々 へえは延曆寺のある比叡山にして、山城國愛宕郡にあり。そこに上りて歸り來て後よめるなり。さうでは添へたる詞。○見つゝわがこし 見ながら自分が來たの意なり。一首の意は、山が高さが故に、花のそばにはへ行かで、残念ながら、心にも任せず、餘所に見ながら、自分が歸り來りし其の櫻の花を、跡にて、風は自由に散らしなせして、心に任せさうな様子だワイとなり。

(評)わがに對へたる、風はのはの辞の力あるに、いたく、風を羨むらむ餘意を生じ、又、初二句の間に、心に任するならば、一枝折りもまたき意籠れり。又、上句の見つゝわがこしは、即ち、わが心に任せざりし事なれば、それに對へて擬人して花を吹散らす事を、風の心にまかすと云へり。叡山延曆寺の根本中堂に詣でて、四明の峰頂に咲ける櫻を望みたるを、歸りて後思ひやれるならし。廣蔭が、櫻花は寺の稚兒に、風は山法師に喩ふ、貫之參詣して稚兒を見て、手折らまほしく思ひたれど、さはなり難きを山高みといひ、止むを得ず、よそに見てこしを、かの山法師は、心に任すべらなりと羨めるなりといへるは、當時の風俗になき事にもあらねば、一説として見るべき價值あるが如し。

題をらす

(大友) 一本 大友くろぬと

はる雨のふるはなみたか さくら花散るを惜まぬ人ひなければ

(釋)作者の名の肩に、一本とあるは、もと、よみ人まらずの歌なりけむを、一本に、この名あるによりて、書入れしならむ。既に六帖には、作者を黒主とせり。又、黒主の氏を大伴と書くは誤なり。○なみだか かは疑辭。○人し まは強辭なり。一首の意は、このやうに春雨の降るは、世間の人のこぼす涙なるか、なせなれば、櫻の花の散ることを惜みて、嘆かぬ人がサ、一人もないによりてとなり。

(評)花散る頭をうち濺ぐ、春雨の夕暮などに詠めるならし。わが泣きぬばかり、落花を惜む情の切

なるより、世界の人も、必ずさるべき事と定めて、その多くの涙の集まりて、かく、春雨と降るかといへる詩的の想像なり。事ひろく面白き歌と真淵は評せり。

(九六)

亭子院の歌合のうた

つらゆき

さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空になみぞ立ちける

(釋)○なごり 波殘の約にて、餘波と書き、海邊などにて、風の吹き止みし跡に、猶立つ波をいふ。後には、波ならぬ他の物のうへにても、其の本跡の失せたる後に、聊か、其のまゐるしの物の存在をいふ。形見の意なり。後世、又、一轉して、別といふやうの意に用ゐたり。

一首の意は、海の邊にては、なごりとして、風の風きても、波の立つ事あるが、櫻の花の誘はれて散つてまゐらう、風のあとの餘波には、海邊とは違ひて、水もなき空に、花の浪がサ、立つたツイとなり。

(評)落花を、風の、吹き上げ吹き下して、空中に捲き立つる状を、白波の立つに見倣して、水のある處に立つ波は、不思議にもなきが、水なき空に波の立ちけるが、珍しき景色なる哉の餘意あり。景氣面白し。前にも「花なき里に花を散りけるといひ、今又「水なき空に浪を立ちけるといひ、又「櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ花を散りけると詠めるなど、まづ、一ふし珍しからむ詞を構へ出だして、さていひ落す、紀氏の慣手段にて、四五の句の應接、恰も、詩の轉結と、結句との關係に酷似せり。これも再三となりては、聊か、興醒むる心地するのみならず、其の

弊や、尖巧に傾きて、風格高からざるをいかにせむ。

これまでは、櫻を詠める歌を擧げたり。以下は、諸木の花にて、櫻に限るにあらずと知るべし。

ならのみかとの御歌

故里のみかにと奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

(釋)ならのみかど 平城帝を申す。真淵が、此處に、ならの御門の御歌と記せるは、後人の所爲にて、もとは、題しらず、よみ人しらすとありしなるべき由論じたるは、さる事なり。秋歌下に「龍田川紅葉亂れて流るめりといふ歌を擧げたるも、題しらず、よみ人しらすとありて、左註に「この歌は、ある人、ならの御門の御歌なりと名ひ申すとある、書式を思ひ合すべし。されば、左註に、この詞書をまはすべきなり。○故里 舊都の地なり。○奈良のみやこ 大和國の寧樂の京にて、元正帝より光仁帝に至る、七代の帝都なり。

一首の意は、昔の都趾の地となつてましまし、この奈良の京にも、やはり、色は昔に變らずして、都にてありし時の通りに、花は咲いたツイとなり。

(評)他の變り果てたる物に當りて、色は變らずといひ、昔の面影もなく衰へ果てし物に當りて、花は咲きけりといへるなり。はの辭の深味ある事に注意せよ。これを濫用したるは、いよく、其の意を強めたるなり。菅三品の、過平城古京と題せる詩句に、

(九七)

綠草如今麋鹿苑。紅卷定昔管絃家。

(九八)

と作れるぞ。万事變りに變りて、淺茅が原とぞ荒れにける舊都に、昔ながらに咲匂へる櫻を見て、今昔の感に堪へ給はざりしより、詠ませ給へるなるべし。殊に、この帝は、奈良の地を愛でさせ給ひ、御讓位の後は、平安の新都を措きて、又も、奈良に住ませ給へるより、平城天皇と申し奉る程なれば、御父桓武帝の、平安城に遷都後、奈良の京の、漸々衰へ行くを歎かせ給ひ、且は、人情の、舊を捨て、新にのみ奔る、輕薄を憤慨させ給ふより、たましく、櫻の花を見て、感懷を寄せさせ給へるならむ。御歌さまも、奈良の時代の餘風を存して、高古仰くべし。

初二句、六帖に、いその上ふりにし奈良のとあり。例の采らず。

春の歌にてよめる

よしみねのむねさた

花の色はかすみにこめて見せずとも香をたにぬすめ春の山風

(釋)春の歌とてよめる。とてに注意を要す。春の歌といひて思ふ事を詠める意なり。つぎく同と詞書あるも、皆、其の心して見るべし。○春の山風 山より吹來る春風をいふ。

一首の意は、春の山風が、大事にして、花の色は、霞の中に籠め置きて見せずとも、せめて、其の香をなりとも、霞の中より竊み出だして、こゝに匂はせてくれ、コリヤ、春の山風よとなり。

(評)この、花を秘めて見せざる主人公は、恐らくは、春の神なる佐保姫にもやあらむ。おなじ擬人にも、誘へといふべきを、竊めといひ換へたるは、この作者の風体にはあれど、管に、臧少き口輕さのみにはあらず。佐保姫が、霞の帳のうちに花を籠め置きて、色は勿論、香をも洩らさじと、大事にうつくしみかしづく狀を思はせたるもの。だにの辞によりて、四句違しく聞ゆ。さて、詞書のさまと、歌の意とを案するに、必ず、寓意ある作と見ゆたり。或は、身分高き女に思ひかけたるか、或は、中垣据ゑられて、女の逢ひ難くなれるかの際に、其の媒する女房などを責めて、かの父兄は、大事にして、我には逢はせずとも、かのけはひだに洩らして聞かせよ、かの消息をだに忍びに取次げよといはむ程の意なるを、思ふ人を花に比したる縁にて、香をだに竊めといひ、さて、春の山風をば、其の女房に比したるならむ。道濟の十牀に、比興の部に擧げたるも、この意を汲み知りたればなり。眞淵は、詞さはやかに心をかしと評せり。かく、婦人の上に関係せる事柄にはあり、且、清淨無垢の僧正遍昭となりての後の作にもあらねば、作者の名に、遍昭と書かずして、良岑宗貞の俗名を顯したるは、選者の遠慮せし處なるべし。猶、宗貞の名を以て載せたる歌、集中、雜部に二首あり。いづれも、婦人に関したる事なれば、嫌疑を避けむが爲と見ゆ。

又、この集冬の部に、小野篁の歌、

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

姿詞いたく相似たりや。篁も宗貞も、同時代の人ながら、篁は宗貞の先輩なれば、篁の作を点

(九九)



化玄たるものなる事は、勿論なるべく思はる。但、其の詞や、彼れは古にして雅に、これは今めかしくて花やかに、劃然として、其の體格を殊にせるに、二人の特性の、活動發揮せられたるを見る。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春立てぼうつろふ色に人ならひけり

(釋)○花の木 花の咲く木をいふ。○ほり植ゑじ 野山より掘りもて來て植ゑまいの意。○うつろふ色 花のはかなく變る色をいふ。

一首の意は、花の咲く結構なる木サへモ、モウ今は掘りもて來ては植ゑまい、なせなれば、花の咲かぬ間はさもなきが、春が來れば、花が咲きて、早くも變るその色に、人が見做ひて、心を變へたツイとなり。

(評)この間の花の盛に訪ひ來し人の、輕薄なる振舞ありたるを憾みて、移ろひ方の花の木に對して詠めるものぞ。初句のもの辭、二句に應じて力ければ、俗言のサへモの意に當る。新撰萬葉、拾遺集等に、花の木はとあるを、景樹が、然るべしと執したるは、全く、このものを精しく聞取らざりし誤なり。今はといへるに、これまでは掘り植ゑし事あるを知らせ、又、春立てば、花咲けばの意なるを、初句の花へのさし合もあれば、類似の意義に轉換して、旁、露骨を避けたり。又、この句によりて生ずる餘意は、意釋のうちに補ひて解けるを見よ。歌は、やよ、氣

卑く、體下れるが如し。

題を知らず

よみ人知らず

春の色のいたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆるらむ

(釋)○春の色 陽春の氣を、漢語の春色といふ文字に就きて、直譯して通はせたり。

一首の意は、天下一帶の春なれば、その氣色が行渡りたる里、行渡らぬ里の、分け隔てはあらずまい、それを、何故に、花の咲きてある木や、まだ咲かずにある木やの、見ゆるのであらうとなり。

(評)花に遲速あるを見て、其の理を愚に疑へる意と見ゆ。別に、寓意ありて、咲ける花を人に、咲かざる花を自身に比して、天に不公平はあるまじきに、なぞて、幸不幸のある事ならむ、どやうの失意の述懐とも見らるれど、詞書もなければ、あながちに執し難し。上下の句の間に、何故にの語を挿みて聞くべし。元來、只、春の色の到らぬ里はあらじを、咲かざる花の見ゆるらむといふ程の事なるを、到らぬといはむとては、まづ、いたりといひ添へ、咲かざるといはむとては、咲けるといひ添へたるにて、同語を反對の意に歌ひ換へ、詭ひ延べ、又、二三の句と、四五の句とを、全然、同一の語法語調を以て聯對せしめたる、音節合拍の間に、無盡の風味の生ずるを覺ゆ。初句三句の字餘り、試に、一字を省きて吟じ見よ。必ず、調迫り節短くして、宮商の乱るゝを知らむ。殊に、三句は、結句の七字に對へるなれば、強く剛く調べ成さずば、腰の折れ

ぬべき恐れあり。されば、字餘りを用ゐたるうへに、はの辞力ありて、一首の司命となれり。要するに、音樂的謠物的に、調べなしたる歌にこそ。

春の歌ごてよめる

つらゆき

三輪山をまかもかくすか春がすみ人に知られぬ花や咲くらむ

(釋)○三輪山 大和國式上郡にあり。○まかもかくすか かくも隠す事かなの意、かは歎詞。○人に知られぬ 人に知らされぬの略なり。

一首の意は、春の霞が、三輪の山をこのやうにマア、霞めて隠す事よ、これい、山に、人に知られてならぬ、秘藏の花が咲くのであらうかとなり。

(評)氣高き人あるあたりを、物もて圍ふやうに見なしたるなりと、景樹のいへるが如し。初二句は、萬葉集卷一に、

三輪山をまかも隠すか雲だにもこゝろあらなむ隠さふべしや

とあるを、其のまゝ取用ゐて、雲を霞に換へたり。夙く、梨壺の五人以前に、紀氏の、万葉にも通せし事を見つべし。

初二句、六帖に、山毎に立ちも隠すかとあるは、いかゞ。

うりんるんのみこのもこに花見にきた山のはごりにまかれりける時よめる、  
そせし

いさけふは春の山べにまじりなむ暮れなほなげの花の陰かは

(釋)うりんるんのみこのもこに云々 うりんるんのみこは、前にもいへる、常康親王を申す。北山のはどりなる、雲林院の親王の許に、花見むとて行きたりし時に詠めるの意なるを、上下に文なして書けるなり。一本、みこのもこにとあるを、景樹は正しとして、雲林院は、北山より半里も隔りをれば、みこの許に、北山にまかるとはいはれずといへれど、詞書には、北山のはどりにとこそあれ、北山は、都人の遊び所として有名なれば、まづ、其の名を取出でたるまでに、直に、北山へ行けるにはあらず。○山べにまじりなむ 山邊に入りて遊ばんの意、まじりは一所のみにあらず、あちこちと遊びあるく事を聞かせたり。○なげの 無氣といふが語の本にて、なげの情、なげのいらへなど、有るも無きも同様なる意より、等閑、なげやりなどいふ意に轉じたる語なり。○かは 反動の辞なり。

一首の意は、ドリヤ、今日はゆるりと、この春の山のあたりを、所定めず、心任せに遊ばう、なせといふに、日が暮れてましましたならば、なげやりになりさうなる花の蔭かマア、日が暮れてましましても、捨難げなる花の蔭なればサとなり。

(評)人々伴ひて、雲林院の山嶺を、北山かけて花見に行きて、其處にて詠めるならし。發端、いざと打出でたるより、まじりなむと収めたるまで、いかにも落付きて、悠々閑々と構へむけしきなれば、これが観染となりて、暮れなほと、おのづから歌ひ出でらるゝなり。けふは、他の日に對へたり。なげの花の蔭は、この親王の御許を指して擬へたるならむ。なに、日の暮れ

たなら暮れたにて、又、相應に、風情のありげなる御あたりなれば、何時もとは違ひて、ゆるりと、花見せむの意を籠めたり。雲林院の、いまだ、寺とならずして、常康親王の住ませ給へる頃は、貞觀十一年より以前の事なれば、素性も、いまだ、在俗の良岑立利にて、若盛りの殿上人たりしと覺ゆれば、歌の體も、かのづから花やかに、まかも、其の意思に、年少氣銳の躁氣を帯びたるぞうべなる。

三句、顯本、奥儀抄等に、まどひなむとあるを景樹は執し、まどひは統ひの義にて、團欒する事なりと釋せるは、一家言にて從ひ難し。

春の歌にてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しららずは千代もへぬべし

(釋)〇あくがれ あくがれも同じ。俗言の、浮かれといふによく當る。〇ちらすは 散らぬ時はにて、はの辞消むべし。〇千代 千年に同じ。〇へぬ 經過し畢るをいふ。〇千代も もはサヘモの意なり。

一首の意は、花の面白さに、何時までかマア、この野邊に浮かれて、遊びあるきて居る事であらう、この分にては、若し、花がサ散らぬ時は、歸るを忘れて、この野邊にて、千年でも經ててままひさうなワイとなり。

(評)まづ、野花を愛する情の甚しくて、我れながら、その極度を知らぬやうに疑ひ、次に、花の咲

たいゑららず

よみ人ゑららず

春をこに花のさかりはありなめどあひ見むこは命なりけり

(釋)〇ありなめど なめはなむの變化なり。〇あひ見む 逢ひ見むなり。相見むの意といへる説は采らず。

一首の意は、今年に限らず、いつの春にても、花の盛りはあるであらうが、其の花盛りに逢ひて見やう事は、即ち、人間の壽命次第の事であつたワイとなり。

(評)命は明日をも知れぬ故、またも逢ひ見む事は、頼み難し。まか思へば、誠に残り多きこの花なる哉の餘意あり。花と命とをかけ合はせて、花よりはかなき命なることを知らせたるが、一ふしなり。又、なりけりは、かく、上句を解釋し、説明する場合に用ゐて、かねて、歎息の意を顯はす詞なるを、近世のには、動もすれば、この用格に適はざるが多きは、濫といふべし。歌は、命をかけたるを以て見れば、老人などの、花に對へる感懷を述べたるものと覺し。二句、六帖及び、素性集に、花の句はどあるは、いたく劣れり。

花のてこ世の常ならばすぐして昔はまたもかへりきなまじ

○

(106)

(釋)○花のごと 花の如く也。○世の常ならば 世が常磐にあらばの意、無常の反對なり。○すぐしてしては過去の助動詞をうち重ねたるなり。○またも もは歎詞なり。

一首の意は、花の一旦散りても、立返りく、年々定まりて、このやうに咲く物なるが、世の中が、この花の如くに、定まりて變らぬ物であれば、自分が過して來りし昔は、再びマア、立返りて來るであらうにサといへるにて、まかし、世の中は花の如くならぬもの故、過してし昔の、又も返る事なきが悲し、といふ餘意を含めたり。

(評)花は脆き物、はかなき物と、誰れも承知したる事を、花のごと世の常ならばと喝破せるは、前にも「残りなく散るぞめてたき櫻花と詠めると、おなじ手段なり。これも、作者は、老人或は、昔、勢ありて盛なりし人の、懐舊の詞ならむ。

○

吹く風に逃へつくるものならばこの一本はよきよこいはまじ

(釋)○逃へつくる 注文をいひ付くるの意、つくるは告ぐるにあらず。○よきよ よけよと命する意なり。

一首の意は、空を吹く風に、注文せらるゝ物であらうならば、他の木のともかく、此の花一本だけは、除けて通れといはうにサといへるにて、ドゥモ、さうならぬによりて、仕やうもなしといふ餘意を含めたり。

(評)庭前の花に對して詠めるならむ。花といふ語を着けずして、其の意のめぐれるを一ふしとす。三句、このと指し、はと承けたるは、強く、他の諸木と取分つ意なれば、それを、いたく執心して、愛玩する状見たり。

四句、六帖、顯昭注等に、この一枝はとあり。こは、折來て花瓶などにさせる、花の枝を詠めりと聞ゆ。眞淵は、もとは、一枝とありつらむを、狭しとて、後人の一本と直ましならむといひ、景樹も、わが物と領じて、殊にもめづるこの一枝のみ、世のおしなべならず、吹く風も心せよと、はかなく願へる方、感ある心地せらるゝにやといへり。

○

まつ人もこぬもの故にうぐひすの鳴きつる花を折りてける哉

(釋)○もの故に ものであるからの意、場合に應じて、其の下に、適當なる詞を補ひて聞くべき格なり。○折りてける哉 折つた事よなアの意なり。

一首の意は、待つ人も來ぬものであるから、折らずとも事なりけるを、必ず來る事と思ひて、鶯の面白く鳴き居たる、あたら、花の枝を、折つてのけたる事よなアとなり。

(107)

(評)さても、惜しき事を去たるもの哉の餘意あり。折りてける哉と歎じたるに、其の趣、充分顯れたるを、猶、可愛相に、鶯の鳴き居たる花と形容して、いよくあたらしむ意を強めたるなど、功者の仕業にこそ。來むと約束せし、客への馳走にとて、花瓶に挿したる花を見て、かく、一筋にひたすら、折りしを後悔するやうにいひ做せるは、畢竟、隱約の間に、其の來らざる人を怨める意を洩らせるなり。又、案するに、題しらすとあれば、事情は明らかならねど、恐らくは、其の約束違ひをせし人の許に送りし歌にはあらじが。まか見る時は、意況照映して、一きは面白くや。詞婉に意微なり。當に、言外に於きて、幽怨の旨を領取すべし。

二句の故には、六帖には、からにとありて、躬恒の歌とせり。又、四句の、花を、一本に枝とせるは、凡手も希はざる處にして、更に、佳ならず。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 藤原興風

さく花は千種ながらにあたなれと誰れかは春を恨みはてたる

(釋)〇千種、いろくあるをいふ。〇ながらに、皆悉くの意の接尾語。〇あた、移り易く頼み難き意。〇恨みはて、恨みて思ひ切る意なり。

一首の意は、世に、春咲く花は、種々ありながら、皆悉く、わたなる物なれど、それでも、誰れがマア、其の仇なる花を咲かす春を恨みて、見限りたるぞ、やはり恨みて見限りたる者はなく、花は仇なりといひつゝも、其の春を賞翫する事なりとなり。

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山のはなの影かも

(釋)これも同時同人の歌なり。〇色のちぐさに、霞の色が、紅くも白くも、いろくへの意。〇かも、歎詞なり。

一首の意は、春の霞の色が、種々さまざまに見えたのは、その霞のたなびく山の、くさぐさの花の色が、霞へ映ったのかマアとなり。

(評)まかど、實境のたどり難き歌なり。諸注、野山の花を見たる意に解き、景樹は一層演繹して、打見渡せる山邊に色めくを、ふと、花かあらぬかと、目惑ひたる、とばかりの間の趣を詠めるにて、霞を取立て、いふも、景色につけるいひのなしなりといへるを、廣蔭は、こは、後の宮の御殿の築山のけしきを詠めるなり。種々の花を植ゑたる築山なれば「春霞色の千種に見えつ

るはと、まことの野山の如くに詠みなせるが歌なり。諸注、まことの野山と思ひて説けるは違へり。いづこにか、花の影の、千種に、霞に映りて見ゆる山あるべきと論せり。いづれか、正鶴の説ならむ。新撰万葉に、

霞光片々錦千端。未辨名花五彩班。遊客廻眸僧誤道。應斯丹穴聚鷄鸞。

と、この意を譯したり。されば、廣蔭の説據あるにや。とにかく、印象不明瞭なれば、巧拙を論ずるに及ばず。

○ かすみたつ春の山べはこほはけれと吹きくる風は花の香ぞする

(釋)一首の意は、長閑なる霞の立つ、春の山のあたりは、遠方なれど、其の山の方より吹きて來る風は、花の匂が、存外するワイとなり。

(評)淡蕨の裡に籠りて、依稀たる春山は、いかにも、花も吹けらむ風情なれば、近わたりの花を吹過ぎし風にや、ふと打匂へるを、直に、かの山の花の香の、いかで、この遠方までは匂ひ來れるならむと、はかなく幼く詠めるが、興あるなり。初句、霞立つは、春山の形容ながら、三句に、遠けれどといはむ、伏線を兼ねたり。要するに、山邊は遠けれど、近く花の香ぞすると、遠近を對照せしめたる趣向と覺し。

うつろへる花を見てよめる

みづね

花見ればこゝろさへにぞ移りける色にはいぞ人もこそをれ

(釋)うつろへる花 うつろふは、色の變る事にも、散る事にもいへれど、詞書には、色の變る事にのみ用ゐて、散るを、皆、散ると書けり。○色にいでし顔色には出すまいの意。○もこそもは歎詞、こそは事物を強く指定する意の辞なれど、かく、連続する時は、萬一の事を治定していふ意の辞となる。

一首の意は、花を見れば、盛りの時も、かく移ろへる時も、その折々に心の染みて、花の色の變れるのみか 見て居る自分の心までがサ、移り變つたワイ、心の變るは恥づべき事故、顔色だけには出すまい、若しやすると、人が知るからとなり。

(評)諸註、移へる花を惜む故に、心までか、花に染みて移るといひ、又、景樹の、花見れば、心さへ花やぎて仇めくと解けるは、皆當らず。前に、移ろふ色に人ならひけりと詠めると同趣にて、意釋の如くに解せずは、心の移るといふ意輕くて、下句の強き語意語調に招應せず。初句の彼の辞、例の方あるに、外の事にはさしもなきが、といふ餘意を生じて、花を強く愛する趣見えたり。又、四句は、花の、色に出でて移れるに對へて當りたるにて、色にはのはの辞の添はれるに注意すべし。心のうちにはともあれ、顔色には出でじの意なり。さて、初め、心の移るといへるより、其の縁に繼りて、戀の趣に取なして詠めるなり。浮華にして、眞摯の情に乏し。二三の句、六帖に、心さへこそ移りぬれとあるは采らず。心さへこそ移りぬれ

題を知らず

よみ人知らず

うぐひすの鳴く野へ毎に来て見れば移ろふ花に風を吹きける

(釋)一首の意は、鶯の悲しさうに啼く、野邊といふ野邊を、自分が来て見れば、啼くも道理よ、いづれの野邊も、散り方になりたる花に、風がサ、吹いたワイとなり。

(評)春色今正に關にして、花の散らぬ野もなく、鶯の鳴かぬ里もなし。これを取合せて、散らむずる花を惜みて、鶯の啼くと見たるが、趣向なり。好調諧語。これより以下の六首は、落花に鶯を結べる歌を擧げたり。

○

吹くかせを鳴きてうらみよ鶯は我れやははなは手に觸れたる

(釋)一首の意は、自分が、花を散らしもまたるやうに、鶯は自分に對ひて、恨みがはに鳴くが、ソリヤ恨み處が違ふべきぞ、あの吹誘ふ風を啼立て、恨みてくれよ、自分は散るが惜しさはこそ、こゝには立寄りたれ、花に手ひとつさへも觸れたる事か、一寸にても觸れたる事もなしとなり。

(評)風に亂れてうち散る花の面白さに、木の下に立寄りて、恍然と見入りたる時しも、耳許近く、鶯の、金切聲にて鳴き立てしならむ。故に、鶯の、われを恨み咎むるものと聞做して、辨疏せしが趣向なり。此の種の構想は、ようせずは、浮華に流れて、氣格高からざる弊あるを、これは、さもなきのみならず、句々、力あるは、老手の業なり。三句は、初句の上にくぐらして聞くべし。

し。

典侍治子朝臣

散るは女の鳴くにこそまるものならはわれ鶯におこらまじやは

(釋)一首の意は、散る花が、惜みて泣く其の爲に、散らすにとまる物であらうならば、自分は泣く事も、あの鶯に劣らうか、劣りはすまいとなり。

(評)いか程泣きたりども、とまらぬもの故、自分は止むなく、泣きたさを俵へて居るの餘意を含めり。例のわが落花を惜む心より、鶯の啼くを花を惜むものとして、惜むことならば、何ぞ、鶯に劣らむやと主張す。おのづから、脂粉の氣ありて、情致饒し。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとてあける時に  
よめる

藤原後蔭

花のちるこそやわびしき春がすみたつ田の山のうぐひすの聲

(釋)仁和の云々、仁和のは、光孝帝の御世の意、中將のみやすん所は、この御世の更衣の、皇子を生み奉りて、御息所となりたる人にて、中將なりし人の子姝などなれば、まか稱せしなるべし。歌合せむとてあける時のて文字、義理通せず。次に、素性の歌の詞書の、同文なるに、彼方になければ、ここなるは、衍字ならむ。さて、豫定のありて、遂に爲さずなりにし、歌合の料の歌なれば、かく書けるなり。○わびしき、つらく難儀に思ふこと。○たつ田の山、大和國

の龍田山なり。春霞立つと上句よりいひかけたり。

一首の意は、花の散る事を、なさけなくつらき事に思ふのであるか、長閑なる春の霞の、たつといふ名の立田山にて、鶯の鳴くことゑのするはと云なり

(評)立田山は万葉集にも、

わが行きは七日は過ぎじ立田彦ゆめこの花を風に散らすな

など詠みて、櫻の花の名所なり。陸紅飛白片々として、塵に化し泥に委するは、あたりまき極みなれば、さし當りて、盛になく鶯を、同情に想像せるは、例の事なり。三句の春霞は、立田山の序詞ながら、時下の景物を借りて、句とせるにて、多少、そのあたりの打霞めるけしきもあるなるべし。結句、鶯のなくといひても宜かるべきを、鶯の聲と一轉語を下して、上下の句意を参差せしめたるは、語意の迫らず、語調の緩らかならむ事を欲して、陽春の長閑なる調に協へたるものぞ。これ、作者粉骨の處にして、詞人の記憶すべき秘訣なり。立田山と、鶯の聲との取合せも、打任せては、不倫にてそぐはぬやうなれど、身既に、其の山中にありての作なるうへは、異論なかるべく、却りて、鶯の鳴くが盛なる趣も見ゆめり。但、三句以下の大らかなる調に對して、初二句、緝くからびて力振はざる心地するはいかに。六帖には、二句、事や悲しき、結句、山鳥の聲とあり。

鶯の鳴くをよめる

そせし

木傳へはおのが羽風に散る花をたれにれほせてこゝら鳴くらむ

(釋)○木傳へは 木の枝を傳へばの意。○おのが 己れがなり。○羽風 羽の煽りに生ずる風をいふ。○おほせて 負はしめての意。○こゝら 俗の澤山の意なり。

一首の意は、鶯が、花の枝をわちこちと飛びて傳ひあるけば、自分の羽風に煽られて、散る花であるものを、誰れに其の答を塗附けて、あのやうに恨めしうに、大さうに鳴くのであらうぞとなり。

(評)前の「吹風を鳴きて恨みよの意想と、同巧異曲なり。但、彼れは、猶豫なくさし當て、自分の恨まれたる趣なれば、おのづから、語調の急迫せざることを能はず。これは、又、大やうに、誰れにおほせてと汎くかけて、自分をその中に含めたれば、語調も幾分かゆるやかなり。このけぢめ味ひ知るべし。初句のばの辭、方ある事例の如し。ソットして置けば、散る答ではなきをの意、其の裏面に生ずるなり。さて、詞書を引放ちては、何の木傳ふとも、何の羽風とも分き難けれど、實地に、鶯を聞きての作なるうへに、その風情一首のうちにくぐりたれば、却りて、いひ顯はさるるを妙なりとす。

初句、六帖には、鶯の、二句、顯本には、おのが羽風にとあり。羽ぶきは羽振にて、詞古し。眞淵は、もとは羽ぶきなりけむといひ、又、鶯のといひ顯はすを難じて、詞書と歌と相對へて曉らしむるが、この集の心づかひなりといひ、景樹は、この二つを取合せて、鶯のおのが羽ぶきにといふを優れりとせり。顯昭は、羽風は、今少しわらはなりとて、羽ぶきと執せり。お



のれも、この説に左袒す。又、初句は、眞淵の説當れりと覺ゆれば、本文のを以て正しとす。

鶯の花の木にて鳴くをよめる み つ ね

あるしなき音をも鳴くかな鶯のこころのみ散る花ならなくに

(釋)花の木 花咲く木は何にてもあるべし。○あるし 驗なり○鶯の 鶯がなり。○ならなくに ではないのにの意なり。

一首の意は、鶯が、何の驗もなき聲を立て、も鳴く事よなア、鶯の鳴くに關はらず、いつの年も、遂には散りて、今年ばかり散る花ではないのに、あのマア、今更らしく、鶯の鳴く事はどなり。

(評)さて、嘯み分けのなき鶯かなといふ餘意を含めり。わが花の散るを惜む情より、鶯の鳴くをも、其の意に聞做せるは、例の事なり。三句、初句の上にはまはして聞くべし。結句、鶯に強く當りて、語りたらしむ如き語氣に、面白味あるにて、聲調、またよく諧へり。

題をらす よみ人あらず

こまなべていざ見に行かむ故里は雪このみこそ花は散るらめ

(釋)○こまなべて こまは駒なり。もと、小馬の義にて、弱き馬の事なれど、後には、汎く、馬をいへり。なべては並べてなり。○故里 爰にては、舊都の意と覺し。

一首の意は、諸君御一所に、馬を乗並べて、打連れてサア、見に行かうぞ、この節は、さだめ

て、故里は雪のやうにばかり、盛に花は散る事であらうとなり。

(評)早く見に行かすは、大方散果つるならむの餘意を含めり。眞淵は、本末の句共に、すこしの巧なく、あるがまゝに詠みて、何となく、面白き歌なり、奈良の京の末の人なるべしといひ、景樹は、こは遷都のはじめ、奈良の舊都を忍びて、思ひ立ちける人の詠めりしならむ、今の都人は、皆、奈良人にて、誰かは誘はれざらむなれば、駒なべてといふべしといへり。實に、奈良の京の、花多かりしならむと思はるゝ由は、前の平城帝の御製にも、花を詠ませ給ひ、後にも「いにしへの奈良の都の八重櫻と詠めるぞ。されば、落花人無くして、寂々たる故帝京の春を懷はひ、いかで、往きて見むの念起らざらむ。況や、平安の新都よりは、行程僅に十里許、軽く、鞭を春風に揚げ、三才駒に白泡食ませて、以て、一日路の遠乗を試みむはいかに愉快ならむ。歌の風調は、奈良時代をかけたる、さる老人のものには非ず、今少し下れり。又、その口吻も若びたる處ありて、少壯の人の作と覺しければ、何ばかりの相違もなければ、弘仁の頭を盛り人の、詠めりしものか。

○

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もこもにあらむものは

(釋)○何か かは反動の辭。○あらむ あられむの畧なり。

一首の意は、惜むにも止まらず、はかなく散る花を、恨むべき事ながら、何の恨まらざるぞ、其の

故は、よし、花が散らずありとも、此の世の中に、自分の身も、その花と一所に、何時までも、在られやうものか、決して、わらるゝものではないとなり。

(評)どもには、散らぬ花と共にの意なり。散る花と同様にの意に見るは精しからず。ともすれば、所縁につけて、人世の無常を觀するは、奈良朝時代をかけて、佛教の、人心に浸染せし結果と見るべく、この頃の社會にては、既に、普通の觀念となれりしなれば、別に珍しとするに足らず。

小野 小町

はなの色は移りにけりか徒にわが身世にふるながめせし間に

(釋)○移りはけりな 變つて仕まうたワイナアの意、なは歎詞。○徒に 俗言のムダニに當る。○世にふる 世の中に經る意、年の寄ることにいふ。又、ふるは長雨の縁語。○ながめ 長目にて、物思ひする時は、何となく、空しく、一方を見詰めて居るものなれば、物思ひする事を長目といへり。それに、長雨をいひ懸けたり。

一首の意は、見むとたのしみし花の色は、早くも變つてまうたワイナア、何とはなしに、ムダに、自身の年寄る事を嘆きて、ウットリと、物思ひをして居たりし間に降りし長雨にサとなり。

(評)のれなる暮春の霖雨に、物思ひしつゝある間に、庭前の花の色の、あせて汚けになり果て

しを見て、それに寄せて、わが容貌の美色の變るを嘆息せるなり。元來、譬喩を混用したる歌なれば、勢、巧なるべき等にはあれど、下句の、幾重にも、意をうら重ねたるが如き、巧緻に過ぎて、ふとは聞取り難くや。人情の機微に訴へて、神速に、同感を惹起さしめむを本旨とせる、詩歌の好處には非ざるべし。さはいへ、これも、上手の仕業なるは論なく、其の和きたるいひのなさは、常に、女流の歌と見ゆ。耳立ち易き、にの辭の、四ッまでも重なりながら、聲調のなだらかなるを、古來稱美せり。又、世にふるの解は、諸説まち／＼なれど、今は、石原正明の説に據れり。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せんごちける時によ  
める

そ せ い

をこし思ふこゝろは糸によられなむ散る花毎にぬきてこゝめむ

(釋)○糸によられなむ 糸によられて欲しいの意、なむは希望の辭なり。一首の意は、散り行くを惜しと思ふこの心は、ドゥア、糸によられて欲しいワイ、さらば、散る花といふほどの花を、悉く、其の心の糸にて貫き通して、他所へ散乱せぬやうに留めむとなり。

(評)兒女など、手すさびに、花片を多く、糸に貫き通して、花輪に作りて遊ぶ事あるを思ひ寄せて詠めるにや。散る花毎にぬかひといへるは、即ち、其の散る花毎に、心のたぐひて惜まるゝ趣

なり。さて、心は糸によらる、物ならぬを、幼く愚にいへるが、歌の一體にて、前にも屢、評せるが如し。されば、其の間に、一點の分別をも着せざる筈なるを、廣蔭が、惜む心の、糸のやうに細くなるが、細り序に、まことの糸に云々といひ、景樹が、心に形ありて、糸に造らるゝものならば云々といへるは、蛇の足なり。この歌も、乃父の餘風あり。

志賀の山こえに女の多くあへりけるに詠みてつかはしける  
つらゆき

あづさ弓はるの山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

(釋)志賀の山こえ云々 北白河の瀧の方より上りて、如意が嶽を越えて、近江の志賀へ出づる道を、志賀の山越といふ。經信卿記に「經於瓜生山西歩行とあり。是れは、天智帝の建て給ひし、志賀の崇福寺へ詣づる道なり。崇福寺は、世に、志賀寺とて、昔は甚だ、諸人の信仰せし寺なれば、貫之も定めて、ここに詣でしなるべし。あへりける女も、同じく、其處よりの歸路なるべし。女の多くあへりけるは、女が多勢出で來逢ひたるをいふ。○あづさ弓 春の枕詞。○道もさりあへず 道も避くる間なくの意なり。一首の意は、春の頃山あたりを越えて來れば、道も除けて居る間もなく、花がサ、バラ／＼散つて來たワイとなり

(評)花を女どもに喩へて、避くべき道もなく、當惑したるやうに誇張したるが、彼の婦人連に對せる、戯れ言にて興趣あり。もとより、この山越えは、そのかみ、花の多かりし處と見ゆれば、目前の實景を、直に、轉用せしを、作者の働きとす。道もさりあへず散るといへるに、多人數うち群れて出で來れる趣、見るが如し。さる山越の道に、思ひの外に、花やきたる壺折姿の上臈の、數多出逢ひたらむは、いかに珍しからむ。いかで、心ときめさせざるべき。さてこそ、かゝる、風流なるすき業もせらるゝなりけれ。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

春の野に若菜つまむここのものを散りかふ花に道とまどひぬ

(釋)○若菜 打任せては、春の初の七種の菜にいへど、弘くは、おはぎ、蕨の類に至る、春のうち

の雜菜をいふ。爰も、其の意なり。○散りかふ かふは交ふにて、縦横に散亂るゝをいふ。○まどひぬ ぬは過去の助動辭なり。

一首の意は、この春の野に、只、若菜を摘まむと思つて來たものを、それにマア、左より右より、散りまじる花の爲に、若菜摘みに行くべき道は、踏迷うたワイとなり。

を間違へたりと云へるが、をかききなりといへるは、よく、其の情實を穿ら得たり。

(二三)

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山べに寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

(釋)山寺に云々 けるにのに文字は、よにて、夜の義ならむと、宣長の疑へるは、あらし。かやうに、歌とたがはせて書くが、この集の体なり。○やどりして 宿をとりてといふが如し。

一首の意は、花の散る春の山べに、宿をとりて寝たるその夜は、晝間と同じやうに、寝て居る夢のうちにも、花がサ散ったワイとなり。

(評)作者、心願の筋ありけるにや、ある山寺に参籠せるが、折しも、花の散る盛りにて、盡日惜み暮せる其の夜の夢に、また、花の散るを見たるより、花は現の時ばかりか、夢路にまで散りかかれりと、驚訝せるが趣向にて、頻りにまきりて、散りに散る、花の状思ひやらる。躬恒のうた、

おきふしに惜むかひなく現にも夢にも花の散るをいかにせむ

を、一層巧みたるにて、斬新なり。又、山寺に一宿したるを、わざと花陰に寝たるやうにいへるは、夢のうちにも花の散るといはむ伏線なり。初句は、二句を隔て、三句へ係る。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

ふく風と谷のみづとしなかりせばみ山がくれの花を見まじや

(釋)○水とし しは強辭。○み山がくれ 山陰に隠れたるをいふ。みは例の美稱。○や 反動の辭なり。

一首の意は、吹散ちす風と、散浮きたるを流す谷川の水とがサ、なかつたものならば、山の奥に隠れて咲居る花を、見やうかマア、見られはすまいとなり。

(評)さても嬉しきは、風と水との情なる哉の餘意を含めり。その散浮く花を、直に、山奥の花と速断せるは、床しう懐かしうする、おし當て心ながら、あたりは、花の木のみなき、山路なる事も知られたり。さては、折角の山踏みに、目ざす花にも逢はで、失望しつゝもありけむを、纔に、澗水に一点の紅を見付けたる、いかでか、嬉しからざるべき。いかでか、吹く風と谷の水との勢を痛ひて、一言、感謝の意を表せずしておらるべき。さてこそ、この三十一字は、歌ひ出でられたるなめれ。

上句、六帖に、谷川の流れて來ずはおもほえずとあり。

志賀より歸りけるをうかどもの花山に入りて、藤の花のも  
こゝ立寄りて歸りけるに、よみておくりける、

僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るこも

(釋)志賀より云々 前にもいへる、志賀寺へ参詣して歸りける女達が、遍昭が住持せる、花山寺に入

(二三)

(二三四)

りて、庭の藤の花を見て歸りけるなり。定めて、京の宮女連なるべければ、京へ歸り行く跡を追はせて、この歌を贈りけるなるべし。○よそに見て 他人向に、よそくしく見るをいふ。○はひまつはれよ 聲を延べて、這ひ纏へよの意、よは命令の辭より。一首の意は、こゝに立寄りながら、自分をよそに見て歸らうとする人に、コリヤ、藤の花よ、這ひて纏ひ附きて、是非引留むるやうにしてくれよ、假令、それが爲に、其の枝は折れるとも構はずにサとなり。

(評)此の時代の婦人は、佛教の心醉者なれば、志賀寺に參詣したる程にて、當代の智識なる、遍昭に歸依せし事は、論なかるべく、屢、花山の法窟を驚かして、法音をも諦聽せしならむに、今、現に立寄りながら、住持の機嫌をも伺はず、藤の花だけ見て、すぐに歸りけるより、よそに見てとはいへるなり。諸註、これを、藤の花をよそに見る意に解けるは、いかい。詞書の、立寄りて歸りけるといへる詞續きは、其の間に、猶豫なきさまなれど、そは、藤の花を見たる即ち、脇目も振らずして歸りける意にて、現に、花の蔭をも立馴らして見たるを、いかで、よそに見るとはいふべき。

結句、六帖には、どかむ間をたにとあり。意は、其の人に纏ひ附きたらば、そを解捨て、後、その人は歸るべし。然らば、藤の花を解居る間サへモ、どいめて見むとなり。眞淵は、これ、この僧正の口振なり、枝は折ることもいへるは、理りつさず、詞もよしなしといひ、景樹もこれを是として、深く慕へる意を、かく、みやびに面白く、まかも、いひはてすして、わざやかに

さかせたらむ、凡器の及ぶ所に非ずとまで替せり。従ふべし。

家に藤の花咲けりけるを人の立こまりて見けるをよめる

躬 恒

わが宿に咲けるふちなみ立返り過ぎがてにのみ人の見るらむ

(釋)家に 躬恒の家なり。○ふちなみ 藤の花の靡くよりつきたる名、藤といはむに同じ。さて、波に寄せて、下の、立返りにかけ合せたり、○立返り 引返し／＼するなり。○過ぎがてにのみ 通り過ぐる事が、ま難きやうにはかりの意なり。

一首の意は、よくもなき自分の庭に、咲きて居る藤の花なるを、何故に、立戻り／＼して、通り過ぎ難きやうに、只管、人が見る事であらうぞとなり。

(評)この筆法を、世に、卑下自慢といへり。詞のうへにては、我れからおとして、立止まりて人の見るを訝れるさまながら、底の意は、それも諦まりは、花のよきからなりと、落着せしむるいひ倣し、婉曲と稱すべし。三四の句間に、例の何故にの語を挿入して聞くべき格なり。人の前には、「まづ心なく花の散らむといへる、花のと同じく、語調を緩和したり。又、藤なみを淵波と寄せたるやうに解せる人もあれど、さては、織巧に傷くにや。それも、池の藤なみなどあらむには、さもと覺えぬべからむを。

結句、一本に、人の見ゆらむとありけるを眞淵は采りたれど、この歌の體にてはまよらす。

(二三五)

題をらす

よみ人をらす

(二二六)

今もかも咲きにはふらむたちばなの小嶋のさきの山ぶきの花

(釋)○今もかも 今ものものは、物を含めていふ辭、かものかは疑辭、もは歎詞。○たちばなの小嶋のさき 地名なり。大和國高市郡飛鳥の橋の島といひ、或は、山城國宇治川に、山吹の瀬といふがある、其處なりともいひて、定かならず。○山ぶき 榊棠なり。歎冬と書くは當らず。一首の意は、昔見たりし時は、見事に咲匂ひてありしが、この節も相變らず、咲匂ふ事であらうかマア、あの橋の小嶋の崎の山吹の花はとなり。

(評)万葉集に

かはづ鳴く神なひ河にかけ見えていまや咲くらむ山吹のはな  
とあるを、所を易へたるのみと、眞淵のいへるは、顛倒せり。万葉のは、二三の句調も、七五に流れて、よほど今めきたれば、却りて、この歌より後の作と覺し。契沖が、藤原の宮より、奈良へ都を遷されて後、故郷を思ひて詠めるにやといへるは、よく格調を聞知りての説なり。されば、橋の小嶋の崎も、大和國の方とせむが、ふさはしからむかし。且又、万葉のに、意相似たりとするも妄なり。これは、初句のもの辭を、二つながら歎辭と見て、今や咲くらむと同意と思へる故にて、新註は、大抵この誤を承けたり。却りて、舊註に、今も昔に變らずと解けるを當れる。新都の奈良の京に、年所を經し人の、暮春には、必ず相馴れし、舊都の飛鳥の橋の

小嶋が崎の山吹の花を思ひ出でて、今もかもと打出でたるに、限りなき悲愴の情籠りて、懷土望郷の念に堪へざる狀、思ひやらる。語意高簡にして、格調ををしく大らかなり。

はる雨に匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹のはな

(釋)○あかなくに 飽かぬになり。○なつかし 慕はしく離れ難き意なり。

一首の意は、春雨に濡れたる美しき色艶も、見飽きのせられぬうへに、香までがよくて、側を離れどもなく懐しいワイ、山吹の花はとなり。

(評)雨のまゆりには、香のまさる物なれば、なつかしきはさる事なめれど、山吹の香の、眞官に觸れて、愛すべき程の美感を起さむ事ぞ、餘りなるべき。此の頃には、女郎花にも、香を詠みたり。但、全く、其の實なきにはあらじ。幾群となく咲満ちたる花のうへに、風などの吹渡りたらむには、今も打匂ふ心地のするにや。いろもと香さへど、對照せまめたり。すべて、心詞に盡きて、言外の餘味なし。

山吹はあやなな咲きを花見むこ植ゑけむ君がこよひこなくに

(釋)○あやなな咲きを あやなはあやなくにて、分別なしの意に用ゐたり。な咲きとは咲く事勿れなり。○けむ 過去を想像する助動詞○こよひ 今宵なり。

一首の意は、山吹は分別ない物ぞ。このやうの事ならば、決して咲くなよ、花を見やうと思ひて、植ゑて置かれたであらうあの御方が、今夜來もせられぬに、咲きても、何の詮なき事なるをどなり。

(評)この歌の妙趣を會得せむとせば、まづ、往古の風俗を知らむを要す。當時は、夫婦と雖も、初より相住せず、男の方より、夜毎に、女の許に通へるなり。これ、忍ぶの、怨むのといふ戀歌の、昔に多かる理由にて、必ずしも、風俗の淫猥なりしには非ず。今も、聲取したる女の詠める歌にて、其の聲の、山吹を前栽に植ゑせさて、花咲かば、諸共に見むのあらましなりつるに、障る事ありてにや、夜枯れたる折しも、猶豫なく、山吹の花の咲出でたるを見て、肝心の植ゑ主も來ぬに、咲く山吹はあやなしと罵れるは、即ち、其の花も咲くに來ぬ人こそ、あやなけれど、間接に怨めるものなり。こよひとあるに、其の當夜ばかりの、長からぬ夜離れの趣見たり。情景相合ひて、比興に深く、幽怨の意隱然たるは、佳作といふべし。

よと野の川のほとりに山吹の咲けりけるをよめる

つらゆき

よと野がは岸のそまぶさふく風に底の影さへうつろひにけり

(釋)よし野川、天和國吉野山より流る、川なり。

一首の意は、吉野の川の岸の山吹を、吹散らしたる風の爲に、誘れさうにもなき、水底に映れ

れる影までか、思ひかけず、散つてましましたワイとなり。

(評)吉野川は、山ふところにて、おのづから、風も劇しく、流も急なる實境を知らせて、影さへ移ろふといはむ、伏線をなせり。山ぶさふく風と疊み重ねて、聲調を諧へ、又、岸と底とを相對照せしめたり。岸の花の散れば、その影なる故、底のも散りて見ゆるは當然なるを、全然、別物のやうにして、幼く愚に詠めるを一ふしとす。前にも、この作者の「夢のうちにも花を散りけると詠めるは、同一の構想なり。さて、上句長けありて、高調と聞ゆるを、下句、格調、稍卑し。完作とは稱し難くや。

題をらす

よみ人をらす

かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはまじものを

この歌はある人のいはく、橘の清友がなり。

(釋)○かはづ鳴く、かはづは、天曆以後の歌には、今、蛙といふ田居中に喧しく鳴く虫をいへれど、この集より以前のは、夏の頃より秋を旨と鳴く、河鹿といふ物なるべく覺ゆ。さては、春はいまだ鳴出でされば、「かはづ鳴く神なひ川の如く、只、其の所の物を頭におきて、序詞としたるならむ。○井手、山城國相樂郡にあり。橘諸兄公、此の地に住給へるによりて、井出左大臣ともいへり。井手の里、井手の玉川、皆、この地なり。其の玉川の邊にある山吹を、井手の山吹といへるなり。

一首の意は、この井手の山吹が、思ひしより早く、散つて去まうたワイ、今すこし早く来て、花の盛に逢はうであつたものを、さて、残念なる事をまたりとなり。

(評)二段に切と、のへて、まかも、未をいひさしたる、無限の感慨を含むる語法なり。又、はじめより、井手の山吹と打出でむ事の、唐突ならむ事を慮りて、かはづ鳴くの序詞を置けるも、かのづから、句ありて、優美なる観念を深からしむ。万葉集に

君が家の花たちばなはなりにけり花のさかりにあはましもものを

この橋を、山吹に取換へしのみなれど、聲調のうるはしさは、却りて優れり。品格高く、餘韻また饒かる歌と覺ゆ。

左註に、橘清友とあるは、諸兄公の孫、桓林皇后の御父にて、仁明帝の御外祖父に當るを以て、太政大臣を贈られし人なり。されば、此集の選者の、橘の清友がなと書くべきにあらず。全く、後人の書入れし注とすべし。但、井手の地は、橘氏に縁故あり。歌の體格により、時代を推すにも、或は、清友公あたりの作ならむ。

春のうたさてよめる

そせ

思ふとち春の山べにうちむれてそこもいはぬ旅寐をてら

(釋)○思ふとち 氣の合うた同志といふ意。○うちむれて うち接頭語、むれては群れてなり。○そこもいはぬ 必ず、其處とさしてもいはぬの意。○さてしが さて見たいの意、かは希望

辭なり。

一首の意は、氣の合ひたる同志、興味の多き春の山邊に、多勢連れ立ちて、一日遊びて、日の暮れたる所を宿として、行きつき次第に、必ず、其處と定めたる事なき、旅寐をして見たき物なりとなり。

(評)さらば、いかばかり、愉快に楽しき事ならむの餘意あり。春のの一語、眼目なり。よろづの花咲き、いろくの鳥啼く、春の山邊なれば、面白き筈なれど、それも一人行きては、十分に愉快ならねば、入懇の朋友三四輩と共に行き、又、日の暮るゝを限として歸りては、十分ならねば、一夜を泊る事とし、又、其の宿を必ず其處と指定しては、煩はしくて自由ならねば、行きつき次第、何處にても泊る事として、遊びて見たしと、作者が遠慮なき、十分の欲望を述べたるなり。蓋し、作者素性は、この時代には、稀なる遊覽好きの旅行家なりけむ、東山、北山、花山のあたりは、いふも更なり。奈良の手向山、石上、近江の石山、吉野の宮の瀧、河内の立田山など廻りありきし事は、その家の集に散見し、野邊山邊の二語は、絶えず、其の口頭を往來して、謳歌談嘆せられたりき。されば、歌もかのづから、脱俗の氣味あれど、素より、渠れは、枯木死灰的の老秃にあらず。乃父の氣質を遺傳して、極めて、情の勝ちたる人、其の境遇の止むなくして、殊更に、烟霞の癖を助長せしめしもの、如し。故に、其の歌や、また、蔬菜の氣、抹香の臭味なきは、大に喜ぶべし。

四句、顯本に、そこともまらぬとあり。



春のこく過ぐるをよめる

み つ ね

(一三三)

あづさ弓はる立ちこより年月のいるが如くもおもほゆるかな

(釋)○あづさ弓 前に出でたり。春の枕詞。○年月 時日といふ程の事なり。○いる 射るなり。一首の意は、冬のうちは、年月も長く覺えしが、梓弓を張るといふ名の、春の立ッたそれから、年月の早く經ちて、矢を射るやうにマア、思はるゝ事よとなり。

(評)春は、四季のうちにて、殊に、物見遊山の興ある時なれば、浮かれ心に任せては、光陰の移るを覺えざるより、あわたゞしく、春の暮れたる心地して、打驚ける狀なり。この作者、又、

はかなくて春二月は過ぎにけり花の盛はすぎがてにせよ

と詠めるも、今と同意なり。梓弓は、既に、春の枕詞に用ゐたるを、再び承けて、速に早しの意を、射るが如くもと形容していへり。又、年月といふ語は、春にては穩かならず。拾遺集及び、六帖、家集に、歳暮の歌の中に入りたるが正しからむといへる説もあれど、誤解なり。これは熟語にて、年は軽く添はれるまでなれば、時日なぞいはむに同じき語なるをや。さて、縁語の鎖り續け、狂歌めきたるは、この作者の下作なるべし。四句、家集に、いにしがごととあり。

やよひに鶯の久しう聞えざりけるをよめる

つ ら ゆ き

なまこむる花をなけれは鶯もはてはものうくなりぬべらなり

(釋)○なまこむる 鳴きて留むるなり。○ものうく 大儀に面倒なる意なり。○鶯も もは例の強き意にて、サヘモといふに當る。

一首の意は、いかに惜みて鳴けども、散るを留め得る花がサなき故に、流石の鶯サヘモ、揚句のはてには、鳴く事が、大儀になつてしまひさうな様子だワイとなり。

(評)それ故、近來、一向鳴かずなりしならむの餘意あり。わが惜むにもとゞまらず、只管、花のち散るに、今は精も根も竭果てたる折しも、この頃を盛に鳴くべき鶯の、久しく鳴かざるを見て、其理由を同情に推察えたり、鶯の鳴くを、花の散るを惜みて鳴く趣に詠むは、例の事なり。

やよひのつこもり方に山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる

ふ か や お

花ちれる水のまにこめくれは山には春もなくなりけり

(釋)つこもり方 晦日近くの頃を弘くいふ。○まにこめ 隨ひての意。○とめくれは とめは、景樹の説に、よく心を注ぎ、目を留むる意なりとて、普通、尋ぬる意に解せるを破したり。一首の意は、花の散りて流れ居る、川の水筋に隨ひて、水上の方へと、注意しつゝ來れば、花の散れる麓とは違ひ、山には意外に、花ばかりかは、はや、春もなくなつて去まうたワイとなり。

(一三三)

(評)麓の里こそ散り方なれ、山ふところには、猶、風隠れする花もありて、春めきたる景色ありぬべしと、谷川傳ひ分け入りたれば、豈に料らむや、滿山緑盡して、却りて、夏めきたるさまなれば、山には春もなくなれりと、愕かるゝなり。山にはのはの辞は、花散れる麓に對へ、春のもの辞は、花もど含めたり。いまだ、三月の下旬なれば、春の無くなる理はなけれど、春の證として見るべき物無きを、まかいふが歌なり。

六帖に、二句の水を道とし、結句は残りざりけりとありて、夏の歌とせり。又、北村季吟の抄本に、四句、山にも春はとある、意はよく聞えたれど、平凡なり。

春を惜みてよめる

もごかた

をしめともごごまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

(釋)一首の意は、立出でぬ前ならばとに、春の君が、はや、其の歸途にサ、霞の立つ如く立出でたりと思へば、今更、別を惜みても、とても留りはせぬに、それを、やはり惜むは、愚なりとなり。

(評)人の別には、いまだ立せぬうちにこそ、惜みて留むる法もあれ、既に、門出しては、其の甲斐なきを下に思ひて詠めり。今日しも打霞みたる、うちつけ心より、下に、立つといひ出でむ縁語に、春霞と熟語に用ゐたるにて、霞の主ならぬ事は、前の、今よりは梅のはな植ゑしあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

の處に於きて、委しく説けるが如し。されば、霞に重きをおきて、春霞の歸途に就けるやうに解ける説は、粗漏なりや。畢竟、春を擬人して、其の暮行くを、彼れが本所へ歸るものと見たるが、一の趣向なり。巧なる處もあれど、感氣に乏しくて、餘韻の人を動かす處なきは、これ、元方の歌の通弊なり。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた おまかせ

こそ絶えず鳴けや鶯ひごよせにふたよびごたにくべき春かは

(釋)○こそ絶えず 聲を絶やさずなり。○鳴けや やは命令の辭なり。

一首の意は、これ鶯よ、随分、聲を絶やさずに、鳴きてくれよ、なせなれば、一年のうちに、三度四度はあるか、二度とサへモ来るべき春かマア、只の一度ならでは來はせぬ、貴き春ぞとなり。

(評)春の日數も少なくなれる頃、鶯の聲の途絶えたる折などに詠めるならむ。一年に二度と來ぬ春なれば、今のうちに、汝の鳴くべき時を外さず鳴けと、鶯に警告したるなり。又、一年に二度と、數量の語を懸け合せて闘はしめたるが、詞のわやにして、かく、春の來ぬ事を丁寧に諄くいへるに、今の殘春の貴く大切なる趣を反襯したり。構想既に面白し。詞遣ひ又、巧者。初句、六帖に、聲たてどあり。

やよひのつごもりの日、花つみより歸りける、女どもを見て

よめる。

み つ ね

(三三)

ことむべき物とはなしにはかなくも散る花をここにたぐふ心か

(釋)花つみ 舊曆の二三月のころ、野山に出でて花を摘みて、先祖の墓を祭り、佛に奉るをいふ。草花などを摘むなり。○物とはなしに 物ではないのの意。○はかなくも 確と取留めざるやうの意、もは歎詞。○たぐふ 附添ひ行くをいふ。○心か かは歎詞なり。一首の意は、附添ひて行きたりとて、留められやう物ではないのに、あの花が惜さに、ウワイもなく亂れて散る、花といふ花に、悉く附きて行く、自分の心なるよとなり。

(評)摘みためたる花束をもて、女どもの相戯れつゝ来るに、春の末の花なれば、脆くも、片々と打散るなり。さて、其の散る花を女共に譬へたるは、前に、貫之が「道もさりあへず花ぞ散りけ」と詠めると、同趣向にて、今、花摘より歸り来る美人どもを見れば、一人一人に心移りて、それにも、これにも、わが心のたぐふ事かな、さりとて、遂に、其の女を引留め得べきにはあらざるにと、人知れぬ仇心をはかなみたる譬喩歌なり。柔艶にして致あれども、格調卑ければ、遂に、貫之のに下る事二等なるべし。又詞書に、三月晦日と、其の時をことわりたるは、春の限なれば、散行く花の、いよくとめ難き意を、確かに聞かせむとての業なり。

やよひのつてもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて人  
につかはさける。  
なりひらの朝臣

ぬれつゝぞまひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば  
(釋)○ぬれつゝ、濡れながらの意。○まひて 無理やりへの意なり。

一首の意は、この藤の花を、今日のこの雨に、濡れくしてサ、無理に折ったワイ、なせなれば、もはや、當年の一年のうちには、春は幾日もあるまい、即ち、今日一日と思ふ故にサとなり。

(評)春を過ぎては、藤の花も見る甲斐なければ、雨を冒しても、今日折取て、貴君の御覽に入れたるなれば、其の心して見て給はれの餘意を含めり。歌には、雨ども、藤の花ともなければ、濡れつゝぞ折るにて、略、其の片端を聞かせ、餘は、其の日降れる雨と、贈れる藤の花とに譲りて、暫くいはざるものなり。實地に臨みては、必ず、これらの省筆法ある事を忘るべからず。又、濡れつゝ折るは、志の淺からぬ由にて、前にも「わが衣手に雪はふりつゝとあると同情なり。まひてといへる、姿も詞もめでたく侍るなりと、風躰抄にいへり。春はは、他の日数は多かれど、春は幾日もと、取出でていふ意にて、思ひ入りたる趣深し。

さて、伊勢物語に「昔衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。彌生の晦に、雨そは降るに、折りて、人の許へ奉るとてよめる、と詞書ありて、この歌を出だせり。三句、同書の塗籠本といふに、藤の花とあり。又、家集には、三句以下、藤の花春はけふをし限りと思へばとあり。景樹はこれを執して、初二句迫れる意調なるに、下句、幾日もあらじは、今日一日のみにおし話される意ならねば、語調弛びて打合ひ難し。詞書にも、晦の日とあれば、けふをし限りとある

をもて正しとすべしといひ、又、この集のは、伊勢物語の機入にて、物語の詞書は、晦と弘くかけて、必ず晦日の事ならねば、下句もこれにて適ふなりといへり。實に、詞書に親切なる見解にて、的論と覺ゆ。姑く、これを録して後勘を俟つ。

(一三八)

亭子院の歌合に春のはての歌 み つ ね

けふのみと春を思はぬ時たにもたつこそやすき花のかけかは

(釋) ○たつ 起つなり。立去る意にいへり。○かけ 蔭なり。

一首の意は、モウ、今日ばかりなりと、春を思はぬ時でサへモ、立去る事が容易く出来る、花の木蔭かマア、それでサへ、立去り難き花の木蔭なるぞとなり。

(評) まして、今日限りの春なれば、名殘惜くて、いよく、花の蔭は動かれぬといふ餘意を含めり。家集に、

けふ暮れてあすとだになき春なればたまくをしき花の蔭かな

同意ながら、率易に失して、滯澁の弊あるを思へば、恐らくは、この原作ならむ。刻意推敲の結果にや、字々力ありて、造句妙に入れり。老手と稱すべし。當時の歌合の判詞には、をかしと評せり。但、立意、理路に涉れる嫌あるは惜むべき哉。

# 古今和歌集卷第三

## 夏歌

題をらす

よみ人をらす

わが宿の池のふぢなみ咲きにけり山はこゝぎすいつか來鳴かむ

この歌、ある人のいはく、柿本の人丸がなり。

(釋) ○池のふぢなみ 池の邊なる藤花を、池の波に寄せて、いひ續けたり。淵波とまでは添へずあるべし。○咲きにけり にもけりも過去の助動詞にて、けりには歎息の意を含めり。○山はとどぎす 山の時鳥なり。時鳥は、陰曆四月の初より五月を盛に、里近くも、夜を旨として鳴く鳥なり。子規、杜宇、杜鵑、蜀魄等の文字を用ゐる。

一首の意は、自分の庭の池の邊なる藤の花は、意外に咲いたツイ、さては、山の時鳥は、いつ頃山から來て鳴かうぞとなり。

(評) 藤の花は、暮春より初夏にかけて咲き、時鳥も其の頃、やうく鳴き初むる物なれば、意外に、藤の花の咲出でたるに、夏の景氣を感じて、急に、時鳥を下待つ心になれる趣なり。山時鳥は、宿の藤波に對へたるにて、後世の歌の、山に何の意義なしにいひ續くるとは異れり。一首